



始



特230  
563



文學士 內海弘藏編

【改修版】

平記選



東京

株式會社

明治書院



## 例言

本書は、「太平記」を抜萃して、高等学校・専門學校及び師範學校専攻科等の教科用に當てる目的を以て故内海文學士の編纂せられたものを、昨年九月に於ける文部省の指示に準據して、更に改修校訂したものである。随つて、本文は流布本を底本し、特殊な訓み方は成るべくそのまゝ傳へむことを期して傍訓を施さへしたが、それと同時に、句讀を正し、段落を明らかにし、かつ屢々本文中の若干字句の削除をも敢へてした。頭註は學習者の程度を考慮して、極めて簡單に、佛語・故事・出典・地名・人名及び年時等に就き、必要不





可缺と思はれるものにとどめた。この改修擔當者は安藤英方である。

昭和十六年十月

目次

後醍醐天皇御治世の事附武家繁昌の事(卷一)……………一

關所停止の事(卷一)……………四

俊基朝臣再び關東下向の事(卷二)……………六

阿新殿の事(卷二)……………一〇

天下怪異の事(卷二)……………一九

師賢登山の事附唐崎濱合戦の事(卷二)……………二三

主上御夢の事附楠の事(卷三)……………三〇

笠置の軍の事附陶山小見山夜討の事(卷三)……………三三

主上笠置を御没落の事(卷三)……………四〇

赤坂の城軍の事(卷三)……………五二

遷幸の事(卷四)……………六〇

備後三郎高德が事附吳越軍の事(卷四)……………六二



相摸入道田樂を弄ぶ並闘犬の事(巻五).....六六

大塔の宮熊野落の事(巻五).....六〇

赤坂合戦の事附人見本間拔懸の事(巻六).....一〇〇

吉野の城軍の事(巻七).....一一一

千劍破の城軍の事(巻七).....一九

新田義貞に綸旨を賜ふ事(巻七).....一三〇

船上へ臨幸の事(巻七).....一三三

六波羅攻の事(巻九).....一四二

稻村が崎干潟となる事(巻十).....一五〇

筑紫合戦の事(巻十一).....一五四

官軍箱根を引き退く事(巻十四).....一六〇

長年歸洛の事附内裏炎上の事(巻十四).....一六七

主上山門より還幸の事(巻十五).....一六九

正成兵庫に下向の事(巻十六).....一七〇

正成兄弟討死の事(巻十六).....一七五

正成が首故郷へ送る事(巻十六).....一七九

義貞北國落の事(巻十七).....一八一

吉野へ潛幸の事(巻十八).....一八三

金崎の城落つる事(巻十八).....一八七

義貞自害の事(巻二十).....一九四

奥州下向勢難風に逢ふ事(巻二十).....一九九

先帝崩御の事(巻二十一).....二〇一

義助豫州へ下向の事(巻二十二).....二〇九

大森彦七が事(巻二十三).....二一〇

藤井寺合戦の事(巻二十五).....二二五

正行吉野へ参る事(巻二十六).....二二七

楠正行最期の事(巻二十六).....二三一

新田左兵衛の佐義興自害の事(巻三十三).....二三八



大地震並夏雪の事(卷三十六).....二五二

附録

皇室御系譜.....二五五  
 楠木氏系圖.....二五五  
 菊池氏系圖.....二五六  
 北畠名和兩氏系圖.....二五六  
 新田足利兩氏系圖.....二五七  
 北條氏系圖.....二五八

太平記選 (改修版)

後醍醐天皇御治世の事附武家繁昌の事

こゝに本朝人皇の始はじめ、神武天皇より九十五代の帝みかど、後醍醐天皇の御宇に當つて、  
 武臣相摸の守平の高時といふ者あり。この時、下臣しもの禮を失ふ。これより四海大き  
 に亂れて、一日も未だ安からず。狼煙天を翳かすめ、鯢波地を動かすこと、今に至るま  
 で四十餘年、一人として春秋に富めることを得ず、萬民手足を措くに所なし。つ  
 らつらその濫觴を尋ねれば、雷わづはひに禍一朝一夕の故にあらず。元曆年中に鎌倉の右  
 大將頼朝卿、平家を追討してその功あるの時、後白河の院叡威のあまりに、六十六  
 個國の總追捕使そうつふよしに補せらる。これより武家始めて諸國に守護を立て、莊園に地頭

元曆一 文治の誤。

後醍醐天皇御治世の事附武家繁昌の事



を置く。かの頼朝の長男左衛門の督頼家、次男右大臣實朝公、相續いて皆征夷將軍の武將に備はる。これを三代將軍と號す。然るを頼家の卿は實朝のために討たれ、實朝は頼家の子惡禪師公曉がために討たれて、父子三代、僅に四十二年にして盡きぬ。

その後、頼朝の卿の舅、遠江の守平の時政の子息、前の陸奥の守義時、自然に天下の權柄を執り、勢漸く四海を覆はむと欲す。この時の太上天皇は後鳥羽の院なり。武威下に振はば、朝憲上に廢れむ事を歎きおぼしめして、義時を滅さむとし給ひしに、承久の亂れ出で來て、官軍忽に敗北せしかば、後鳥羽の院は隱岐の國へ遷されさせ給ひて、義時いよく八荒を掌に握る。それより後、武藏の守泰時、修理の亮時氏、武藏の守經時、相摸の守時頼、左馬の權の頭時宗、相摸の守貞時、相續いて七代、政武家より出でて、徳窮民を撫するに足り、威萬人の上に被るといへども、位四品の際を越えず、謙に居て仁恩を施し、己を責めて禮儀を正す。これを以て高しといふとも危からず、盈てりといふとも溢れず。承久よりこのかた、儲

王攝家の間に、理世安民の器に相當り給へる貴族を一人、鎌倉へ申し下し奉りて、征夷將軍と仰いで、武家皆拜趨の禮を事とす。同じき三年に、始めて洛中に兩人の一族を居ゑて、兩六波羅と號して、西國の沙汰を執り行はせ、京都の警衛に備へらる。また永仁元年より、鎮西に一人の探題を下し、九州の成敗を司らしめ、異賊襲來の守を堅うす。されば一天下普く彼の下知に従はずといふ處もなく、四海の外も均しくその權勢に服せずといふ者はなかりけり。朝陽犯さざれども、殘星光を奪はるゝ習なれば、必ずしも武家より公家を蔑にし奉るとしもはなけれども、所には地頭強くして、領家は弱く、國には守護重くして、國司は輕し。この故に朝廷は年々に衰へ、武家は日々に盛なり。これに因つて代々の聖主、遠くは承久の宸襟を休めむがため、近くは朝儀の陵廢を歎きおぼしめして、東夷を滅さばやと、常に叡慮を運らされしかども、或は勢微にしてかなはず、或は時未だ到らずして、もだし給ひける所に、時政九代の後胤、前の相摸の守平の高時入道崇鑑が代に至つて、危機こゝに顯れたり。つら／＼古を引いて今を視るに、行跡甚だ輕くして、



衛の懿公が左傳に、「衛懿公好鶴、鶴有乘軒者、狄伐衛、公欲戰、國人受甲者皆曰、使鶴、鶴實有祿位、余焉能戰。」

秦の李斯が史記列傳に、「李斯出獄、與其中子俱執、謂其子曰、吾欲與若復牽黃犬、俱出上蔡東門、逐狡兔、豈可得乎。遂父子相哭、而夷三族。」

人の嘲を顧みず、政道正しからずして、民の弊を思はず、たゞ日夜に逸遊を事として、前列を地下に辱かしめ、朝暮に奇物を翫んで、傾廢を生前に致さむとす。衛の懿公が鶴を乗せし樂みはや盡き、秦の李斯が犬を牽さし恨み今に來りなむとす。見る人眉をひそめ、聽く人唇を翻す。

この時の帝後醍醐の天皇と申し、は、後宇多の院の第二の皇子、談天門院の御腹にておはせしを、御年三十一の時、御位に即け奉る。御在位の間、内には三綱五常の儀を正しうして、周公、孔子の道に従ひ、外には萬機百司の政怠り給はず、延喜、天曆の跡を追はれしかば、四海風を望んで悦び、萬民徳に歸して樂む。およそ諸道の廢れたるを興し、一事の善をも賞せられしかば、寺社、禪律の繁昌、これに時を得、顯密、儒道の碩才も、皆望を達せり。まことに天に受けたる聖主、地に奉ぜる明君なりと、その徳を稱し、その化に誇らぬ者はなかりけり。(卷一)

關所停止の事

大津―近江の國。  
葛葉―攝津の國。

九年の蓄―禮記王制篇に、「國無九年之蓄、曰不逞、無六年之蓄、曰急、無三年之蓄、曰國非其國也。」  
虞芮の訴―漢書母將隆傳に、「交讓之禮興、則虞芮之訟息。」  
諫鼓―淮南子に、「堯置二敢諫之鼓。」

それ四境七道の關所は、國の大禁を知らしめ、時の非常を警めむがためなり。然るに今壘斷の利に依りて、商賈往來のつひえ、年貢運送のわづらひありとて、大津葛葉の外は、悉く所々の新關を止めらる。又元亨元年の夏、大旱地を枯らして、旬服の外百里の間、空しく赤土のみあつて青苗なし。餓莩野に滿ちて、飢人地にたふる。この年錢三百を以て、粟一斗を買ふ。君遙に天下の飢饉をさこし召して、朕不徳あらば、天子一人を罪すべし、黎民何の咎ありてかこの災に遭へると、自ら帝徳の天に背ける事を歎き思し召して、朝餉の供御を止められて、飢人窮民の施行に引かれけるこそありがたけれ。是も猶萬民の飢を助くべきにあらずとて、檢非違使の別當に仰せて、當時富裕の輩が、利倍のために蓄へ積める米穀を點檢して、二條町に假屋を建てられ、檢使自ら斷つて、直を定めて賣らせらる。されば商賈共に利を得て、人皆九年の蓄あるが如し。訴訟の人出來の時、若し下情上に達せざることもやあらむとて、記録所へ出御なりて、直に訴を聞し召し明らかめ、理非を決斷せられしかば、虞芮の訴忽に停りて、刑鞭も朽ちはて、諫鼓も撃つ人なかりけ



り。まことに理世安民の政、若し機巧につきてこれを見れば、命世亞聖の才とも稱しつべし。(卷一)

俊基朝臣再び關東下向の事

先年―正中元年。

七月―元弘元年。

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後召し捕られて、鎌倉まで下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣、げにもとて赦免せられたりけるが、また今度の白狀どもに、専ら陰謀の企、かの朝臣にありと載せたりければ、七月十一日にまた六波羅へ召し捕られて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずるとも許されじ、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと、思ひ設けてぞ出でられける。

落花の雪に―新古今集に藤原俊成の歌、またや見む片野のみの、櫻がり花の雪ちる春の曙。

落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明かす程だにも、旅寢となれば物うきに、恩愛の契淺からぬ、わが故里の妻子をば、行くへも知らず思ひ置き、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限り

紅葉の錦を―拾遺集に藤原公任の歌、朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき。時雨もいたく―古今集に紀貫之の歌、白露も時雨もいたくもる山は下葉残らず色づきにけり。

元暦元年―壽永三年の誤。東路の丹生の―平家物語卷十、海道下りの條に、

と顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞあはれなる。憂きをば留めぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮き沈み、駒もとどろと踏み鳴らす、勢多の長橋うち渡り、行きかふ人に近江路や、世のうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかとあはれなり。時雨もいたくもり山の、木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、篠わくる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず。ものを思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧みる、故郷を雲や隔つらむ。番場醒井柏原、不破の關屋は荒れはてし、なほもるものは秋の雨の、いつかわが身の尾張なる、熱田の八劍伏し拜み、潮干に今や鳴海瀉、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕潮に、引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれと夕暮の、入相鳴れば今はとて、池田の宿に著き給ふ。元暦元年の頃かによ、重衡の中將の、東夷の爲に囚はれて、この宿に著き給ひしに、東路の丹生の小屋のいふせきに、故里いかに戀しかるらむと、長者の女が詠みたりし、その古のあは

俊基朝臣再び關東下向の事



第一句「旅の空」とあり。源平盛衰記には平宗盛下向の時の事とし、歌は太平記に同じ。作者はこれを混じ思へるなるべし。

命なりけり—新古今集に西行の歌、年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさよの中山。光親卿—東鑑二十五年、承久三年七月十日、中御門入道前中納言(宗行)相三伴小山左衛門尉朝長—下向、今日宿—于遠江國菊河驛、終夜不眠、獨向三閑窓、讀誦法華經、又

れまでも、思ひ残さぬ涙なり。旅館の燈火かすかにして、鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍河をうち渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み来て、そこも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、命なりけりと詠じつゝ、二度越えし跡までも、うらやましくぞ思はれける。

隙行く駒の足早み、日已に亭午に昇れば、餉進らすほどとて、輿を庭前に昇きととむ。轅を叩いて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなりと答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎に依つて、光親の卿關東へ召し下されしが、この宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水。 汲下流而延齡。

今東海道菊河。 宿西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、あはれやいととまさりけむ、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかゝるためしをさく川の同じ流に身をや沈めむ

有書三付旅店之柱事として、この詩を載す。作者はこれを院宣の筆者光親の事に思ひ誤れるなるべし。

夢にも人に—伊勢物語に、駿河なるうつの山へのうつつにも夢にも人の逢はぬなりけり。

上なき思に—新古今集に藤原家隆の歌、富士の根の煙はなほぞ立ちのぼる上なきものは思なりけり。

大井河を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛り、龍頭鶴首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は再び見ぬ夜の夢となりぬと、思ひつゞけ給ふ。島田藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れて、ものがなしき夕暮に、宇津の山邊を越え行けば、蔦楓いと茂りて道もなし。昔業平の中將の住家を求むとて、東の方に下るとて、夢にも人に逢はぬなりけりと詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いと涙を催され、向ひはいづこ三穂が崎、沖津神原うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思にたぐへつゝ、あくる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、潮干や浅き船浮きて、あり立つ田子のみづからも、うき世を廻る車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこそ著き給ひけれ。

その日やがて、南條左衛門高直請け取り奉りて、諏訪左衛門に預けらる。一間な



十王の廳—十王は  
秦廣王、初江王、  
宗帝王、五官王、  
琰魔王、變成王、  
泰山王、平等王、  
都市王、轉輪王  
にて、死して地  
獄に赴く者は七  
日毎にこれら各  
王の下に至りて  
その廳斷を經と  
佛教に説く。

る處に蜘蛛くも手てきびしく結ひて、押し籠め奉るありさま、たゞ地獄の罪人の、十王の廳に渡されて、首枷くびか手枷てかを入れられ、罪の輕重を糺すらむも、かくやと思ひ知られたり。(卷二)

### 阿新殿の事

さる程に、御謀叛を申し勸めけるは、源中納言具行、右少辨俊基、日野の中納言資朝なり、各、死罪に行はるべしと、評定一途に定まつて、まづ去年より佐渡の國へ流されておはする、資朝卿を斬り奉るべしと、その國の守護本間山城の入道に下知せらる。

この事京都に聞えければ、この資朝の子息國光の中納言、その頃は阿新殿くまのどのとて、歳十三にておはしけるが、父の卿囚人めしうどになり給ひしより、仁和寺邊に隠れて居られけるが、父誅せられ給ふべきよしを聞いて、「今は何事にか命を惜むべき。父と共に斬られて、冥途の旅の供をもし、また最後の御有様をも見奉るべし」とて、母に

御暇をぞ乞はれける。母御ははしきりに諫めて、「佐渡とやらむは、人も通はぬ怖ろしき島とこそ聞ゆれ。日數を經る道なれば、如何いかんとしてか下るべき。その上汝にさへ離れては、一日片時へんじも命ながらふべしとも覺えず」とて、泣き悲みてとどめければ、「よしや伴なひ行く人なくば、いかなる淵瀬にも身を投げて死なむ」と申しける間、母いたく止めば、また目の前に憂うれきわかれもありぬべしと、思ひわびて、力なく、今までたゞ一人附き添そひたる中間を相添へられて、はる／＼と佐渡の國へぞ下しける。

路遠けれども乗るべき馬もなければ、はきも習なはぬ草鞋わらじに、菅の小笠かたがを傾けて、露わけわぶる越路の旅、思ひやるこそあはれなれ。都を出でて十日餘と申すに、越前の敦賀の津に著きにけり。これより商人船あきんどぶねに乗つて、程なく佐渡の國へぞ著きにける。人してかうといふべき便たよりもなければ、みづから本間が館に到つて、中門の前まへにぞ立ちたりける。折ふし僧そうのありけるが立ち出でて、「この内への御用にて御立ち候まへふか、また如何なる用にて候ふぞ」と問ひければ、阿新殿、「これは日野の中



納言の一子にて候ふが、この頃斬られさせ給ふべしと承つて、その最後の様をも見候はむ爲に、都よりはるくと尋ね下つて候ふ」といひもあへず、涙をはらくと流しければ、この僧心ありける人なりければ、いそぎこの由を本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすがあはれにや思ひけむ、やがてこの僧を以て持佛堂へ誘ひ入れて、踏皮、行纏脱がせ、足洗はせて、あるそかならぬ體にてぞ置きたりける。阿新殿これをうれしと思ふにつけても、同じくは父の卿を、とく見奉らばやといひけれども、今日明日斬らるべき人に、これを見せては、なか／＼冥路の障ともなりぬべし、また關東の聞えもいかゞあらむずらむとて、父子の對面を許さず、四五町へだてたる處に置きたれば、父の卿はこれを聞きて、行くへも知らぬ都にいかゞあらむと、思ひやるよりもなほ悲し。子はその方を見やりて、浪路遙に隔りし、鄙のすまひを想ひやつて、心苦しく思ひつる、涙は更に數ならずと、袂の乾くひまもなし。これこそ中納言のおはします牢の中よとて見やれば、竹のひとむら茂りたる處に、堀ほり廻し塀塗つて、行き通ふ人も稀なり。なさけなの本間が心や、父は禁籠せら

れ、子は未だをさなし、たとひ一所に置きたりとも、何程の怖畏かあるべきに、對面をだに許さで、まだ同じ世の中ながら、生を隔てたる如くにて、なからむ後の苦の下、思ひ寝に見む夢ならでは、相見むこともあり難しと、互に悲む恩愛の、父子の道こそあはれなれ。

五月二十九日の暮ほどに、資朝卿を牢より出し奉りて、「遙に御湯も召され候はぬに、御行水候へ」と申せば、はや斬らるべき時になりけりと思ひ給ひて、「嗚呼うたてしき事かな。わが最後の様を見む爲に、はるくと尋ね下つたる幼き者を、一目も見ずしてはてぬることよ」とばかりのたまひて、その後は曾て諸事につけて、ことばをも出し給はず。今朝までは氣色しをれて、常には涙をぬ拭ひ給ひけるが、人間の事に於いては、頭燃を拂ふ如くなりぬと悟つて、たゞ綿密の工夫の外は、餘念ありとも見え給はず。夜に入れば、輿さし寄せて乗せ奉り、こゝより十町ばかりある河原へ出し奉り、輿かき据ゑたれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直つて、辭世の願を書き給ふ。

頭燃―天台三大部  
補註に、「譬如  
男女有三火燒頭  
教令速滅」と



五蘊一色、受、想、

行、識の五つに  
して、われらの  
體は、この五つ  
より成れるもの  
なりと、佛教に  
説く。

四大―佛教にて、  
一切萬有の四大  
原素として擧ぐ  
る所の、地、水、  
火、風。

五蘊假成<sup>レ</sup>形。 四大今歸<sup>レ</sup>空。

將<sup>レ</sup>首當<sup>三</sup>白刃<sup>一</sup>。 截斷一陣風。

年號月日の下に名字を書きつけて、筆をさしおき給へば、切り手後へ廻るとぞ見えし、御首は敷皮の上に落ちて、體はなほ坐せるが如し。

この程常に法談などし給ひける僧來りて、葬禮形<sup>かた</sup>の如く取り營み、空しき骨<sup>こつ</sup>を拾ひて阿新に奉りければ、阿新これを一目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、今生の對面遂にかなはずして、變れる白骨を見る事よと、泣き悲むもことわりなり。阿新未だ幼稚なれども、けなげなる所存ありければ、父の遺骨をば、たゞ一人召し使ひける中間に持たせて、「まづわれよりさきに高野山に參りて、奥の院とかやに納めよ」とて、都へ歸し上<sup>のぼ</sup>せ、わが身は勞<sup>いたは</sup>る事ある由にて、なほ本間が館にぞ留りける。これは本間がなさけなく、父を今生にてわれに見せざりつる鬱憤を、散ぜむと思ふ故なり。かくて四五日經ける程に、阿新晝は病の由にてひねもすに臥し、夜は忍びやかにぬけ出でて、本間が寢處<sup>ひま</sup>などと、こまづくに窺ひて、隙<sup>ひま</sup>あらばかの入道父子が

間に、一人刺し殺して、腹切らむずるものと、思ひ定めてぞねらひける。

ある夜雨風はげしく吹いて、番<sup>とら</sup>する郎等<sup>ら</sup>どもも、皆遠<sup>とほざ</sup>侍<sup>むらひ</sup>に臥したりければ、今こそ待つ所の幸よと思ひて、本間が寢處<sup>ひま</sup>の方を忍びて窺ふに、本間が運や強かりけむ、今夜<sup>こよひ</sup>は常の寢處<sup>ひま</sup>を替へて、いづくにありとも見えぬ。また二間<sup>ふたま</sup>なる處に燈火の影の見えけるを、これは若し本間入道が子息にてやあるらむ、それなりとも討つて恨を散ぜむと、抜け入つてこれを見るに、それさへこゝにはなくして、中納言を斬り奉りし本間三郎といふ者ぞ、たゞ一人臥したりける。よしやこれも時に取つては親の敵<sup>かたき</sup>なり、山城入道に劣るまじと思ひて、走りかゝらむとするに、われは元來太刀も刀も持たず、たゞ人の太刀をわがものと憑みたるに、燈火ことに明なれば、立寄らば、やがて驚き合ふ事もやあらむずらむと危<sup>あや</sup>みて、左右なく寄り得ず。いかかせむと案<sup>あかり</sup>じわづらうて立ちたるに、折ふし夏なれば、燈火の影を見て、蛾といふ蟲のあまた<sup>あかり</sup>明障子<sup>しょうじ</sup>に取りつきたるを、すはや究竟<sup>くつきやう</sup>の事こそあれと思ひて、障子を少し引きあげたれば、この蟲あまた内へ入つて、やがて燈火を打ち消しぬ。今はか



うとうれしくて、本間三郎が枕に立ち寄りて探るに、太刀も刀も枕にありて、主はいたく寝入りたり。まづ刀を取つて腰にさし、太刀を抜いて胸もとにさし當て、寝たる者を殺すは、死人に同じければ、驚かさむと思ひて、まづ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚く所を、一の太刀にて臍の上を、壘までつと突き通し、返す太刀に喉笛さし切つて、心閑に後の竹原の中へぞ隠れける。本間三郎が、一の太刀に胸を通されて、あつといふ聲に、番衆ども驚き騒いで、火を燃してこれを見るに、血のつきたる小き足跡あり。さては阿新殿のしわざなり、堀の水深ければ、木戸より外へはよも出でじ、捜し出して打ち殺せとて、手にく松明をとぼし、木の下、草の陰まで、残る所なくぞさがしける。

阿新は竹原の中に隠れながら、今はいづくへか遁るべき、人手にかゝらむよりは、自害をせばやと思はれけるが、憎しと思ふ親の敵をば討ちつ、今はいかにもして命を全うして、君の御用にも立ち、父の素意をも達したらむこそ、忠臣孝子の義にてもあらむずれ、もしやとひとまづ落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛び越え

むとしけるが、口二丈、深さ一丈に餘りたる堀なれば、越ゆべきやうもなかりけり。さらばこれを橋にして渡らむよと思ひて、堀の上に末靡きたる吳竹の梢へ、さらさらと登りたれば、竹の末堀の向ひへ靡き伏して、やすくと堀をば越えてけり。夜は未だ深し、湊の方へ行きて、舟に乗つてこそ陸へは著かめと思ひて、たどるたどる浦の方へ行く程に、夜もはや次第に明けはなれて、忍ぶべき道もなければ、身を隠さむとて日を暮し、麻や蓬の生ひ茂りたる中に隠れむたれば、追手ともおぼしき者ども、百四五十騎馳せ散つて、もし十二三ばかりなる兒や通りつると、道に行き合ふ人ごとに、問ふ音してぞ過ぎ行きける。

阿新その日は麻の中にて日を暮し、夜になれば湊へと志して、そことも知らず行くほどに、孝行の志を感じて、佛神擁護の眸をや廻らされけむ、年老いたる山伏一人行き逢ひたり。この兒のありさまを見て、痛はしくや思ひけむ、「これはいづくよりいづくを指して御渡り候ふぞ」と問ひければ、阿新事の様をありのまゝにぞ語りける。山伏これを聞いて、われこの人を助けずば、たゞ今の程にかはゆき目を見



一持秘密呪一度  
大日如來の化身  
たる不動明王の  
秘密の呪を誦す  
れば、生々世々  
これを加護し  
て、その修行者  
をして、佛の如  
くならしむべし

るべしと思ひければ、「御心安くおぼし召され候へ。湊に商人船ども多く候へば、乗せ奉りて、越後越中の方まで送りつけ進らすべし」といひて、足たゆめば、この兒を肩に乗せ背に負うて、程なく湊にぞ行き著きける。夜明けて、便船やあると尋ねけるに、折ふし湊の内に船一艘もなかりけり。いかゞせむと求むる所に、遙の沖に乗り浮べたる大船、順風になりぬと悦びて、櫓を立て篷を捲く。山伏手を上げて、「その船これへ寄せてたび給へ、便船申さむ」と呼ばはりけれども、曾て耳にも聞き入れず、船人聲を帆に上げて、湊の外へ漕ぎ出す。山伏大きに腹を立て、柿の衣の露を結んで肩にかけ、沖行く船に立ち向つて、いらたか誦珠をさらしくと推しもんで、「一持秘密呪、生々而加護、奉仕修行者、猶如薄伽梵といへり。況や多年の勤行に於いてをや。明王の本誓あやまらずば、權現金剛童子、天龍夜叉、八大龍王、その船こなたへ漕ぎ返してたばせ給へ」と、跳り上り跳り上り、肝膽を碎いてぞ祈りける。行者の祈、神に通じて、明王擁護やし給ひけむ、沖の方より俄に惡風吹き來つて、この船忽に覆らむとしける間、船人どもあわて、「山伏の御房、まづわれ

との意。薄伽梵  
は佛の敬稱にい  
ふことば。

らを御助け候へ」と、手を合せ膝をかゞめ、手ん手に船を漕ぎもどす。汀近くなりければ、船頭船より飛び下りて、兒を肩に乗せ、山伏の手を引いて、屋形の内に入られたれば、風はまた元の如くに直りて、船は湊を出でにけり。

その後追手ども百四五十騎馳せ來り、遠淺に馬を控へて、あの船止れと招けども、船人これを見ぬ由にて、順風に帆を揚げたれば、船はその日の暮ほどに、越後の國府にぞ著きにける。阿新山伏に助けられて、鰐の口の死を遁れしも、明王加護の御誓、掲焉なりける驗なり。(卷二)

### 天下怪異の事

大乘院―興福寺の別當。  
六方―四方上下、  
即ちこゝは興福寺全體の僧をさす。  
嘉曆二年の春の頃、南都大乘院の禪師房と、六方の大衆と、確執の事あつて合戦に及び、金堂、講堂、南圓堂、西金堂、忽に兵火の餘煙に焼け失せぬ。また元弘元年、山門東塔の北谷より、兵火出で來て、四王院、延命院、大講堂、法華堂、常行堂、一時に灰燼となりぬ。これらをこそ、天下の災難をかねて知らする所の前相かと、人皆



魂を冷やしけるに、同じき年の七月三日、大地震あつて、紀伊の國千里濱の遠千瀨、俄に陸地になること二十餘町なり。また同じき七日の酉の刻に地震あつて、富士の絶頂崩ること數百丈なり。寺々の火災、處々の地震、徒事たごにあらず、今や不思議出で來ると、人々心を驚かしけるところに、果してその年の八月二十二日、東使兩人三千餘騎にて上洛すと聞えしかば、何事とは知らず、京にまた如何なる事やあらむすらむと、近國の軍勢、われもわれもと馳せ集る。京中何となく以ての外に騒動す。

兩使已に京著して、未だ文箱をも開かぬ先に、何とかして聞えけむ、このたび東使の上洛は、主上を遠國へ遷し進らせ、大塔の宮を死罪に行ひ奉らむためなりと、山門に披露ありければ、八月二十四日の夜に入つて、大塔の宮より竊に御使を以て主上へ申させ給ひけるは、「このたび東使上洛の事、内々承り候へば、皇居を遠國へ遷し奉り、尊雲を死罪に行はむ爲にて候ふなる。今夜急ぎ南都の方へ御忍び候ふべし。城郭未だ調はず、官軍馳せ參ぜざる先に、凶徒若し皇居に寄せ來らば、御方

防ぎ戦ふに利を失ひ候はむか。かつうは京都の敵を遮りとめむがため、または衆徒の心を見むがために、近臣を一人、山門へ上せられ、臨幸の由を披露候はば、敵軍定めて叡山に向つて合戦を致し候はむか。さる程ならば、衆徒わが山を思ふ故に、防ぎ戦ふに身命を輕んじ候ふべし。凶徒力疲れ、合戦數日に及ばば、伊賀、伊勢、大和、河内の官軍を以て、却つて京都を攻められむに、凶徒の誅戮踵を旋らすべからず。國家の安危、たゞこの一舉に在るべく候ふなり」と申されたりける間、主上ただあされさせ給へるばかりにて、何の御沙汰にも及び給はず、尹の大納言師賢、萬里の小路中納言藤房、同じく舍弟季房、三四人上うへ臥したるを、御前に召されて、この事如何あるべきと仰せ出されければ、藤房の卿進んで申されけるは、「逆臣君を犯し奉らむとする時、暫くその難を避けて還つて國家を保つは、前蹤みな佳例にて候ふ。所謂重耳は翟に奔り、大王幽に行く。共に王業をなして、子孫無窮に光をかゝやかし候ひき。とかくの御思案に及び候はば、夜もふけ候ひなむ。はや御忍び候へ」として、御車をさし寄せ、三種さんじゆの神器しんぎを乗せ奉り、下簾より出絹出して、女房車の

重耳晉の文公。  
出奔十九年にし  
て國に歸る。  
大王一周の文王の  
歸父なる古公董



父。北狄の來攻を避く。

北山殿—西園寺實兼の邸。中宮は實兼の女。

體に見せ、主上を扶け乗せまゐらせて、陽明門よりなし奉る。御門守護の武士ども、御車を押へて、「誰にて御渡り候ふぞ」と問ひ申しければ、藤房、季房二人、御車に隨つて供奉したりけるが、「これは中宮の、夜に紛れて北山殿へ行啓ならせ給ふぞ」とのたまひければ、「さては仔細候はじ」とて、御車をぞ通しける。

かねて用意やしたりけむ、源中納言具行、按察大納言公敏、六條の少將忠顯、三條河原にて追ひつき奉る。こゝより御車をばやめられ、あやしげなる張輿に、召し替へさせ進らせられたれども、俄の事にて駕輿もなかりければ、大膳の大夫重康、樂人豊原兼秋、隨身秦の久武なんどぞ、御輿をば昇き奉りける。供奉の諸卿みな衣冠を脱いで、折烏帽子に直垂を著し、七大寺詣する京家の青侍なんどの、女性を具足したる體に見せて、御輿の前後にぞ供奉したりける。

七大寺—興福寺、元興寺、大安寺、東大寺、西大寺、藥師寺、法隆寺、これを南都七大寺といふ。  
東南院—東大寺の一院。  
かの僧正—聖壽。

木津の石地藏を過ぎさせ給ひける時、夜ははやほのくと明けにけり。こゝにて朝餉の供御をすゝめ申して、先づ南都の東南院へ入らせ給ふ。かの僧正もとより貳心なく忠義を存せしかば、まづ臨幸なりたるをば披露せで、衆徒の心を伺ひ聞

和東笠置—共に山城の國相樂郡。

くに、西室の顯實僧正は關東の一族にて、權勢の門主たる間、皆その威にや恐れたりけむ、與力する衆徒もなかりけり。かくては南都の皇居かなふまじとて、翌日二十一日、和東の鷲峯山へ入らせ給ふ。こゝは又あまりに山深く里遠くして、何事の計略も叶ふまじきところなれば、要害に御陣を召さるべしとて、同じき二十七日、潛幸の儀式を引きつくり、南都の衆徒少々召し具せられて、笠置の石室へ臨幸なる。(卷二)

### 師賢登山の事附唐崎濱合戦の事

尹の大納言師賢の卿は、主上の内裏を出御ありし夜、三條河原まで供奉せられたりしを、大塔の宮よりさましく仰せられつる仔細あれば、臨幸の由にて山門へ登り、衆徒の心をもちかゞひ、また勢をもつけて、合戦を致せと仰せられければ、師賢法勝寺の前より、袞龍の御衣を著して、瑤輿に乗り替へて、山門の西塔院へ登り給ふ。四條の中納言隆資、二條の中將爲明、中の院の左中將定平、みな衣冠を正し



うして、供奉の體に相從ふ。事の儀式まことしく見えたりける。西塔の釋迦堂を皇居となされ、主上山門を御たのみあつて臨幸なりたるよし披露ありければ、山上、坂本は申すに及ばず、大津、松本、戸津、比叡辻、仰木、絹河、和仁、堅田の者までも、われさきにと馳せ參る。その勢東西兩塔に充滿して、雲霞の如くにぞ見えたりける。

かゝりけれども六波羅には、未だ曾てこれを知らず。夜明けければ、東使兩人内裏へ參じて、まづ行幸を六波羅へなし奉らむとて打ち立ちける所に、淨林房の阿闍梨豪譽がもとより、六波羅へ使者を立て、今夜の寅の刻に、主上山門を御憑みあつて、臨幸なりたる間、三千の衆徒ことごとく馳せ參り候ふ。近江、越前の御勢を待ちて、明日は六波羅へ寄せらるべき由評定あり。事の大きになり候はぬさきに、いそぎ東坂本へ御勢を向けられ候へ。豪譽後攻仕るべし」とぞ申したりける。兩六波羅大きに駭いて、まづ内裏へ參じて見奉るに、主上は御座なくて、たゞ局町の女房たち、こゝかしこにさしつどひて、泣く聲のみぞしたりける。さては山門へ

赤山―山城の國愛  
宿那なる修學院  
離宮の北に當る  
所に赤山禪院と  
て延曆寺の別院  
あり。そこを指  
していへるかといふ。

落ちさせ給ひたること仔細なし、勢つかぬさきに山門を攻めよとて、四十八個所の等に、畿内五個國の勢をさし添へて五千餘騎、大手の寄手として、赤山の麓、下り松の邊へさし向けらる。搦手へは佐々木三郎判官時信、海東左近の將監、長井丹後の守宗衡、筑後の前司貞知、波多野上野の前司宣道、常陸の前司時知に、美濃、尾張、丹波、但馬の勢をさし添へて七千餘騎、大津、松本を経て、唐崎の松の邊まで寄せかけたり。

坂本にはかねてより相圖をさしたる事なれば、妙法院、大塔の宮兩門主、宵より八王子へ御上りあつて、御旗を揚げられたるに、御門徒の護正院の僧都祐全、妙光坊の阿闍梨玄尊を始として、三百騎、五百騎、こゝかしこより馳せ參りける程に、一夜の間に御勢六千餘騎になりけり。天台の座主を始めて、解脫幢相の御衣を脱ぎ給ひて、堅甲利兵の御形にかはり、垂跡和光のみぎり、忽に變じて勇士守禦の場となりぬれば、神慮もいかゞあらむと、はかり難くぞ覺えたる。

さる程に六波羅勢、已に戸津の宿の邊まで寄せたりと、坂本の内騒動しければ、

解脫幢相―袈裟は  
解脫を求むる佛  
道修行者の標識  
なる故に、幢相  
といふ。  
垂跡和光―垂跡即  
ち和光の義。垂



跡は本地の光を和けて吾人塵俗の世界に應同するものなるが故にいふ。

南岸の圓宗院、中の坊の勝行房、はやりをの同宿ども、取る物も取りあへず、唐崎の濱へ出で合ひける、その勢みなちだちにて、しかも三百人には過ぎざりけり。海東これを見て、「敵は小勢なりけるぞ、後陣の勢の重ならぬさきに、かけ散らさでは叶ふまじ。續けや者ども」といふまゝに、三尺四寸の太刀を抜いて、鎧の射向の袖をさしかざし、敵の渦巻いて控へたるまん中へかけ入り、敵三人斬り伏せ、波打ちぎはに控へて、續く身方をぞ待ちたりける。岡本房の播磨の堅者快實、遙にこれを見て、前につき雙べたる持楯一帖かつばと踏み倒し、二尺八寸の小長刀、水車にまはして躍りかゝる。海東これを弓手にうけ、兜の鉢をまつ二つに打ち破らむと、片手打ちに撃ちけるが、撃ち外して、袖の冠板より菱縫の板まで、片筋かひに、かけず切つて落す。二の太刀を餘りに強く切らむとて、弓手の鎧を踏み折り、既に馬より落ちむとしけるが、乗り直りける所を、快實長刀の柄を取り延べ、内兜へ鋒上りに二つ三つ、すき間もなく入れたりけるに、海東あやまたず、喉笛を突かれて、馬よりまつさかさまに落ちにけり。快實やがて海東が上巻に乗りかゝり、鬢の髪をつか

んで引きあげ、首かき切つて長刀に貫き、「武家の大将一人討ち取つたり、ものはじめよし」と悦んで、あざ笑うてぞ立ちたりける。

こゝに何者とは知らず、見物衆の中より、年十五六ばかりなる小兒の、髮唐輪に揚げたるが、麴塵の胴丸に大口のそば高く取り、金作の小太刀を抜いて、快實に走りかゝり、兜の鉢をしたゝかに、三打四打ぞ打ちたりける。快實きつと振り返つてこれを見るに、齡二八ばかりなる小兒の、大眉に鐵漿黒なり。これ程の小兒を討ちとめたらむは、法師の身に取つては情なし、討たじとすれば、走りかゝり走りかゝり、手しげく切り廻りける間、よし／＼さらば、長刀の柄にて太刀を打ち落して、組み止めむとしける所を、比叡辻の者どもが、田の畔に立ち渡つて射ける横矢に、この兒胸板をつと射抜かれて、矢庭に伏して死ににけり。後に誰ぞと尋ねれば、海東が嫡子幸若丸といひける小兒、父が留め置きけるに依つて、軍の供をばせざりけるが、なほもおぼつかなくや思ひけむ、見物衆に紛れて、後について來りけるなり。幸若をさなしといへども、武士の家に生れたる故にや、父が討たれけるを見て、同



じく戰場に討死して、名を残しけるこそあはれなれ。

海東が郎等これを見て、二人の主を目の前に討たせ、あまつさへ首を敵に取らせ、生きて歸るものやあるべきとて、三十六騎の者ども轡くつはみを並べてかけ入り、主の死骸を枕にして、討死せむと相争ふ。快實これを見て、からしくとうち笑うて、「心得ぬものかな。御邊たちは敵の首をこそ取らむするに、身方の首をほしがるは、武家自滅の瑞相あらはれたり。ほしからば、すは取らせむ」といふまゝに、持ちたる海東が首を、敵の中へがばと投げかけ、坂本さかもとやう様の拜み切り、八方を拂うて火を散らす。三十六騎の者ども、快實一人に切り立てられて、馬の足をぞ立てかねたる。佐木の三郎判官時信うしろ後に控へて、「身方討たすな、續けや」と下知しければ、伊庭、目賀多、木村、馬淵、三百餘騎をめてかゝる。快實既に討たれぬと見えける所に、桂林房の悪讚岐、中の房の小相摸、勝行房の侍從堅者定快、金蓮房の伯耆直源ちきげん、四人左右より渡り合つて、鋒きつさきをさし合せて切つて廻る。讚岐と直源と同じ處にて討たれなければ、後陣の衆徒五十餘人、續いてまた討つてかゝる。唐崎の濱と申すは、東

は湖にて、その汀崩れたり。西は深田ふかたにて、馬の足も立たず。平沙渺々として道せばし。後へ取り廻さむとするもかなはず、中に取り籠めむとするもかなはず。されば衆徒も寄手も、互あひに面おもてに立ちたる者ばかり戦つて、後陣の勢は徒に、見物してぞ控へたる。

既に唐崎に軍始りたりと聞えければ、御門徒の勢三千餘騎、白井の前を今路いまみちへ向ふ。本院の衆徒七千餘人、三の宮林を下り降る。和仁、堅田の者どもは、小舟三百餘艘に取り乗つて、敵の後を遮らむと、大津をさして漕ぎ廻す。六波羅勢これを見て、かなはじと思ひひけむ、志賀の閻魔堂の前を横切りに、今路にかゝつて引き返す。衆徒は案内者なれば、こゝかしこのつまりつまりに落ち合ひて、さんくゝに射る。武士はみな無案内なれば、堀、崖ともいはず、馬を馳せ倒して引きかねける間、後陣に引きける海東が若黨八騎、波多野が郎等十三騎、眞野の入道父子二人、平井九郎主従二騎、谷底にて討たれにけり。佐々木の判官も馬を射させて、乗替を待つ程に、大敵左右より取り巻いて、既に討たれぬと見えけるを、名を惜み命を輕んず



る若黨ども、返し合せ返し合せ、所々にて討死しけるその間に、萬死を出でて一生に遭ひ、白晝に京へ引き返す。この頃までは天下久しく静にして、軍といふ事は敢て耳にも觸れざりしに、俄なる不思議出で來ぬれば、人みなあわて騒いで、天地も只今うちかへすやうに、沙汰せぬ處もなかりけり。(卷二)

## 主上御夢の事附楠の事

元弘元年八月二十七日、主上笠置へ臨幸なつて、本堂を皇居となさる。はじめ一兩日の程は、武威に恐れて、參り仕ふる人一人もなかりけるが、叡山東坂本の合戦に、六波羅勢うち負けぬと聞えければ、當寺の衆徒を始めて近國の兵ども、こゝかしてより馳せ參る。されども未だ名ある武士、手勢百騎とも二百騎とも打たせたる大名は一人も參らず。この勢ばかりにては、皇居の警固いかゞあるべからむと、主上おぼしめし煩はせ給ひて、少し御まどろみありける御夢に、所は紫宸殿の庭前と覺えたる地に、大きな常磐木あり。緑の蔭茂りて、南へ指したる枝、殊に

榮えはびこれり。その下に、三公百官、位に依つて列座す。南へ向きたる上座に、御座の疊を高く敷き、未だ坐したる人はなし。主上御夢ごことに、誰を設けむ爲の座席やらむと、あやしくおぼし召して立たせ給ひたる所に、鬢結うたる童子二人、忽然として來つて、主上の御前に跪き、涙を袖にかけて、「一天下の間に、暫くも御身を隠さるべき所なし。但しあの木の蔭に、南へ向へる座席あり。これ御爲に設けたる玉辰にて候へば、暫くこれにおはし候へ」と申して、童子は遙の天に昇り去りぬと御覽じて、御夢はやがて覺めにけり。主上これは天の朕に告ぐる所の夢なりとおぼしめして、文字につけて御料簡あるに、木に南と書きたるは楠といふ字なり。その蔭に南に向ひて坐せよと、二人の童子の教へつるは、朕再び南面の徳を修めて、天下の士を朝せしめむざる所を、日光月光の示されけるよと、みづから御夢を合せられて、たのもしくこそ思し召されけれ。

夜明けければ、當寺の衆徒成就房の律師を召され、「もしこの邊に楠といはるゝ武士やある」と御尋ねありければ、「近きあたりに、さやうの名字つきたる者ありと



も、未だ承り及ばず候ふ。河内の國金剛山の西にこそ、楠多門兵衛正成とて、弓矢取つて名を得たる者は候ふなれ。これは敏達天皇四代の孫、井手の左大臣橘の諸兄公の後胤たりといへども、民間に下つて年久し。その母若かりし時、志貴の毘沙門に百日詣でて、夢想を感じて設けたる子にて候ふとて、幼名を多門とは申し候ふなり」とぞ答へ申しける。主上さては今夜の夢の告これなりと思しめして、聽てこれを召せと仰せ下されければ、藤房卿勅を奉りて、急ぎ楠正成をぞ召されける。

勅使宣旨を帶して、楠が館へ行き向うて、事の仔細を演べられければ、正成弓矢取る身の面目、何事かこれに過ぎじと思ひければ、是非の思案にも及ばず、まづ忍びて笠置へぞ參りける。主上、萬里の小路中納言藤房の卿を以て仰せられけるは、「東夷征伐の事、正成を憑みおぼしめさるゝ仔細あつて、勅使を立てらるゝ所に、時刻を移さず馳せ參る條、叡感淺からざる所なり。そも、天下草創の事、いかなる謀を運らしか、勝つ事を一時に決して、太平を四海に致さるべき。所存を殘さず申すべし」と勅諭ありければ、正成長まつて申しけるは、「東夷近日の大逆、たゞ勝つ事を一時に―  
史記、高祖本紀  
に、夫運二籌策

帷帳之中、決ニ勝  
於千里之外、吾  
不レ如ニ子房こと  
あるによりて書  
けるなるべし。

天の譴を招き候ふ上は、衰亂の弊に乗つて、天誅を致されむに、何の仔細か候ふべき。但し天下草創の功は、武略と智謀との二つにて候ふ。もし勢を合せて戦はば、六十餘州の兵を集めて、武藏、相摸の兩國に對すとも、勝つ事を得がたし。もし謀を以て争はば、東夷の武力、たゞ利きを摧き堅きを破る内を出でず。これ欺くに易くして、恐るゝに足らざる所なり。合戦のならひにて候へば、一旦の勝負をば必ずしも御覽せらるべからず。正成一人未だ生きてありときこしめされ候はば、聖運遂に開かるべしとおぼしめされ候へ」と、たのもしげに申して、正成は河内へ歸りにけり。(卷三)

### 笠置の軍の事附陶山小見山夜討の事

さる程に主上笠置に御座あつて、近國の官軍附き従ひ奉る由、京都へ聞えければ、山門の大衆また力を得て、六波羅へ寄する事もやあらむとて、佐々木の判官時信に近江一國の勢を相添へて、大津へ向けらる。これもなほ小勢にて、叶ふ



まじき山を申しければ、重ねて丹波の國の住人久下、長澤の一族等をさし添へて八百餘騎、大津東西の宿に陣を取る。九月朔日六波羅の兩檢斷、糟谷三郎宗秋、岡田次郎左衛門、五百餘騎にて宇治の平等院へうち出でて、軍勢の著到をつくるに、催促をも待たず、諸國の軍勢、夜晝引きも切らず馳せ集つて、十萬餘騎に及べり。

既に明日二日巳の刻に押し寄せて、矢合せあるべしと定めたりける其の前の日、高橋又四郎ねけがけ被驅して、一人高名に備へむと思ひけむ、僅に一族の勢三百餘騎を率して、笠置の籠へぞ寄せたりける。城に籠る所の官軍は、さまで大勢ならずといへども、勇氣未だたゆまず、天下の機を呑んで、回天の力を出さむと思へる者どもなれば、僅の小勢を見て、なじかは打つて懸らざらむ。その勢三千餘騎、木津河の邊に下り會うて、高橋が勢を取り籠めて、一人もあまさじと攻め戦ふ。高橋はじめの勢ひにも似ず、敵の大勢を見て、一返しも返さず、捨て鞭を打つて引きける間、木津河のさか巻く水に追ひ浸され、討たる者その數そくばくなり。僅に命ばかりを助かる者も、馬、物具を捨て、赤裸になり、白晝に京都へ逃げ上る。見苦しかりし

あさりまなり。これを憎しと思ふ者やしたりけむ、平等院の橋詰に、一首の歌を書いてぞ立てたりける。

木津河の瀬々の岩波早ければかけてほどなく落つる高橋

高橋が拔驅を聞いて、引かば入れかはつて高名せむと、後に續きたる小早川も、一度にみな追つ立てられ、一返しも返さず、宇治まで引きたりと聞えければ、また札を立て添へて、

かけも得ぬ高橋落ちて行く水にうき名を流す小早川かな

昨日の合戦に官軍うち勝ちぬと聞えなば、國々の勢馳せ参りて難儀なる事もこそあれ、時日移すべからずとて、兩檢斷、宇治にて四方の手分を定めて、九月二日笠置の城へ發向す。南の手には、五畿内五個國の兵を向けらる。その勢七千六百餘騎、光明山の後を廻つて搦手に向ふ。東の手には、東海道十五個國の内、伊賀、伊勢、尾張、三河、遠江の兵を向けらる。その勢二萬五千餘騎、伊賀路を経て金剛山越に向ふ。北の手には、山陰道八個國の兵ども一萬二千餘騎、梨間の宿のはづれよ



り、市野邊山の麓を廻つて、大手へ向ふ。西の手には、山陽道八個國の兵を向けらる。その勢三萬二千餘騎、木津河を上りて、岸の上なる岨道そほみちを、二手に分けておし寄する。大手、搦手、都合七萬五千餘騎、笠置の山の四方二三里が間は、尺地も残さず充滿したり。

明くれば九月三日の卯の刻に、東西南北の寄手、相近づいて関をつくる。その聲百千の雷いかづちの鳴り落つるが如くにして、天地も動くばかりなり。関の聲三度揚げて、矢合の鏑かざらを射かけたれども、城の中静まりかへつて、関の聲をも合せず、答の矢をも射ざりけり。かの笠置の城と申すは、山高うして一片の白雲嶺はくうんを埋み、谷深うして萬仞の青岸路せいがんを遮る。つゞら折なる道を廻つて、上ること十八町、岩を切つて堀とし、石を疊たうで堀とせり。さればたとひ防ぎ戦ふ者なくとも、たやすく登る事を得難し。されども城中鳴なりを静めて、人ありとも見えざりければ、敵はや落ちたりと心得て、四方の寄手七萬五千餘騎、堀、崖ともいはず、葛のかづらに取りつきて、岩の上を傳うて、一の木戸口の邊、二王堂の前までぞ寄せたりける。

こゝにて一息休めて、城の内をきつと見上げければ、錦の御旗に、日月を金銀にて打つて著けたるが、白日に耀いて光り渡りたるその陰に、透間もなく鎧よろいうたる武者三千餘人、兜の星を耀かし、鎧の袖を連ねて、雲霞の如くに並み居たり。その外櫓の上、狭間さまの陰には、射手とおぼしき者ども、弓の弦なげひしめし、矢束やたはね解いておしくつろげ、中差なかざしに鼻油引いて待ちかけたり。その勢ひ決然として、敢て攻むべきやうぞなき。寄手一萬餘騎これを見て、進まむとするもかなはず、引かむとするもかなはずして、心ならず支へたり。

やゝ暫くあつて、木戸の上なる櫓より、矢間の板をおし排ひらいて名乗りけるは、「三河の國の住人足助次郎重範、忝かたじけなくも一天の君にたのまれ參らせて、この城の一の木戸を固めたり。前陣に進みたる旗は、美濃、尾張の人々の旗と見るは僻目か。十善の君のおはします城なれば、六波羅殿や御向ひあらむずらむと心得て、御設おんまじけのため、大和鍛冶の鍛うて打つたる鎌を、少々用意仕つて候ふ。一筋受けて御覽じ候へ」といふまゝに、三人張の弓に十三束三伏ゆづり、筈はこかづきの上まで引きかけ、暫し堅め

十善の君―天皇を  
申し奉る。十善  
とは佛教にて、  
不殺生、不偷盜、  
不邪淫、不妄語、  
不綺語、不惡口、  
不兩舌、不貪欲、  
不瞋恚、不邪見  
をいふ。



てちやうと放つ。その矢遙なる谷を隔て、二町餘が外に控へたる荒尾九郎が鎧の千檀の板を、右の小脇まで、篋深にぐさと射こむ。一矢なりといへども、究竟の矢坪なれば、荒尾馬よりさかさまに落ちて、起きも直らで死ににけり。舎弟の彌五郎これを敵に見せじと、矢面に立ち隠して、楯のはづれより進み出でていひけるは、「足助殿の御弓勢、日頃承り候ひし程はなかりけり。こゝを遊ばし候へ。御矢一筋受けて、物具の札の程試み候はむ」と欺いて、弦走を敲いてぞ立ちたりける。足助これを聞きて、この者のいふやうは、いかさま鎧の下に、腹巻か鏢かを重ねて著たればこそ、前の矢を見ながら、こゝを射よとは敲くらむ。もし鎧の上を射ば、篋摧は鏢折れて、通らぬ事もこそあれ、兜の眞向を射たらむに、などか碎けて通らざらむと思案して、胡録より金磁頭を一つ抜き出し、鼻油引いて、「さらば一矢仕り候はむ、受けて御覽候へ」といふまゝに、しばらく鎧の高紐をはづして、十三東三伏、前よりもなほ引きしぼりて、手答へ高く、はたと射る。思ふ矢坪を違へず、荒尾彌五郎が兜の眞向、金物の上二寸ばかり射碎いて、眉間の眞中を、くつまき責めて、ぐ

さと射籠うだりければ、二言ともいはず、兄弟同じ枕に倒れ重なつて死ににけり。これを軍の始として、大手、搦手、城の内、をめき叫んで攻め戦ふ。矢叫の音、関の聲、しばしも止む時なければ、大山も崩れて海に入り、坤軸も折れて、忽ち地に沈むかとぞ覺えし。晩景になりければ、寄手いよゝゝ重なつて、持楯をつき寄せつき寄せ、木戸口の邊まで攻めたりける。

こゝに南都の般若寺より巻數を持つて参りたりける使、本性房といふ大力の律僧のありけるが、褌衫の袖を結んで引き違へ、世の常の人の百人しても動かし難き大磐石を、軽々と脇に挟み、鞠の勢ひに引つかけ引つかけ、二三十續け打ちにぞ投げたりける。數萬の寄手、楯の板を微塵に打ち碎かるゝのみにあらず、少しもこの石に當る者、尻居にうち据ゑられければ、東西の坂に入なだれを築いて、人馬彌が上に落ち重なる。さしも深き谷二つ、死人にてこそ埋めたりけれ。されば軍散じて後までも、木津河の流血になつて、紅葉の陰を行く水の、紅深きに異ならず。これより後は、寄手雲霞の如しといへども、城を攻めむといふ者一人もなし。たゞ城の

巻數一貞丈雜記に、祈禱の札なり。たとへば奉轉讀大般若六百卷、又は奉誦千卷陀羅尼など、その讀みたる經文の數を書く故、巻數といふなり。梅のすはえ、又は梅の枝などにつけて通上するものなりとあり。



四方を圍みて、遠攻にこそしたりけれ。

かくて日數を経ける所に、同じき月十一日、河内の國より早馬を立て、「楠兵衛正成といふ者、御所方になつて旗を擧ぐる間、近邊の者ども、志あるは同心し、志なきは東西に逃げ隠る。乃ち國中の民屋を追捕して、兵糧の爲に運び取り、己が館の上なる赤坂山に城郭を構へ、その勢五百騎にて立て籠り候ふ。御退治延引せば、事御難儀に及び候ひなむ。急ぎ御勢を向けらるべし」とぞ告げ申しける。これをこそ珍事なれと騒ぐ所に、又同じき十三日の晩景に、備後の國より早馬到來して、「櫻山の四郎入道、同じき一族等、御所方に參つて旗を擧げ、當國の一の宮を城郭として立て籠る間、近國の逆徒等、少々馳せ加はつて、その勢既に七百餘騎、國中をうち靡け、あまつさへ他國へうち越えむと企て候ふ。夜を日に繼いで、討手を下されず候はば、御大事出で來ぬと覚え候ふ。御油斷あるべからず」とぞ告げたりける。前には笠置の城強うして、國々の大勢日夜攻むれども未だ落ちず、後にはまた楠、櫻山の逆徒大きに起つて、使者日々に急を告ぐ。南蠻西戎は既に亂れぬ、東夷北狄

も亦いかゞあらむずらむと、六波羅の北の方駿河の守、安き心もなかりければ、日に早馬を打たせて、東國勢をぞ乞はれける。相摸の入道大きに驚いて、さらばやがて討手を差し上げよとて、一門、他家、宗徒の人々六十三人までぞ催されける。大將軍には大佛陸奥の守貞直、同じき遠江の守、普恩寺相摸の守、鹽田越前の守、櫻田三河の守、赤橋尾張の守、江馬越前の守、絲田左馬の頭、印具兵庫の助、佐介上總の介、名越右馬の助。金澤右馬の助、遠江の左近の大夫將監治時、足利治部の大輔高氏、侍大將には長崎四郎左衛門の尉、相從ふ侍には、三浦の介入道、武田甲斐の次郎左衛門の尉、椎名孫八入道、結城上野の入道、小山出羽の入道、氏家美作の守、佐竹上總の入道、長沼四郎左衛門入道、土屋安藝の權の守、那須加賀の權の守、梶原上野の太郎左衛門の尉、岩城次郎入道、佐野の安房の彌太郎、木村次郎左衛門の尉、相馬右衛門次郎、南部三郎次郎、毛利丹後の前司、那波左近の大夫將監、一宮善民部の大夫、土肥佐渡の前司、宇都宮安藝の前司、同じき肥後の權の守、葛西の三郎兵衛の尉、寒河の彌四郎、上野の七郎三郎、大内山城の前司、長井治部の少輔、同じき備前



の太郎、同じき因幡の民部の大輔入道、筑後の前司、下總の入道、山城の左衛門の大  
夫、宇都宮美濃の入道、岩崎彈正左衛門の尉高久、同じき孫三郎、同じき彦三郎、伊  
達の入道、田村刑部の大輔入道、入江、蒲原の一族、横山、猪俣の兩黨、この外武藏、  
相摸、伊豆、駿河、上野、五個國の軍勢、都合二十萬七千六百餘騎、九月二十日鎌倉  
を立つて、同じき晦日、前陣既に美濃、尾張兩國に著けば、後陣はなほ未だ高志、二  
村の峠に支へたり。

高志二村一共に三  
河の國に在り、  
古來東海道筋の  
歌枕として知ら  
るゝ山にして、  
前者は豊橋市の  
東、後者は同市  
の西に位す。

こゝに備中の國の住人陶山藤三義高、小見山次郎某、六波羅の催促に隨つて、笠  
置の城の寄手に加はつて、河向ひに陣を取つて居たりけるが、東國の大勢既に近江  
に著きぬと聞えければ、一族、若黨どもを集めて申しけるは、「御邊たち如何か思ふ  
ぞや。この間數日の合戦に、石に打たれ、遠矢に當つて死ぬる者、幾千萬といふ數  
を知らず。これ皆さしてし出したる事もなくて死にぬれば、骸骨未だ乾かざるに、  
名は先立つて消え去りぬ。同じく死ぬる命を、人目に餘る程の軍一度して死にたら  
ば、名譽は千載に留つて、恩賞は子孫の家に榮えむ。つらく平家の亂よりこの方、

大剛の者として、名を古今に揚げたる者どもを案ずるに、いづれもそれ程の高名とは  
覺えず。まづ熊谷、平山が一の谷の先驅は、後陣の大勢を憑みし故なり。梶原平三  
が二度の驅は、源太を助けむ爲なり。佐々木三郎が藤戸を渡りしは案内者のわざ、  
同じき四郎高綱が宇治川の先陣は生倭故なり。これらをだに今の世まで語り傳へ  
て、名を天下の人口に残すぞかし。いかに況や、日本國の武士どもが集つて、數日  
攻むれども落し得ぬこの城を、われらが勢ばかりにて攻め落したらむは、名は古  
今の間に雙なく、忠は萬人の上に立つべし。いざや殿ばら、今夜の雨風の紛れに城  
中へ忍び入つて、一夜討して、天下の人に目を覺させむ」といひければ、五十餘人  
の一族、若黨、最も然るべしとぞ同じける。これ皆千に一つも生きて歸る者あらじ  
と、思ひ切つたる事なれば、かねての死出立に、みな曼荼羅を書いてぞ附けたりけ  
る。差繩の十丈ばかり長さを二筋、一尺ばかり置いては、結び合せ結び合せして、  
その端に熊手を結び著けて持たせたり。これは岩石などの登られざらむ所をば、  
木の枝、岩の角にうち懸けて、登らむ爲の支度なり。



その夜は九月晦日の事なれば、目指すとも知らざる暗き夜に、雨風烈しく吹いて、面を向くべき様もなかりけるに、五十餘人の者ども、太刀を背せなかに負ひ、刀を後に差いて、城の北に當りたる、石壁の數百丈聳えて、鳥も翔り難き所よりぞ登りける。二町許はとかうして登りつ。その上に一段高さ所あり。屏風を立てたる如くなる岩石重なつて、古松枝を垂れ、蒼苔露滑らかなり。こゝに至つて、人皆如何ともすべき様なくして、遙に見上げて立ちたりける所に、陶山藤三、岩の上をさら〜と走り登つて、件の差繩を上なる木の枝にうち懸けて、岩の上よりあろしたるに、跡なる兵ども、各々これに取りついで、第一の難所をば、やすく〜と皆登りてけり。それより上には、さまでの嶮岨なかりければ、或は葛の根に取りつき、或は苔の上を爪立て、二時許ふたときに辛苦して、塀の際まで著いてけり。こゝにて一息休めて、各々塀を上り超え、夜廻よまはりの通りける跡について、まづ城の内の案内をぞ見たりける。大手の木戸、西の坂口は、伊賀伊勢の兵千餘騎にて堅めたり。搦手かじべに對する東の出塀かじべの口をば、大和河内の勢五百餘騎にて堅めたり。南の坂、二王堂の前をば和泉紀伊

の國の勢七百餘騎にて堅めたり。北の口一方は、嶮しきを憑まれけるにや、警固の兵をば一人も置かれず、只いふかひなげなる下部ども二三人、櫓の下に薦を張り、篝を焚いて眠り居たり。陶山、小見山城を廻り、四方の陣をばはや見すましつ。皇居はいづくやらむと窺ひて、本堂の方へ行く所に、ある役所の者これを聞きつけて、「夜中に大勢の足音して、潛に通るは怪しき者かな。誰人ぞ」と問ひければ、陶山の吉次取りもあへず、「これは大和勢にて候ふが、今夜餘りに雨風烈しくして、物騒がしく候ふ間、夜討や忍び入り候はむずらむと存じ候ひて、夜廻り仕り候ふなり」と答へければ、「げに」といふ音して、また問ふこともなかりけり。これより後は、なか〜忍びたる體もなくして、「面々の御陣に御用心候へ」と、高らかに呼ばはりて、閑々しづかと本堂へ上りて見れば、これぞ皇居と覺えて、蠟燭あまたどころ數多所にとぼされて、振鈴かすかの聲幽なり。衣冠正しくしたる人三四人、大床に伺候して、警固の武士に「誰か候ふ」と尋ねられければ、その國の某々なにがしそれがしと名乗つて、廻廊にしかと並み居たり。陶山、皇居の様まで見すまして、今はかうと思ひければ、鎮守の前にて一禮を致



須彌—須彌山の

略。蘇迷盧ともいふ。妙高山と譯せり。高さ八萬四千由旬、頂上は縦横共に八萬由旬にして、帝釋の居城なりと佛教にていふ空想の高山。

し、本堂の上なる峯へ登つて、人もなき坊のありけるに火をかけて、同音に関の聲を揚ぐ。四方の寄手これ聞き、「すはや城中に返り忠の者出で来て、火をかけたるは。関の聲を合せよ」とて、追手搦手七萬餘騎、聲々に関を合せてをめき叫ぶ。その聲天地を響かして、いかなる須彌の八萬由旬なりとも、崩れぬべくぞ聞えける。陶山が五十餘人の兵ども、城の案内はたゞ今くはしく見置きたり、この役所に火をかけては、かしこに関の聲をあげ、かしこに関を作つては、この櫓に火をかけ、四角八方に走り廻つて、その勢城中に充ち満ちたるやうに聞えければ、陣々堅めたる官軍ども、城の内に敵の大勢攻め入りたりと心得て、物具を脱ぎ捨て、弓矢をかなぐり棄て、崖堀ともいはず、倒れ轉びてぞ落ち行きける。錦織の判官代これを見て、「きたなき人々の振舞かな。十善の君に憑まれ參らせて、武家を敵に受くる程の者どもが、敵大勢なればとて、戦はで逃ぐるやうやある。いつの爲に惜むべき命ぞ」とて、向ふ敵に走りかゝり走りかゝり、大はだぬぎになつて戦ひけるが、矢種を射つくし、太刀を打ち折りければ、父子二人、并に郎等十三人、各、腹かき切つ

て、同じ枕に伏して死ににけり。(卷三)

### 主上笠置を御没落の事

さる程に類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始め參らせ、宮々卿相雲客、皆歩跳なる體にて、いづくを指すともなく、足にまかせて落ち行き給ふ。この人々、初め一二町が程こそ、主上を扶け進らせて、前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく道闇うして、敵の関の聲こゝかしこに聞えければ、次第に別々になつて、後にはたゞ藤房、季房二人より外は、主上の御手を引き進らす人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に替へさせ給ひて、そことも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあさましけれ。いかにもして夜の内に赤坂の城へと、御心ばかりを盡されけれども、假にも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ち止り、晝は道の傍なる青塚の陰に御身を隠させ給ひて、寒草の疎なるを御座の茵とし、夜は人も通はぬ野原



有王山—緩喜郡の  
井手村と多賀村  
との間にあり。  
いにしへこの邊  
を多賀の郷とい  
ひければ、かく  
いふなり。

の露分け迷はせ給ひて、羅殺の御袖をほしあへず。とかうして夜晝三日に、山城の多賀の郡なる有王山の麓まで落ちさせ給ひてけり。藤房、季房も、三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ身疲れて、今はいかなる目に逢ふとも、逃げぬべき心地せざりければ、せむ方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟もろともに、うつゝの夢に臥し給ふ。梢を拂ふ松の風を、雨の降るかと思しめして、木陰に立ち寄せ給ひたれば、下露のはら〜と御袖にかゝりけるを、主上御覽せられて、

さしてゆく笠置の山を出でしより天が下にはかくれがもなし

藤房の御涙をおさへて、

いかにせむたのむ陰とて立ちよればなほ袖ぬらす松のした露

山城の國の住人、深須の入道、松井の藏人二人は、この邊の案内者なりければ、山峯々残る所なく搜しける間、皇居隠れなく尋ね出されさせ給ふ。主上まことに怖ろしげなる御氣色にて、「汝等心ある者ならば、天恩を戴きて、私の榮花を期せよ」と仰せられければ、さしもの深須の入道俄に心變じて、あはれこの君を隠し奉つ

て、義兵を擧げばやと思ひけれども、跡につゞける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして、道の成り難からむ事を憚りて、黙しけるこそうたてけれ。

俄の事にて、網代の輿だになかりければ、張輿のあやしげなるに、扶け乗せ進らせて、まづ南都の内山へ入れ奉る。この時こゝかしこにて生捕られ給ひける人々

一の宮—尊良親

王。

第二の宮—宗良親

院の僧正聖尋、萬里の小路大納言宣房、花山の院大納言師賢、按察大納言公敏、源中納言具行、侍從中納言公明、別當左衛門の督實世、中納言藤房、宰相季房、平宰相成輔、左衛門の督爲明、左中將行房、左少將忠顯、源の少將能定、四條の少將隆兼、妙法院の執事澄俊法印、北面、諸家の侍どもには、左衛門の大夫氏信、右兵衛の大夫有清、對馬の兵衛重定、大夫將監兼秋、左近將監宗秋、雅樂兵衛の尉則秋、大學の助長明、足助の次郎重範、宮内の丞能行、大河原源七左衛門の尉有重、奈良法師に俊増、教密、行海、志賀良木の治部房圓實、近藤三郎左衛門の尉宗光、國村三郎入道定法、源左衛門入道慈願、奥の入道如圓、六郎兵衛入道淨圓、山徒には勝行房定快、習禪房



淨運、乘實房實尊、都合六十一人、その所從眷屬どもに至るまでは、數ふるに違あらず。或は籠輿に召させられ、或は傳馬に乗せられて、白晝に京都へ入り給ひければ、その方様かと覺えたる男女、街に立ち並びて、人目をも憚らず泣き悲む。あさましかりし有様なり。

持明院新帝―光嚴院。

十月二日六波羅の北の方、常葉駿河の守範貞、三千餘騎にて路を警固仕つて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。その日關東の兩大將、京へは入らずして、すぐに宇治へ參り向つて、龍顏に謁し奉り、まづ三種の神器を渡し給ひて、持明院新帝へ進らすべきよし奏聞す。主上、藤房を以て仰せ出されけるは、「三種の神器は、古より、繼體の君、位を天に受けさせ給ふ時、みづからこれを授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣あつて、暫く天下を掌に握る者ありといへども、未だこの三種の重器を、みづから恣にして渡し奉る例を聞かず。その上内侍所をば、笠置の本堂に捨て置き奉りしかば、定めて戦場の灰燼にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は、山中に迷ひし時、木の枝に懸け置きしかば、遂にはよも吾が國の守とならせ給はぬ事あら

じ。寶劔は、武家の輩、もし天罰を顧みずして、玉體に近づき奉る事あらば、みづからその刃の上に伏させ給はむ爲に、暫くも御身を放たる事あるまじきなり」と仰せられければ、東使兩人も六波羅も、言葉なくして退出す。

翌日に龍駕をめぐらして、六波羅へなし進らせむとしけるを、さきく臨幸の儀式ならでは、還幸なるまじき由を、強ひて仰せ出されける間、力なく、鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間、三日まで平等院に御逗留あつてぞ、六波羅へは入らせ給ひける。日頃の行幸に事かはりて、鳳輦は數萬の武士にうち圍まれ、月卿雲客はあやしげなる籠、輿、傳馬に扶け乘せられて、七條を東へ、河原を上りに、六波羅へと急がせ給へば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲しいかな、昨日は紫宸北極の高きに座して、百司禮儀の妝をつくろひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦のきびしきに、御心を惱ませらる。時移り事去り、樂み盡きて悲み來る。天上の五衰、人間の一炊、たゞ夢かとのみぞ覺えたる。遠からぬ雲の上の御住居、いつしか思し召し出す御事多き折節、時雨の音ひととほり、軒端の月に

時移り事去り―深  
鴻の長恨歌傳に  
「時移事去、樂盡  
悲來。」  
天上の五衰―一に  
衣服垢穢し、二  
に頭上の花萎



過ぎけるを聞き召して、

住みなれぬ板屋の軒のむらしぐれ音を聞くにも袖はぬれけり (卷三)

赤坂の城軍の事

はるくくと東國より上りたる大勢ども、未だ近江の國へも入らざる前に、笠置の城既に落ちければ、無念の事に思うて、一人も京都へは入らず、或は伊賀、伊勢の山を經、或は宇治、醍醐の道を横ぎつて、楠兵衛正成が立て籠つたる赤坂の城へぞ向ひける。石河河原をうち過ぎ、城の有様を見やれば、俄にこしらへたりと覺えて、はかしく堀をも掘らず、僅に塀一重塗つて、方一二町には過ぎじと覺えたるその内に、櫓二三十が程かき並べたり。これを見る人毎に、あなあはれの敵の有様や、この城われらが片手に載せて、投ぐるとも投げつべし、あはれせめて如何なる不思議にも、楠が一日こらへよかし、分捕、高名して、恩賞に預らむと、思はぬ者こそなかりけれ。されば寄手三十萬騎の勢ども、うち寄すると均しく、馬を踏み放ち踏み

み、三に腋下流汗し、四に身體臭穢し、五に本座を樂まず。佛教の説く所。人間の一炊一異聞集に、呂翁經二邯鄲一道上邸舍中有少年盧生、自嘆貧困、言訖思睡、主方炊二黄粱、翁探夢中一枕、以授生曰、枕此、即榮遇如意、生枕之、夢自枕竅入其家、身歷二富貴五十年、老病而卒、欠伸而寤、顧呂翁在傍、主人炊二黄粱、猶未熟、生謝曰、先生以此室吾之欲也。

籌を帷幄の中に―  
本書三二頁頭註  
参照。

放ち、堀の中に飛び入り、櫓の下に立ち並んで、われ先に打ち入らむとぞ争ひける。

正成は元來籌を帷幄の中に運らし、勝つ事を千里の外に決せむと、陳平、張良が肺肝の間より流出せるが如きの者なりければ、究竟の射手を二百餘人、城中に籠めて、舍弟の七郎と和田五郎正遠とに、三百餘騎をさし副へて、よその山にぞ置きたりける。寄手はこれを思ひもよらず、心を一片に取りて、たゞいと揉みに揉み落さむと、同時に皆四方の切岸の下に著いたりける所を、櫓の上狭間の陰より、指しつめ引きつめ、鏃を揃へて射ける間、時の程に手負、死人千餘人に及べり。東國の勢ども案に相違して、「いや／＼この城の體たらく、一日二日には落つまじかりけるぞ。暫く陣々を取りて、役所を構へ、手分をして合戦を致せしとて、攻口を少し引き退き、馬の鞍を下し、物具を脱いで、みな帷幕の内にと休み居たりける。楠七郎、和田五郎、遙の山より見下して、時刻よしと思ひければ、三百餘騎を二手に分け、東西の山の木陰より、菊水の旗二旋、松の嵐に吹き靡かせ、靜に馬を歩ませ、煙嵐を捲いてあし寄せたり。東國の勢これを見て、敵か身方かためらひ怪む處に、三百餘騎



の勢ども、兩方より吶喊をどつと作つて、雲霞の如くにたなびいたる三十萬騎が中へ、魚鱗がかりに駆け入り、東西南北へ割つて通り、四方八面を切つて廻るに、寄手の大勢あきれて、陣を成しかねたり。城中より三の木戸を、同時にさつと排いて二百餘騎、鋒を雙べて打つて出で、手先をまはしてさんぐに射る。寄手さしもの大勢なれども、僅の敵に驚き騒いで、或は繋げる馬に乗つて、あふれども進まず。或ははづせる弓に矢をはげて、射むとすれども射られず。物具一領に二三人取りつき、我がよ人のよと引き合ひけるその間に、主討たるれども従者は知らず、親討たるれども子は助けず、蜘蛛の子を散らすが如く、石河河原へ引き退く。その道五十町が間、馬、物具を捨てたること、足の踏みどもなかりければ、東條一郡の者どもは、俄に徳つきてぞ見えたりける。

さしもの東國勢、思の外に爲損じて、初度の合戦に負けければ、楠が武略侮りにくしと思ひけむ、吐田、榎原邊に各、うち寄せたれども、やがてまた押し寄せむとは擬せず、こゝに暫くひかへて、畿内の案内者を先に立て、後攻のなきやうに

東條一今、大阪府南河内郡の一部をなせる舊の石川、錦部の兩郡を、一時東條郡と稱し、事ありき。楠氏の根據地にして、今も村名にこれを殘せり。

山を薙り廻し、家を焼き拂うて、心やすく城を攻むべしなどと評定ありけるを、本間、澁谷の者どもの中に、親討たれ、子討たれたる者多かりければ、命生きては何かせむ、よしやわれらが勢ばかりなりとも、馳せ向つて討死せむと憤りける間、諸人皆これに勵まされて、われもわれもと馳せ向ひけり。

かの赤坂の城と申すは、東一方こそ山田の畔、重々に高く、少し難所のやうなれ、三方はみな平地に續きたるを、堀一重に、堀一重塗つたれば、いかなる鬼神が籠りたりとも、何程の事かあるべきと、寄手みなこれを侮り、また寄するとひとしく、堀の中、切岸の下まで攻めついで、逆茂木を引きのけて、打つて入らむとしけれども、城中には音もせず。これはいかさま昨日の如く、手負を多く射出して、漂ふ所へ、後攻の勢を出して、もみ合せむずると心得て、寄手十萬餘騎を分けて、後の山へさし向けて、殘る二十萬騎、稻麻竹葦の如く、城を取り巻いてぞ攻めたりける。かゝりけれども、城の内よりは矢の一筋をも射出さず、更に人ありとも見えざりければ、寄手いよく氣に乗つて、四方の堀に手をかけ、同時に上り越えむとしける所を、



もとより塀を二重に塗つて、外の塀をば切つて落すやうに拵へたりければ、城の内より四方の塀の釣繩を、一度に切つて落したりける間、塀に取りつきたる寄手千餘人、壓しに打たれたるやうにて、目ばかりはたらく所を、大木大石を投げかけ投げかけ打ちける間、寄手また今日の軍にも七百餘人討たれけり。

東國の勢ども、兩日の合戦に手ごりをして、今は城を攻めむとするもの一人もなし。たゞその近邊に陣々を取つて、遠攻にこそしたりけれ。四五日が程はかやうにてありけるが、あまりに晏然として守り居たるもいふかひなし。方四町にだに足らぬ平城に、敵四五百人こもりたるを、東八個國の勢どもが攻めかねて、遠攻したる事のあさましさよなんと、後までも人に笑はれむことこそ口惜しけれ。さきさきはやりのまゝ、楯をも衝かず、攻具足をも支度せで攻むればこそ、そゝろに人は損じつれ、今度はてだてをかへて、攻むべしとて、面々に持楯をはがせ、その面にいため皮を當て、たやすく打たれぬやうにこしらへて、かづきつれてぞ攻めたりける。切岸の高さ、堀の深さ、幾程もなければ、走りかゝつて塀に著かむ事は、

いと安く覺えけれども、これもまた釣塀にてやあらむと危ぶみて、左右なく塀には著かず、みな堀の中に下り漬つて、熊手を懸けて塀を引きける間、既に引き破られぬべう見えける所に、城の内より、柄の一二丈長さ柄杓ひしやくに、熱湯の湧きかへりたるを酌んでかけたりける間、兜の天邊、綿がみのはづれより、熱湯身に通つて焼け爛れければ、寄手こらへかねて、楯も熊手もうち捨て、ばつと引きける見苦しさ、矢庭に死ぬるまでこそなければ、或は手足を焼かれて立ちもあがらず、或は五體を損じて病み臥する者、二三百人に及べり。寄手てだてをかへて攻むれば、城中巧をかへて防ぎける間、今はともかくもすべきやうなくして、たゞ食攻じきせめにすべしとぞ議せられける。かゝりし後は、ひたすら軍をやめて、おのが陣々に櫓をかき、逆茂木を引いて、遠攻にこそしたりけれ。これにこそなか／＼城中の兵、慰む方もなく、氣も疲れぬる心ちしてけれ。

楠この城を構へたる事、暫時の事なりければ、はか／＼しく兵糧など用意もせざれば、合戦はじまつて城を圍まれたること、僅に二十日あまりに、城中兵糧盡き



事に臨んで恐れ—  
 論語の述而篇に  
 「子曰、暴虎馮河  
 死而無悔者、吾  
 不與也。必也臨  
 事而懼、好謀  
 而成者也。」

て、今四五日の食を<sup>かて</sup>残せり。かゝりければ正成、諸卒に向つていひけるは、「この間  
 數個度の合戦にうち勝つて、敵を亡す事數を知らずといへども、敵大勢なれば、敢  
 て物の數ともせず。城中既に食盡きて援けの兵なし。元來天下の士卒に先立つて、  
 草創の功を志とする上は、節に當り義に臨んでは、命を惜むべきにあらず。然りと  
 いへども事に臨んで恐れ、謀を好んでなすは、勇士のする所なり。されば暫くこの  
 城を落ちて、正成自害したる體を敵に知らせむと思ふなり。その故は、正成自害し  
 たりと見及ばば、東國勢定めて悦をなして下向すべし。下らば正成打つて出で、ま  
 た上らば深山に引き入り、四五度が程、東國勢を惱ましたらむに、などか退屈せざ  
 らむ。これ身を全うして敵を亡す計略なり。面々いかゞ計らひ給ふ」といひければ、  
 諸人みな然るべしとぞ同じける。さらばとて、城中に大きな穴を二丈ばかり掘つ  
 て、この間堀の中に多く討たれて伏したる死人を二三十人、穴の中に取り入れて、  
 その上に炭、薪を積んで、雨風の吹きそゞく夜をぞ待ちたりける。正成が運や天命  
 にかなひけむ、吹く風俄に沙を擧げて、降る雨更に篠を衝くが如し。夜色窈冥とし

氈城—陣營。

て、氈城<sup>せんせい</sup>みな帷幕を垂る。これぞ待つ所の夜なりければ、城中に人を一人残し留め  
 て、「われら落ち延びむこと四五町にもなりぬらむと思はむする時、城に火をかけ  
 よ」といひ置いて、みな物具を脱ぎ、寄手に紛れて、五人、三人、別々になり、敵の役  
 所の前、軍勢の枕の上を超えて、しづ〜と落ちけり。正成、長崎が廐の前を通り  
 ける時、敵これを見つけて、「何物なれば、御役所の前を、案内も申さず、忍びやかに  
 通るぞ」と咎めければ、正成、「これは大將の身内の者にて候ふが、道を踏み違へて  
 候ひける」といひ捨て、足早にぞ通りける。咎めつる者、「さればこそ怪しき者  
 なれ、いかさま馬盗人と覺ゆるぞ、たゞ射殺せ」とて、近々に走り寄つて、まつたゞ  
 中をぞ射たりける。その矢正成が臂のかゝりに答へて、したゝかに立ちぬと覺え  
 けるが、すはだなる身に少しも立たずして、筈を返して飛び返る。後にその矢の痕  
 を見れば、正成が年頃信じて讀み奉る觀音經を入れたりける、膚の守に矢當つて、  
 一心稱名の二句の偈に、矢先留りけるこそ不思議なれ。正成必死の鎌に死を遁れ、  
 二十餘町落ち延びて跡を顧みければ、約束に違はず、はや城の役所どもに火をかけ

一心稱名の二句—  
 法華經に、「一心  
 稱名觀音菩薩、



即時觀三其音聲、皆得三解脫」とあるを指す。これは散文にして、偶頌にはあらざれど、文句といふ程の意にいひなしたるなり。

たり。寄手の軍勢、火に驚いて、「すはや城は落ちけるぞ」とて、勝鬨をつくつて、あますな、もらすなと騒動す。焼け静りて後、城中を見れば、大きな穴の中に炭を積んで、焼け死にたる死骸多し。みなこれを見て、「あなあはれや、正成はや自害をしてけり。敵ながらも弓矢取つて、尋常に死にたる者かな」と、譽めぬ人こそなかりけれ。(卷三)

### 遷幸の事

三月一元弘二年。

明くれば三月七日、千葉の介貞胤、小山の五郎左衛門、佐々木佐渡の判官入道道譽、五百餘騎にて路次を警固仕つて、隱岐の國へ遷し奉る。供奉の人としては、一條頭の大奉行房、六條の少將忠顯、御介錯は三位殿の御局ばかりなり。その外はみな甲冑を鎧ひて、弓箭を帶せる武士ども、前後左右にうち圍み奉りて、七條を西へ、東の洞院を下へ、御車をさしければ、京中の貴賤男女、小路に立ち並びて、「まさしき一天の主を、下として流し奉る事のあさましきよ。武家の運命今に盡きなむ」と、憚

る所なくいふ聲巷に満ちて、たゞ赤子の母を慕ふが如く泣き悲みければ、聞くにあはれを催して、警固の武士ももろともに、みな鎧の袖をぞぬらしける。

櫻井の宿を過ぎさせ給ひける時、八幡やはたを伏し拜み、御輿を昇さすゑさせて、二度帝都還幸の事をぞ御祈念ありける。八幡大菩薩と申すは、應神天皇の應化、百王鎮護の御誓あらたなれば、天子行在の外までも、定めて擁護の御眸まなこをぞ廻らさるらむと、たのもしくこそ思しめしけれ。湊川を過ぎさせ給ふ時、福原の京みやこを御覽せられて、平相國清盛が四海を掌に握つて、平安城をこの卑濕の地に遷したりしかば、幾程もなく亡びしも、ひとへに上を犯さむとせし驕おごりの末、果して天のために罰せられしぞかすと、おぼしめし慰む端となりけり。印南野いなんのを末に御覽して、須磨の浦を過ぎさせ給へば、むかし源氏の大將の、この浦に流され、三とせの秋を送りしに、波たゞこゝもとに立ちしこゝちして、涙落つるとも覺えぬに、枕は浮くばかりになりけりと、旅寢の秋を悲みしも、ことわりなりとおぼしめさる。明石の浦の朝霧に、遠くなり行く淡路がた、寄せくる浪も高砂の、尾上の松に吹く嵐、あとに幾重の

明石の浦の古今集に、旅人知らずほのくくと



明石の浦の朝霧  
に鳥がくれゆく  
船をしぞ思ふ。」

鶏唱茅店の月を―  
温庭筠が商山早  
行詩に、「晨起  
動征鐸、客行  
悲故郷、鶏聲茅  
店月、人迹板橋  
霜。」

山川を、杉坂越えて美作や、久米の佐羅山さら〜に、今はあるべき時ならぬに、雲間の山に雪見えて、はるかに遠き峯あり。御警固の武士を召して、山の名を御尋ねあるに、「これは伯耆の大山と申す山にて候ふ」と申しければ、暫く御輿を止められ、内證深心の法施を奉らせ給ふ。ある時は鶏唱茅店の月を抹過し、ある時は馬蹄板橋の霜を踏破して、行路に日を窮めければ、都を御出であつて十三日と申すに、出雲の見尾の湊に著かせ給ふ。こゝにて御船をふなよせひして、渡海の順風をぞ待ち給ひける。(巻四)

備後三郎高德が事附吳越軍の事

その頃備前の國に、兒島備後三郎高德といふ者あり。主上笠置に御座ありし時、御方に參じて義兵を擧げしが、事未だ成らざる先に笠置も落され、楠も自害したりと聞えしかば、力を失うてもだしけるが、主上隱岐の國へ遷されさせ給ふと聞きて、ふたせき貳心なき一族どもを集めて評定しけるは、「志士仁人は生を求めて以て仁を害

志士仁人は―論語

衛靈公篇に、「志士仁人、無二求生以害仁、有二殺身以成仁。」

義を見て―論語爲政篇に、「見義不レ爲無レ勇也。」

することなし、身を殺して以て仁を爲すことありといへり。されば昔衛の懿公が、北狄の爲に殺されてありしを見て、その臣に弘演といひし者、これを見るに忍びず、みづから腹を掻き切つて、懿公が肝をおのれが胸の中に收めて、先君の恩を死後に報いて失せたりき。義を見てせざるは勇なし、いざや臨幸の路次に參りあひ、君を奪ひ取り奉りて、大軍を起し、たとひ尸を戰場に曝すとも、名を子孫に傳へむと申しければ、心ある一族ども、皆この議に同ず。さらば路次の難所に相待ちて、その隙を伺ふべしとて、備前と播磨との境なる、船坂山の巔に隠れ伏し、今や〜とぞ待ちたりける。

臨幸あまりに遅かりければ、人を走らかしてこれを見するに、警固の武士、山陽道を経ず、播磨の今宿より山陰道にかゝり、遷幸をなし奉りける間、高德が支度相違してけり。さらば美作の杉坂こそ、究竟の深山なれ、こゝにて待ち奉らむとて、三石の山よりすぢかひに、道もなき山の雲を凌ぎて、杉坂へ著きたりければ、主上はや院の庄へ入らせ給ひぬと申しける間、力なく、これよりちり〜になりける



が、せめてもこの所存を上聞に達せばやと思ひける間、微服潛行して、時分を伺ひけれども、然るべき隙すきもなかりければ、君の御座ある御宿の庭に、大きな櫻の木ありけるをちし削りて、大文字に、一句の詩をぞ書きつけたりける。

天莫空勾踐。時非無范蠡。

御警固の武士ども、朝あしたにこれを見つけて、何事を如何なるものが書きたるやらむとて、読みかねて、則ち上聞に達してけり。主上はやがて詩の心を御覺りありて、龍顔ことに御快く笑ませ給へども、武士どもは敢てその來歴を知らず、思ひ咎むる事もなかりけり。

そもこの詩の心は、昔異朝に吳越とて、並べる二つの國あり。この兩國の諸侯、みな王道を行はず、霸業を務としける間、吳は越を伐つて取らむとし、越は吳を亡して併せむとす。かくの如く相争ふこと累年に及ぶ。吳越互に勝負を易へしかば、親の敵となり、子の讐となつて、共に天を戴くことを恥づ。周の季の世に當つて、吳國の主をば吳王夫差といひ、越國の主をば越王勾踐とぞ申しける。ある時こ

共に天を―禮記の曲禮に、父之讐弗與共戴天。

の越王、范蠡といふ大臣を召して宣ひけるは、「吳はこれ祖父の敵なり。われこれを討たずして、徒に年を送る事、嘲あざけりを天下の人に取るのみにあらず、兼ねては父祖の尸を、九泉の苔の下に辱かしむる恨あり。然ればわれ今國の兵を召し集めて、みづから吳國へうち越え、吳王夫差を亡して、父祖の恨を散ぜむと思ふなり。汝は暫くこの國に留つて社稷を守るべし」と宣ひければ、范蠡諫め申しけるは、「臣ひそかに事の仔細を計るに、今越の力を以て吳を亡さむ事は、頗る以て難かるべし。その故はまづ兩國の兵を數ふるに、吳は二十萬騎、越は僅に十萬騎なり。誠に小を以て大に敵せず、これ吳を亡し難きその一なり。次には時を以て計るに、春夏は陽の時にて忠賞を行ひ、秋冬は陰の時にて刑罰を專にす。時今春の始なり、これ征伐を致すべき時にあらず。これ吳を亡し難きその二なり。次に賢人の歸する所、則ちその國強し。臣聞く、吳王夫差の臣下に、伍子胥といふ者あり。智深うして人をなつて、慮おもんはかり遠くして主を諫む。かれ吳國にあらむほどは、吳を亡す事難かるべし。これその三なり。麒麟は角に肉ありて猛き形を顯さず、潛龍は三冬に蟄して一陽



來復の天を待つ。君吳越を併せられ、中國に臨んで、南面にして孤稱せむとならば、暫く兵を伏せ武を隠し、時を待ち給ふべし」と申しければ、その時越王大きに怒つて宣ひけるは、「禮記に父の讐には共に天を戴かずといへり。われ既に壯年に及ぶまで吳を亡さず、共に日月の光を戴く事、人の辱かしむる所にあらずや。これを以て兵を集むる所に、汝三つの不可を擧げて、我を留むる事、その義一も道に協はず。まづ兵の多少を數へて戰を致すべくんば、越はまことに吳に對し難し。然れども軍の勝負、必ずしも勢の多少に依らず、たゞ時の運に依る、又は將の謀に依る。されば吳と越と戰ふ事、度々に及んで、雌雄互に易れり。これ汝がみな知る所なり。今更に何ぞ越の小勢を以て、吳の大敵に戰ふ事協はじと、われを諫むべきや。汝が武略の足らざる所のその一なり。次に時を以て軍の勝負を計らば、天下の人みな時を知れり、誰か軍に勝たざらむ。もし春夏は陽の時にて罰を行はずといはば、殷の湯王の桀を伐ちしも春なり、周の武王の紂を伐ちしも春なり。されば天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かずといへり。然るに汝今征伐を行ふべき

天の時は—孟子公孫丑篇に、天時不利如地利、地

利不利如人和。

時にあらずと我を諫むる、これ汝が智慮の淺き所の二なり。次に、吳國に伍子胥があらむ程は、吳を亡す事かなふべからずと云はば、われ遂に父祖の敵を討つて、恨を泉下に報ぜむ事あるべからず。たゞ徒に伍子胥が死せむことを待たば、死生命あり、又は老少前後す。伍子胥と我といづれをか先と知る。この理を辨へず、われ征伐を止むべきや。これ汝が愚の三なり。そもくわれ多日に及んで兵を召すこと、吳國へも定めて聞えぬらむ。事遲滞して、却つて吳王に寄せられなば、悔ゆとも益あるべからず。先んずる時は則ち人を制し、後るゝ時は則ち人に制せらるるといへり。事既に決せり、暫くも止むべからず」とて、越王十一年二月上旬に、勾踐みづから十萬餘騎の兵を率して、吳國へぞ寄せられける。吳王夫差これを聞いて、小敵をば欺くべからずとて、みづから二十萬騎の勢を率して、吳と越との境、夫柘縣といふ所に馳せ向ふに、後に會稽山を當て、前に大河を隔て、陣を取る。わざと敵を討たむ爲に、三萬餘騎を出して、十七萬騎をば、陣の後の山陰に、深く隠してぞ置きたりける。

先んずる時は—史記、項羽本紀に、「吾聞、先則制人、後則爲人所制。」



さる程に越王、夫樹縣にうち臨んで、吳の兵を見給へば、その勢僅に二三萬騎には過ぎじと覺えて、所々に控へたり。越王これを見て、思ふには似ず小勢なりけりと侮つて、十萬騎の兵を、同時に馬を河水にうち入れさせ、馬筏を組んでうち渡す。頃は二月上旬の事なれば、餘寒なほ烈しくして、河水氷に連なれり。兵手凍えて弓を引くに叶はず、馬は雪に泥んで駈引も自在ならず。されども越王、攻鼓を打つて進まされる間、越の兵われさきにと、轡くつばみを雙べかけ入る。吳國の兵は、かねてより敵を難所におびき入れて、取り籠めて討たむと議したる事なれば、わざと一軍もせで、夫樹縣の陣を引き退いて、會稽山へ引き籠る。越の兵勝に乗つて、北ぐるを追ふこと三十餘里、四隊の陣を一陣に合せて、左右を顧みず、馬の息も切る程、思ひ思ひにぞ追うたりける。日既に暮れなむとする時に、吳の兵二十萬騎、思ふ圖に敵を難所へおびき入れて、四方の山より打ち出でて、越王勾踐を中に取り籠め、一人も漏らさじと攻め戦ふ。越の兵は今朝の軍に遠驅をして、人馬ともに疲れたる上、無勢なりければ、吳の大勢に圍まれ、一所にうち寄つて控へたり。進んで前なる敵

にかゝらむとすれば、敵は嶮岨に支へて、鏃をそろへて待ちかけたり。引き返して後なる敵を拂はむとすれば、敵は大勢にて、越の兵疲れたり。進退こゝに谷つて、敗亡既に極れり。されども越王勾踐は、堅きを破り利きを摧く事、項王が勢を呑み、樊噲が勇にも過ぎたりければ、大勢の中へかけ入り、十文字にかけやぶり、巴はの字に追ひ廻らす。一所に合うて三所に別れ、四方を拂うて八面に當る。頃刻きやうこくに變化して、百度戦ふといへども、越王遂にうち負けて、七萬餘騎討たれにけり。勾踐こらへかねて、會稽山にうち上り、越の兵を數ふるに、打ち残されたる兵僅に三萬餘騎なり。それも半は手を負うて、悉く矢盡きて鋒折ほこさきれたり。勝負を吳越に伺うて、未だいづ方へも附かざりつる隣國の諸侯、多く吳王の方に馳せ加はりければ、吳の兵いよゝゝ重なつて三十萬騎、會稽山の四面を圍む事、稻麻竹葦の如くなり。

越王帷幕の内に入り、兵を集めて宣ひけるは、われ運命既に盡きて、今この圍みに逢へり。これ全く戦の咎にあらず、天われを亡せり。然ればわれ明日に、士と共に敵の圍みを出でて、吳王の陣にかけ入り、尸を軍門に曬し、恨を再生に報ゆべし」と



て、越の重器を積んで、悉く焼き捨てむとし給ふ。また王わうせきよ颯與とて、今年八歳になり給ふ最愛の太子、越王に従ひて、同じくこの陣におはしけるを呼び出し奉りて、「汝未だ幼稚なれば、わが死におくれて敵に捕はれ、憂き目を見むことも心憂かるべし。もし又われ敵の爲に虜はれて、われ汝より先立たば、生前の思ひ忍び難し。如かじ、汝を先立て、心安く思ひ切り、明日の軍に討死して、九泉の苦の下、三途の露の底までも、父子の恩愛を捨てじと思ふなり」とて、左の袖に涙を拭ひ、右の手に劔を掲げ、太子の自害を勧め給ふ時に、越王の左將軍に、大夫種しやうといふ臣あり、越王の御前に進み出でて申しけるは、「生を全くして命を待つ事、遠くして難く、死を軽くして節に随ふ事、近くして易し。君暫く越の重器を焼き捨て、太子を殺す事を止め給へ。臣不敏といへども、吳王を欺いて君王の死を救ひ、本國に歸つて、再び大軍を起し、この恥を雪がむと思ふ。今この山を圍んで、一陣を張らしむる、吳の上將軍たいさいひ太宰嚭は、臣が古の朋友なり。久しく相馴れて、かれが心を察せしに、これまことに血氣の勇者なりといへども、飽くまでその心に欲ありて、後の禍

敗軍の將は—史記  
韓信傳に、「敗軍  
之將、不可三以  
言勇、亡國之大  
夫、不可三以圖  
存。」

を顧みず。またかの吳王夫差の行跡を語るを聞きしが、智淺くして謀短く、色に淫して道に暗し。君臣ともに、いづれも欺くに易き所なり。そもく今越の戦利なくして、吳の爲に圍まれぬる事も、君范蠡が諫を用ひ給はざる故にあらずや。願はくは君王、臣が尺寸の謀を許され、敗軍數萬の死を救ひ給へ」と諫め申しければ、越王こんたう理に折れて、「敗軍の將は再び謀らずといへり。今より後の事は、しかしながら大夫種にまかすべし」と宣ひて、重器を焼かるゝことを止め、太子の自害をも止められけり。

大夫種則ち君の命を受けて、鎧を脱ぎ旗を卷いて、會稽山より馳せ下り、「越王勢以盡きて吳の軍門に降る」と呼ばはりければ、吳の兵三十萬騎勝鬨を作つて、みな萬歳を唱ふ。大夫種は則ち吳の轅門に入つて、「君王の陪臣、越の勾踐の従者、小臣種、慎んで吳の上將軍の下執事に屬す」といひて、膝行、頓首して、太宰嚭が前に平伏す。太宰嚭床の上に坐し、帷幕を掲げさせて大夫種に謁す。大夫種敢て平視せず、面を低れ涙を流して申しけるは、「寡君勾踐、運極り勢ひ盡きて、吳の兵に圍ま



れぬ。よつて今小臣種をして、越王長く吳王の臣となり、一畝の民とならむ事を請はしむ。願はくは先日の罪を赦され、今日の死を助け給へ。將軍もし勾踐の死を救ひ給はば、越の國を吳王に獻じて、湯沐の地となし、その重器を將軍に奉り、美人西施を洒掃の妾たらしめ、一日の歡娛に備ふべし。もしそれ請ふ所望かなはずして、遂に勾踐を罪せむとならば、越の重器を焼き棄て、士卒の心を一にして、吳王の堅陣にかけ入り、軍門に戸を止むべし。臣平生將軍と交を結ぶ事、膠漆よりも堅し。生前の芳恩、たゞこの事にあり。將軍早くこの事を吳王に奏して、臣が胸中の安否を、存命の中に知らしめ給へ」と一度は怒り、一度は歎き、ことばを盡して申しければ、太宰嚭顔色まことに解けて、「事以て難からず。われ必ず越王の罪をば申しなだむべし」とて、やがて吳王の陣へぞ參りける。太宰嚭即ち吳王の玉座に近づき、事の仔細を奏しければ、吳王大きに怒つて、「そもく吳と越と國を争ひ、兵を擧ぐる事、今日のみにあらず。然るに勾踐運窮つて、吳の擒となれり。これ天の予に與へたるにあらずや。汝これを知りながら、勾踐が命を助けむと請ふ。敢て忠烈の臣

にあらず」と宣ひければ、太宰嚭重ねて申しけるは、「臣不肖といへども、苟も將軍の號を許され、越の兵と戰を致す日、謀を運らして大敵を破り、命を輕んじて勝つ事を快くせり。これひとへに臣が丹心の功といひつべし。君王の爲に天下の太平を謀らむに、豈に一日も忠を盡し心を傾けざらむや。つらく事の是非を計るに、越王戰に負けて、勢盡きぬといへども、殘る所の兵なほ三萬餘騎、みな選兵鐵騎の勇士なり。吳の兵多しといへども、昨日の軍に功あつて、今より後は身を全うして、賞を貪らむ事を思ふべし。越の兵は小勢なりといへども、志を一にして、しかも遁れぬ所を知れり。窮鼠却つて猫を噛み、鬪雀人を恐れずといへり。吳越重ねて戰はば、吳は必ず危きに近かるべし。如かず、まづ越王の命を助け、一畝の地を與へて、吳の下臣となさむには。然らば君王、吳越兩國を併するのみにあらず、齊楚秦趙も悉く朝せずといふ事あるべからず。これ根を深くしほぞ帯を堅うする道なり」と、理を盡して申しければ、吳王即ち欲に耽る心を逞しうして、「さらばはや會稽山の圍みを解いて、勾踐を助くべし」と宣ひけり。太宰嚭歸つて、大夫種にこの由を語

窮鼠却つて一狸鐵  
論に、「死不再  
生、窮鼠噛猫。」



りければ、大夫種大きに悦んで、會稽山に馳せ歸り、越王にこの旨を申せば、士卒みな色を直して、萬死を出でて一生に逢ふ、ひとへに大夫種が智謀にかゝれりと、喜ばぬ人もなかりけり。

越王既に降旗を建てられければ、會稽の圍みを解いて、吳の兵は吳に歸り、越の兵は越に歸る。勾踐即ち太子王鼫與をば大夫種に附けて、本國へ歸し遣し、わが身は白馬素車に乗つて、越の璽綬を頸に懸け、みづから吳の下臣と稱して、吳の軍門に降り給ふ。かゝりけれども、吳王なほ心ゆるしやなかりけむ、君子は刑人に近づかずとて、勾踐に面を見え給はず、あまつさへ勾踐を典獄の官に下され、日に行く事一驛に驅して、吳の姑蘇城へ入れ給ふ。その有様を見る人、涙かゝらぬ袖はなし。日を経て姑蘇城に著き給へば、即ちてかせあしかせ械てかせあしかせを入れて、土の牢にぞ入れ奉りける。夜明け日暮るれども、月日の光をも見給はねば、一生冥暗の中に向つて、歲月の遷り易るをも知り給はねば、涙の浮ぶ床の上、さこそは露も深かりけめ。

さる程に范蠡、越の國にあつて、その事を聞くに、恨み骨髓に徹つて忍びがたし。

君子は、公羊傳襄公二十九年の條に、君子不レ近二刑人一、近二刑人一、則輕レ死之道也。

あはれ如何なる事をもして、越王の命を助け、本國に歸り給へかし。もろともに謀を運らして、會稽山の恥を雪めむと、肺肝を碎いて思ひければ、身をやつし形をかへ、あじか簣あじかに魚を入れて、みづからこれを荷ひ、魚を賣る商人の真似をして、吳國へぞ行きたりける。姑蘇城のほとりにやすらひて、勾踐のおはする所を問ひければ、ある人委しく教へ知らせけり。范蠡嬉しく思ひて、かの獄のほとりに行きたりけれども、禁門警固ひまなかりければ、一行の書を魚の腹の中に收めて、獄の中へぞ擲げ入れける。勾踐あやしく覺えて、魚の腹を開いて見給へば、

西伯囚二姜里一、重耳走レ翟。皆以爲二王霸一、莫二死許レ敵。

とぞ書きたりける。筆の勢、文章の體、まがふべくもなき范蠡がわざなりと見給ひければ、かれ未だうき世にながらへて、わが爲に肺肝を盡しけりと、その志のほど、あはれにも、亦たのもしくも覺えけるにこそ、一日片時へんじも、生けるを憂しとかこたれし、わが身ながらの命も、却つて惜しくは思はれけれ。

かゝりける處に吳王夫差、俄に石淋といふ病を愛けて、身心とこしなへに惱亂



五味一辛、酸、鹹、苦、甘。

天の與ふる一史記

し、巫覡祈れども驗しるしなし、醫師治すれども癒えず、露命既に危く見え給ひける所に、他國より名醫來つて申しけるは、「御病まことに重しといへども、醫師の術及ぶまじきにあらず。石淋の味はひを嘗めて、五味の様やうを知らする人あらば、容易く療治し奉るべし」とぞ申しける。さらば誰かこの石淋を嘗めて、その味はひを知らずべきと問ふに、左右の近臣相顧みて、これを嘗むる人更になし。勾踐これを傳へ聞きて、涙を押へて宣く、「われ會稽の圍みに逢ひし時、既に罰せらるべかりしを、今に命助け置かれて、天下の赦を待つ事、偏に君王慈惠の厚恩なり。我今これを以てその恩を報いずんば、何れの日をか期せむ」とて、ひそかに石淋を取つて、これを嘗めて、その味はひを醫師に知らせらる。醫師味はひを聞きて療治を加へ、吳王の病、忽に平癒してけり。吳王大きに悦んで、「人心ありてわが死を助く、われ何ぞこれを謝する心なからむや」とて、越王を牢より出し奉るのみにあらず、剩へ越の國を返し與へて、本國へ歸り去るべしとぞ宣下せられける。こゝに吳王の臣伍子胥と申す者、吳王を諫めて申しけるは、「天の與ふるを取らざれば、却つてその咎を受くと

に、「夫天之與弗取、反受其咎」とあり。但し「范蠡曰」とある語中の句なり。

いへり。この時越の地を取らず、勾踐を返し遣されむ事、千里の野べに虎を放つが如し。禍近きにあるべし」と申しけれども、吳王これを聞き給はず、遂に勾踐を本國へぞ返されける。

越王既に車の轅うまを廻らして、越の國へ歸り給ふ所に、蛙その數を知らず、車の前に飛び來る。勾踐これを見給ひて、「これは勇士を得て、素懷に達すべき瑞相なり」とて、車より下りてこれを拜し給ふ。かくて越の國へ歸つて、住み來し故宮を見給へば、いつしか三年みつとせに荒れはて、梟松桂の枝に鳴き、狐蘭菊の叢にかくる。拂ふ人なき閑庭に、落葉滿ちて蕭々たり。越王死を免れて歸り給ひぬと聞えしかば、范蠡並に王颺與を宮中へ入れ奉りぬ。越王の後に西施といふ美人おはしけり。容色世に勝れ、嬋娟たぐひなかりしかば、越王殊に寵愛甚しくして、暫くも側を離れ給はざりき。越王吳に捕はれ給ひし程は、その難を遁れむ爲に、身をそばめて隠居し給ひたりしが、越王歸り給ふ由を聞き給ひて、則ち後宮に歸り參り給ふ。年の三年を待ちわびて、堪へぬ思に沈み給ひける、歎きの程もあらはれて、髪はだへおろそかに膚

梟松桂の枝に一白氏文集卷一、凶宅に、「梟鳴松桂之枝、狐藏蘭菊之叢。」



梨花一枝—白樂天  
の長恨歌に、玉  
容寂寞淚闌干。  
梨花一枝春帶  
雨。

消えたる御形、いとわりなくらうたけて、梨花一枝春の雨に綻び、喩へむ方もなかりけり。公卿大夫、文武百司、こゝかしこより馳せ集りける間、輕軒紫陌の塵に馳せ、冠佩丹墀の月に<sup>ささめ</sup>瑤きて、堂上堂下、再び開ける花の如し。かゝりける所に、吳國より使者來れり。越王驚いて、范蠡を以て事の仔細を問ひ給ふに、使者答へていはく、「わが君吳王、美人を尋ね給ふこと、天下に遍し。然れども未だ西施の如き顔色を見ず。越王會稽山の園みを出でし時、一言の約あり。早くかの西施を吳の後宮へかしづき入れ奉り、后妃の位に備へむ」との使なり。越王これを聞き給ひて、「われ吳王夫差が陣に降つて、恥を忘れ石淋を嘗めて命を助りし事、全く國を保ち身を榮やかさむとはあらず。たゞ西施に偕老の契を結ばむ爲なりき。生前に一度別れて、死して後再會を期せば、萬乗の國を保つとも何かせむ。さればたとひ吳越の會盟破れて、復びわれ吳のために擒となるとも、西施を他國に送ることはあるべからず」とぞ宣ひける。范蠡涙を流して申しけるは、「まことに君、展轉の思を計るに、臣悲まざるにあらずといへども、もし今西施を惜み給はば、吳越の軍再び破

れて、吳王また兵を發すべし。さる程ならば、越の國を吳に併せらるゝのみにあらず、西施をも奪はるべし、社稷をも傾けらるべし。臣つらく計るに、吳王色に迷ふ事甚し。西施吳の後宮に入り給ふ程ならば、吳王これに迷ひて、政を失はむ事疑ふ所にあらず。國弊え民背かむ時に及んで、兵を起し吳を攻めらるれば、勝つ事を立ちどころに得つべし。これ子孫萬歲に及んで、夫人連理の御契、久しかるべき道となるべし」と、一度は泣き、一度は諫めて、理を盡して申しければ、越王理に折れて、西施を吳の國へぞ送られける。西施は小鹿の角のつかの間も、別れてあるべきものかはと、思ふ中をさけられて、未だ幼き太子王鼈與にも、いひ知らせず思ひ置き、ならはぬ旅に出で給へば、別れを慕ふ涙さへ、暫しが程も止らで、袂の乾く隙もなし。越王はまた、これやかぎりの別れなるらむと、堪へぬ思ひに臥し沈みて、そなたの空をはるゝと詠めやり給へば、遅々たる暮山の雪、いと涙の雨となり、空しき床にひとりねて、夢にもせめて逢ひ見ばやと、枕を敲て臥し給へば、添ふかひもなきおもかげに、せむ方なく歎き給ふも、げにことわりなり。



かの西施と申すは、天下第一の美人なり。妝成つて一度笑めば、百の媚君が眼を迷はして、漸く地上に花なきかと疑ふ。艶閉ぢて僅に見れば、千々の姿人の心を蕩かして、忽に雲間に月を失ふかと怪まる。されば一度宮中に入つて、君王の傍に侍りしより、吳王の御心浮れて、夜は夜もすがら淫樂をのみ嗜んで、世の政をも聞き給はず、晝は日ねもす遊宴をのみ事として、國の危きをも顧みず。金殿雲を挿んで四邊三百里が間、山河を枕の下に見下しても、西施と宴せし夢の中に、輿を催さむ爲なりき。輦路に花なき春の日は、麝臍を埋みて履を薰はし、行宮に月なき夏の夜は、螢火を集めて燭にかふ。姪亂日を重ねて、更に止む時なかりしかば、上荒み下廢るれども、佞臣は阿つて諫めせず。吳王萬事酔ひて忘れたるが如し。伍子胥これを見て、吳王を諫めて申しけるは、「君見ずや、殷の紂王、姐妃に迷ひ世を亂り、周の幽王、褒姒を愛して國を傾けし事を。君今西施を姪し給へる事これに過ぎたり。國の傾敗遠きにあらず。願はくは君これをやめ給へ」と、殿顔を犯して諫め申しけれども、吳王敢て聞き給はず。ある時また、吳王西施に宴せむ爲に、群臣を召して、

荆棘の露も一和漢  
朗詠集に「強吳  
滅兮有荆棘、姑  
蘇臺之露瀼々。」

南殿の花に酔を勧め給ひける所に、伍子胥威儀を正しくして参りたりけるが、さしも玉を敷き金を鏤めたる瑤階を登るとして、その裙を高くかかげたる事、恰も水を渉る時の如し。そのあやしき故を問ふに、伍子胥答へて申しけるは、「この姑蘇臺、越王の爲に亡され、草深く露しげき地とならむ事遠きにあらず。臣もしそれまで命あらば、住みにし昔の跡とて尋ね見む時、さこそ袖よりあまる荆棘の露も、瀼々として深からむずらめと、行く末の秋を思ふ故に、身を習はして、裙をばあぐるなり」とぞ申しける。忠臣諫を納るれども、吳王曾て用る給はざりしかば、あまりに諫めかねて、よしや身を殺し、危きを助けむとや思ひけむ、伍子胥またある時、たゞ今新に砥より出でたる、青蛇の劔を持ちて参りたり。抜いて吳王の御前に、拉いで申しけるは、「臣この劔を磨ぐ事、邪を退け敵を拂はむ爲なり。つらく國の傾かむとするその基を尋ねれば、みな西施より出でたり。これに過ぎたる敵あるべからず。願はくは西施が首を刎ねて、社稷の危きを助けむ」といひて、牙を噛みて立ちたりければ、忠言耳に逆ふ時、君非を犯さずといふ事なければ、吳王大きに忿つて、伍



子胥を誅せむとす。伍子胥敢てこれを悲まず、「争ひ諫めて節に死するは、これ臣下の則なり。われまさに越の兵の手に死なむよりは、寧ろ君王の手に死なむ事、恨の中の悦なり。但し君王、臣が忠諫を忿つて、われに死を賜ふ事、これ天既に君を棄つるなり。君越王の爲に亡されて、刑戮の罪に伏せむ事、三年を過ぐべからず。願はくは臣が兩眼を穿つて、吳の東門に懸けられて、その後首を刎ね給へ。一雙の眼未だ枯れざるさきに、君勾踐に亡されて、死刑に赴き給はむを見、一笑を快くせむ」と申しければ、吳王いよく忿つて、即ち伍子胥を誅せられ、その兩眼を穿つて、吳の東門の幢はたばたの上にぞ懸けられける。

かゝりし後は、君惡を積めども臣敢て諫を獻ぜず、たゞ群臣口を嚙み、萬人目を以てす。范蠡これを聞いて、時既に到りぬと悦びて、みづから二十萬騎の兵を率して、吳の國へぞおし寄せける。吳王夫差は、折ふし晉の國吳に叛くと聞いて、晉の國へ向はれたる隙ひまなりければ、防ぐ兵一人もなし。范蠡まづ西施を取り返して、越王の宮へ歸し入れ奉り、姑蘇臺を焼き拂ふ。齊楚の兩國も、越王に志を通ぜしかば、

三十萬騎を出して、范蠡に力を戮す。吳王これを聞いて、まづ晉の國の戦をさしおいて、吳の國へ引き返し、越に戦を挑まむとすれば、前には吳越齊楚の兵、雲霞の如く待ちかけたり、後には又晉の國の強敵、勝つに乗りて追ひかけたり。吳王大敵に前後を包まれて、遁るべき方もなかりければ、死を輕んじて戦ふ事三日三夜、范蠡新手を入れ替へて、息をも繼がせず攻めける間、吳の兵三萬餘人討たれて、僅に百騎になりけり。吳王みづから相當ること三十二個度、夜半に圍みを解いて六十七騎を従へ、姑蘇山に取り登り、越王に使者を立て、曰く、「君王昔會稽山に苦みし時、臣夫差これを助けたり。願はくは、我今より後、越の下臣となつて、君王の玉趾を戴かむ。君もし會稽の恩を忘れずば、臣が今日の死を救ひ給へ」と、言を卑しうし禮を厚うして、降せむ事を請はれける。越王これを聞いて、古のわが思に、今人の悲み、さこそとあはれに思ひ知り給ひければ、吳王を殺すに忍びず、その死を救はむと思ひ給へり。范蠡これを聞いて、越王の御前に參つて、面を犯して申しけるは、「柯を伐るにその規遠のりからず。會稽の古は、天越を吳に與へたり。然るを吳王

柯を伐るに詩經の伐柯篇に、伐柯伐柯、其則未遠。



取る事なうして、忽にこの害に逢へり。今却つて天越に吳を與へたり。取る事なくんば、越またかくの如きの害に逢ふべし。君臣共に肺肝を碎いて、吳を謀る事二十一年、一朝にして棄てむ事、豈に悲まざらむや。君非を行ふ時に順はざるは臣の忠なり」といひて、吳王の使者未だ歸らざるさきに、范蠡みづから攻鼓を打つて兵を進め、遂に吳王を生捕つて、軍門の前に引き出す。吳王既に面縛せられて、吳の東門を過ぎ給ふに、忠臣伍子胥が諫に依つて首を刎ねらるゝ時、幢の上に懸けたりし一雙の眼、三年まで未だ枯れずしてありけるが、その眸明らかに開け、相見て笑へる氣色なりければ、吳王これに面を見する事、さすが恥かしくや思はれけむ、袖を顔におし當て、首を低れて過ぎ給ふ。數萬の兵これを見て、涙を流さぬはなかりけり。即ち吳王を典獄の官に下され、會稽山の麓にて遂に首を刎ね奉る。古來より俗の諺に曰く、「會稽の恥を雪むる」とは、この事をいふなるべし。

これより越王、吳を併するのみにあらず、晉楚齊秦を平げ、覇者の盟主となりしかば、その功を賞して、范蠡を萬戸侯に封ぜんとし給ひしかども、范蠡曾てその祿

功成り名遂げて一  
老子に、「功成名  
遂身退天之道。」

を受けず、「大名の下には久しく居るべからず。功成り名遂げて身退くは、天の道なり」とて、遂に姓名を替へ、陶朱公と呼ばはれて、五湖といふ所に身を隠し、世を遁れてぞ居たりける。釣して蘆花の岸に宿すれば、半蓑に雪を止め、歌うて楓葉の陰を過ぐれば、孤舟に秋を載せたり。一蓬の月は萬頃ばんきやうの天、紅塵の外に遊びて、白頭の翁となりけり。高德この事を思ひなぞらへて、一句の詩に千般の思を述べ、ひそかに叡聞にぞ達しける。

出雲の三尾の湊―  
増鏡、久米の皿  
山の條には、山  
雲の岡やすぎの  
津といふ所より  
御船にたてまつ  
るしと見えたり。

さる程に帝は、出雲の三尾の湊に、十餘日御逗留あつて、順風になりければ、船人纜を解いて御ふなとせひ艦して、兵船三百餘艘、前後左右に漕ぎ並べて、萬里の雲にさかのぼる。時に滄海沈々として、日西北の浪に没し、雲山迢々として、月東南の天に出づれば、漁船の歸る程見えて、一燈柳岸に幽かなり。暮るれば蘆岸あしがんの煙に船を繋ぎ、明くれば松江やんかうの風に帆を揚げ、浪路に日數を重ねれば、都を御出であつて後、廿六日と申すに、御船隱岐の國に著きにけり。佐々木隱岐の判官貞清、國府の島といふ所に、黒木の御所を作りて皇居とす。玉宸に咫尺して、召し仕へられける人と



雞人曉を唱ふる聲  
—和漢朗詠集に  
「雞人曉唱聲驚  
明王之眠。」

ては、六條の少將忠顯、頭の大夫行房、女房には三位殿の御局ばかりなり。昔の玉樓金殿に引きかへて、憂きふし茂き竹椽、涙隙なき松の牆、一夜を隔つる程も、堪へ忍ぶべき御心地ならず。雞人曉を唱ふる聲、警固の武士の番を催す聲ばかり、御枕の上に近ければ、夜の御殿に入らせ給ひても、露まどろませ給はず。萩の戸の明くるを待ちし朝政なけれども、巫山の雲雨、御夢に入る時も、まことに曉ごとの御勤、北辰の御拜も怠らず。今年いかなる年なれば、百官罪なくして、愁の涙を配所の月に滴て、一人位を易へ、宸襟を他郷の風に惱まし給ふらむ。天地開闢よりこのかた、かゝる不思議を聞かず。されば天にかゝる日月も、誰が爲に明らかなる事を恥ぢざらむ。心なき草木もこれを悲み、花開く事を忘れつべし。(卷四)

### 相摸入道田樂を弄ぶ並闘犬の事

またその頃洛中に田樂を弄ぶ事盛にして、貴賤擧つてこれに著せり。相摸入道この事を聞き及び、新座、本座の田樂を呼び下して、日夜朝暮に弄ぶこと他事なし。

入興のあまりに、宗徒の大名だちに田樂法師を一人づつ預けて、装束を飾らせける間、これは誰がし殿の田樂、かれは何がし殿の田樂などいひて、金銀珠玉を逞しくし、綾羅錦繡を飾れり。宴に臨んで一曲を奏すれば、相摸入道を始として、一族の大名われ劣らじと、直垂、大口を脱いで投げ出す。これを集めて積むに、宛も山の如し。その弊え幾千萬といふ數を知らず。

ある夜一獻のありけるに、相摸入道數杯を傾け、醉に和して立ちて舞ふことや、久し。若輩の興を勸むる舞にてもなし、また狂者の言を巧にする戯にもあらず、四十有餘の古入道、醉狂のあまりに舞ふ舞なれば、風情あるべしとも覺えざりける處に、いづくより來たるとも知らぬ、新座、本座の田樂ども十餘人、忽然として座席に列なつてぞ舞ひ歌ひける。その興甚だ尋常に越えたり。暫くあつて、拍手を替へて舞ふ聲を聞けば、「天王寺の妖靈星を見ばや」とぞ囁しける。ある官女この聲を聞いて、あまりのおもしろさに、障子の隙よりこれを見るに、新座、本座の田樂どもと見えつる者、一人も人にてはなかりけり。或は嘴勾つて鴉の如くなるもあり、

四十有餘の—高時は正慶二年に自殺せる時、三十一歳なり。こゝは誇張していへるものなるべし。



或は身に翹つはさあつて、その形山伏の如くなるもあり。異類異形のばけものどもが、姿を人に變じたるにてぞありける。官女これを見て、あまりに不思議に覚えければ、人を走らかして、城じやうの入道にぞ告げたりける。入道取る物も取りあへず、太刀を執つて、その酒宴の席に臨む。中門を荒らかに歩みける足音を聞いて、ばけものは掻き消すやうに失せ、相摸入道は前後も知らず酔ひ臥したり。燈を挑げさせて、遊宴の座席を見るに、まことに天狗の集りけるよと覺えて、踏み汚したる疊の上に、禽獸の足跡多し。城の入道、暫く虚空を睨んで立ちたれども、敢て眼に遮る者もなし。やゝ久しうして、相摸入道驚き覺めて起きたれども、惘然として更に知る所なし。後日に南家の儒者刑部の少輔仲範、この事を傳へ聞いて、「天下將に亂れむとする時、妖靈星といふ惡星下つて、災をなすといへり。しかも天王寺は佛法最初の靈地にて、聖德太子みづから日本一州の未來記を留め給へり。さればかのばけものが、天王寺の妖靈星と歌ひけるこそ怪しけれ。いかさま天王寺邊より天下の動亂出で來て、國家敗亡しぬと覺ゆ。あはれ國主徳を治め、武家仁を施して、妖を消す謀を

致されよかし」といひけるが、果して思ひ知らるゝ世になりけり。かの仲範まことに未然の凶を鑒みける、博覽の程こそありがたけれ。

相摸入道、かゝる妖怪にも驚かず、ます／＼奇物を愛する事、やむ時なし。或時庭前に犬ども集つて、噛み合ひけるを見て、この禪門面白き事に思ひて、これを愛する事、骨髓に入れり。則ち諸國へ相觸れて、或は正税、官物に募りて犬を尋ね、或は權門、高家に仰せてこれを求めける間、國々の守護、國司、所々の一族大名、十四二十四、飼ひ立て、鎌倉へ引き進らす。これを飼ふに魚鳥を以てし、これをつな維ぐに金銀を鏤む。その弊あやえ甚だ多し。輿に乗せて路次を過ぐる日は、道を急ぐ行人も、馬より下りてこれに跪き、農を勤むる里民も、夫おとこに執られてこれを昇く。かくの如く賞翫輕からざりければ、肉に飽き錦を著たる奇犬、鎌倉中に充滿して、四五千匹に及べり。月に十二度、犬合せの日とて定められしかば、一族大名、御内みうち、外様とさまの人々、或は堂上に座を列ね、或は庭前に膝を屈して見物す。時に兩陣の犬どもを二百匹づつ放し合せたりければ、入り違ひ追ひ合うて、上になり、下になり、噛み合



ふ聲、天を響かし地を動かす。心なき人はこれを見て、あら面白や、たゞ戦に雌雄を決するに異ならずと思ひ、智ある人はこれを聞いて、あないまくしや、偏に郊原に尸を争ふに似たりと悲めり。見聞のなぞらふる所、耳目異なりといへども、その前相みな鬪諍死亡のうちにあつて、あさましかりし振舞なり。(巻五)

### 大塔の宮熊野落の事

大塔の宮二品親王は、笠置の城の安否を聞き召されむために、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城既に落ちて、主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐れ、御身の上に迫りて、天地廣しといへども、御身を隠さるべき所なし。日月明らかなりといへども、長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に臥す鶉の床に御泪を争ひ、夜は孤村の辻にたゞずみて、人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、いづくとても御心安かるべき所なかりければ、かくても暫しはと思し召されける所に、一乗院の候人按察法眼好專、いかにして聞きたりけむ、五

虎の尾を履む一書  
經の君牙に、心  
之憂危若<sub>ア</sub>踏<sub>ニ</sub>虎  
尾<sub>一</sub>涉<sub>中</sub>于<sub>春</sub>氷<sub>と</sub>

一乗院一興福寺内  
にありし一院。

百餘騎を率して、未明に般若寺へぞ寄せたりける。

折ふし宮に附き奉りたる人、一人もなかりければ、ひと防ぎ防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、すき間もなく、兵<sub>つはもの</sub>既に寺内に打ち入りたれば、まぎれて御出であるべき方もなし。さらばよし自害せむとおぼしめして、既におし膚脱がせ給ひたりけるが、事かなはざらむ期に臨んで、腹を切らむ事はいと安かるべし、もしやと隠れて見ばやと、おぼしめし返して、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置たさる、大般若の唐櫃<sub>からうど</sub>三つあり。二つの櫃は未だ蓋をあげず、一つの櫃は、御經を半ば過ぎ取り出して、蓋をもせざりけり。この蓋をあけたる櫃の中へ、御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經を引きかづきて、隱形の咒を御心の中に唱へてぞおはしける。もし捜し出されば、やがて突き立てむとおぼしめして、氷の如くなる刀を抜いて、御腹にさし當て、兵、こゝにこそといはむずる一言を待たせ給ひける御心の中、推し量るもなほ淺かるべし。

さる程に、兵佛殿に亂れ入つて、佛壇の下、天井の上までも、残る所なく捜しける



摩利支天—帝釋天の眷屬にして四天下を巡行すといへり。摩利支天經に、「若有知摩利支天名、常憶念者、彼人

が、あまりに求めかねて、「これ體の物こそあやしけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ」とて、蓋したる櫃二つを開いて、御經を取り出し、底を翻して見けれども、おはせず。蓋あきたる櫃は見るまでもなしとて、兵みな寺中を出で去りぬ。宮は不思議の御命を繼がせ給ひ、夢に道行く心ちして、なほ櫃の内におはしけるが、もしまた兵立ち歸り、委しく捜す事もやあらむと御思案あつて、やがて前に兵の捜し見たりつる櫃に、入りかはらせ給ひてぞおはしける。案の如く兵どもまた佛殿に立ち歸り、さきに蓋のあきたるを見ざりつるがおぼつかなしとて、御經をみながら移して見けるが、から／＼とうち笑うて、「大般若の櫃の中をよく／＼捜したれば、大塔の宮は入らせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ」と戯れければ、兵みな一同に笑うて、門外へぞ出でにける。これひとへに摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護に依る命なりと、信心肝に銘じ、感涙御袖を潤せり。

かくては南都邊の御隱家もかなひ難ければ、則ち般若寺を御出でありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には光林房玄尊、赤松律師則祐、木寺相摸、岡

亦不可見、亦不可知、亦不可捉、亦不可害、云々」  
十六善神—十夜六又ともいふ。護法の善神。

本三河房、武藏房、村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、かれこれ以上九人なり。宮を始め奉りて、御供の者までも、みな柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばに責め、そのうちに年長ぜるを先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。この君もとより龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は、定めてかなはせ給はじと、御供の人々、かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、あやしげなる踏皮、脚巾、草鞋を召して、少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤、懈らせ給はざりければ、路次に行き逢ひける道者も、勸修を積める先達も、見咎むる事なかりけり。

由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ船の梶緒たえ、浦の濱ゆふいく重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌、吹上を外に見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子



三所權現一本宮、  
新宮、那智の三  
所にます神をい  
ふ。本宮熊野坐  
神社、新宮熊野  
速玉神社を兩所  
權現とし、これ  
に那智神社を加  
へて三所權現と  
なす。また熊野  
三山とも稱す。

に著き給ふ。その夜は叢祠の露に、御袖を片敷きて、夜もすがら祈り申させ給ひけるは、「南無歸命頂禮三所權現、滿山護法十萬の眷屬、八萬の金剛童子、垂跡和光の月明らかに、分段同居の闇を照し、逆臣忽に亡びて、朝廷再び輝く事を得しめ給へ。傳へ承る、兩所權現は、これ伊弉諾伊弉冊の應作なり。わが君その苗裔として、今朝日忽に浮雲の爲に隠されて冥闇たり、豈に傷まざらむや。玄鑒空しきに似たり。神もし神たらば、君何ぞ君たらざらむ」と、五體を地に投げて、一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける。丹誠無二の御勤、感應などがあらざらむと、神慮も暗に計られたり。夜もすがらの禮拜に御窮屈ありければ、御腕を曲げて枕として、暫く御まどろみありける御夢に、鬢結うたる童子一人來つて、「熊野三山の間は、なほも人の心不和にして、大義成り難し。これより十津河の方へ御渡り候うて、時の到らむを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附け進らせられて候へば、御道しるべ仕るべく候ふ」と申すと御覽せられ、御夢は則ち覺めにけり。これ權現の御告なりけりとたのもしくおぼしめされければ、未明に御悅の奉幣を捧げ、やがて十津河を

尋ねてぞ、分け入らせ給ひける。その道の程三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に枕を敲て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍んで、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なうして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁劍に削り、見下せば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間、かゝる嶮難を經させ給へば、御身もくたびれはて、流る、汗、水の如し。御足は缺け損じて、草鞋みな血に染まれり。御供の人々も、その身鐵石にあらざれば、みな飢ゑ疲れて、はかしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を引いて、路の程十三日に、十津河へぞ著かせ給ひける。

宮をばとある辻堂の内に置き奉りて、御供の人々は在家に行きて、熊野參詣の山伏ども、道に迷ひて來れる由をいひければ、在家の者ども、あはれみを垂れて、粟の飯、椀の粥など取り出して、その飢を相助く。宮にもこれらを進らせて、二三日は過ぎけり。かくては始終いかゞあるべしとも覺えざりければ、光林房玄尊、とある在家の、これぞさもある人の家なるらむと覺しき所に行きて、童べの出でたるに、



家主の名を問へば、「これは竹原八郎入道殿の甥に、戸野の兵衛殿と申す人の許にて候ふ」といひければ、さてはこれこそ、弓矢取つてさる者と聞き及ぶ者なれ、如何にもしてこれを頼まばやと思ひければ、門の内へ入つて、事の様を見聞く所に、内に病者ありと覺えて、「あはれ貴からむ山伏の出で來れかし。祈らせ進らせむ」といふ聲しけり。玄尊、すはや究竟の事こそあれと思ひければ、聲を高らかに揚げて、「これは三重の瀧に七日うたれ、那智に千日籠つて、三十三所の巡禮の爲に罷り出でたる山伏ども、路踏み迷うて、この里に出でて候ふ。一夜の宿を貸し、一日の飢をも休め給へ」といひたりければ、内よりあやしげなる下女一人出で合ひ、「これこそ然るべき佛神の御計らひと覺えて候へ。これの主の女房、物のけを病ませ給ひ候ふ。祈りてたばせ賜はらむや」と申せば、玄尊、「われらは夫山伏にて候ふ間、叶ひ候ふまじ。あれに見え候ふ辻堂に、足を休めて居られて候ふ先達こそ、效驗第一の人にて候へ。この様を申さむに仔細候はじ」といひければ、女房大きに悦んで、「さらばその先達の御房、これへ入れ參らせ給へ」といひて、喜びあへる事限り

三重の瀧—那智の瀧は、一の瀧、二の瀧、三の瀧の三つに分れ、西行は山家集にこれを三葎の瀧とよめり。  
夫山伏—未だ苦行を積まぬ、平山伏ないふ。

なし。玄尊走り歸つて、この由を申しければ、宮を始め奉りて、御供の人々、皆かれが館へ入らせ給ふ。宮、病者の臥したる所へ御入りあつて、御加持あり。千手陀羅尼を二三遍高らかに遊ばされて、御念珠をおしもませ給ひければ、病者みづから口走つて、様々の事をいひけるが、まことに明王の縛に懸けられたる體にて、足手を縮めてわななき、五體に汗を流して、ものゝけは即ち立ち去りぬれば、病者忽に平癒す。主の夫なのめならず喜びて、「われ蓄へたる物候はねば、別の御引出物まではかなひ候ふまじ。枉げて十餘日、これに御逗留候うて、御足を休めさせ給へ。例の山伏粗忽に、忍びて御逃げ候ひぬと存じ候へば、恐れながらこれを御質に賜はらむ」とて、面々の笈どもを取り合せて、みな内にぞ置きたりける。御供の人々、上にはその氣色を顯さずといへども、下にはみな悦び思へること限りなし。

かくて十餘日を過させ給ひけるに、ある夜家主の兵衛の尉、客殿に出でて、焚き火などせさせ、四方山の物語どもしけるついでに申しけるは、「かた／＼は定めて聞き及ばせ給ひたる事候ふらむ。まことやらむ大塔の宮、京都を落ちさせ給ひて、



熊野の方へ赴かせ給ひ候ひけむなる。三山の別當定遍僧都は、無二の武家方にて候へば、熊野邊に御忍びあらむ事は、なり難く覺え候ふ。あはれこの里へ御入り候へかし。所こそ分内は狭く候へども、四方みな嶮岨にて、十里、二十里が中へは、鳥も翔り難き所にて候ふ。その上、人の心偽らず、弓矢を取ること世に超えたり。されば平家の嫡孫維盛と申しける人も、われらが先祖を憑みてこの處に隠れ、遂に源氏の世に恙なく候ひけるとこそ承り候へ」と語りければ、宮まことに嬉しげに思し召したる御氣色顯れて、「もし大塔の宮なんどの、この所へ御憑みあつて入らせ給ひたらば、憑まれさせ給はむずるか」と問はせ給へば、戸野の兵衛、「申すにや及び候ふ。身不肖に候へども、某一人だに、かゝる事ぞと申さば、鹿瀬、蕪坂、湯淺、阿瀬川、小原、芋瀬、中津河、吉野十八郷の者までも、手さすもの候ふまじきにて候ふ」とぞ申しける。その時、宮、木寺相摸に、きと御目合せありければ、相摸この兵衛が側に居寄つて、「今は何をか隠し申すべき。あの先達の御房こそ、大塔の宮にて御座あれ」といひければ、この兵衛なほも不審げにて、かれこれの顔をつくつく」とまも

りけるに、片岡八郎、矢田彦七、「あらあつや」とて、頭巾を脱いで傍にさし置く。まことの山伏ならねば、さかやきの跡隠れなし。兵衛これを見て、「げにも山伏にておはしまさざりけり。賢うぞこの事申し出でたりける。あなあさまし、この程のふるまひ、さこそ尾籠におぼしめし候ひつらめ」と、以ての外に驚いて、首を地につけ、手を束ね、疊より下りて蹲踞せり。

俄に黒木の御所を作りて、宮を守護し奉り、四方の山々に關を居ゑ、路を切り塞いで、用心きびしくぞ見えたりける。これもなほ大義の計略かなひ難しとて、叔父竹原八郎入道にこの由を語りければ、入道やがて戸野が語らひに従つて、わが館へ宮を入れ參らせ、無二の氣色に見えければ、御心安くおぼしめして、こゝに半年ばかり御座ありける程に、人に見知られじとおぼしめされける御支度に、御還俗の體にならせ給ひければ、竹原八郎入道もいよく志を傾け、近邊の郷民どもも、次第に歸伏したる由にて、却つて武家をばさみしけり。(卷五)



## 赤坂合戦の事附人見本間拔懸の事

さる程に赤坂の城へ向ひける大將、阿曾の彈正少弼、後陣の勢を待ちそろへむが爲に、天王寺に兩日逗留あつて、同じき二月二日午の刻に矢合せあるべし、拔懸のともがらに於いては、罪科たるべきの由をぞ觸れられける。

こゝに武藏の國の住人に、人見四郎入道恩阿といふ者あり。この恩阿、本間九郎資貞に向つて語りけるは、「身方の軍勢雲霞の如くなれば、敵陣を攻め落さむ事疑なし。但し事の様やうに案ずるに、關東天下を治めて權を執る事、既に七代に餘れり。天道は盈てるを缺くの理、遁るゝ所なし。その上、臣として君を流し奉る積惡、豈に果してその身を亡さざらむや。某不肖の身なりといへども、武恩を蒙つて、齡既に七旬に餘れり。今日より後さしたる思ひ出もなき身の、そゝろに長生きして、武運の傾かたむかむを見むも、老後の恨、臨終の障さばりともなりぬべければ、明日の合戦に先がけして、一番に討死して、その名を末代に遺さむと存するなり」と語りければ、本間

九郎、心中にはげにもと思ひながら、「枝葉の事を宣ふものかな。これ程なる打込うちこみの軍に、そゝろなる先がけして討死したりとも、さして高名ともいはれまじ。さればたゞ某は、人並に振舞ふべきなり」といひければ、人見、世にも無興氣にて、本堂の方へ行きけるを、本間あやしみ思ひて、人をつけて見せければ、矢立を取り出して、石の鳥居に、何事とは知らず、一筆書きつけて、おのれが宿へぞ歸りける。本間九郎、さればこそ、この者に、一定明日先がけせられぬと、心ゆるしなかりければ、まだ宵よりうち立つて、たゞ一騎、東條を指して向ひけり。

石川河原にて夜を明かすに、朝霧の晴間より、南の方を見ければ、紺の唐綾緘の鎧に、白母衣懸けて、鹿毛なる馬に乗つたる武者一騎、赤坂の城へぞ向ひける。何者やらひと、馬うち寄せてこれを見れば、人見四郎入道なりけり。人見、本間を見つけていひけるは、「昨夜宣ひし事をまことと思ひなば、孫程の人に出し抜かれまし」とうち笑うてぞ、頻りに馬を早めける。本間跡について、「今は互に先を争ひ申すに及ばず、一所に戸を曝し、冥途までも同道申さむするぞよ」といひければ、人



見、「申すにや及ぶ」と返事して、跡になり先になり、物語して打ちけるが、赤坂の城近くなりければ、二人の者ども、馬の鼻を雙べて驅けあがり、堀の際までうち寄せ、鎧踏ん張り弓杖突いて、大音聲を揚げて名乗りけるは、「武藏の國の住人に、人見四郎入道恩阿、年積つて七十三、相摸の國の住人本間九郎資貞、生年三十七、鎌倉を出でしより軍の先陣をかけて、戸を戰場に曝さむ事を存じて相向へり。我と思はむ人々は出で合ひて、手なみの程を御覽ぜよ」と、聲々に呼ばはつて、城を睨みて控へたり。城中の者どもこれを見て、「これぞとよ、坂東武者の風情とは。たゞこれ熊谷、平山が一の谷の先がけを傳へ聞いて、美しく思へる者どもなり。跡を見るに續く武者もなし。又さまで大名とも見えず。あふれ者の不敵武者に跳り合つて、命失うて何かせむ。たゞおいて事のやうを見よ」とて、東西鳴を静めて返事もせず。人見腹を立て、「早且より向つて名乗れども、城より矢の一つをも射出さぬは、臆病の至りか、敵を侮るか。いでその儀ならば、手柄の程を見せむ」とて、馬より飛び下りて、堀の上なる細橋さら／＼と走り渡り、二人の者ども、出堀の脇に引き沿う

て、木戸を切り落さむとしける間、城中これに騒いで、土小間櫓の上より、雨の降るが如くに射ける矢、二人の者どもが鎧に、蓑毛の如くにぞ立ちたりける。本間も人見も、もとより討死せむと思ひ立ちたる事なれば、何かは一足も引くべき、命を限りに戦つて、二人ともに一所にて討たれけり。これまで附き従うて、最後の十念勤めつる聖ひじり、二人が首を乞ひ得て、天王寺に持つて歸り、本間が子息源内兵衛資忠に、始よりのありさまを語る。資忠、父が首を一目見て、一言をも出さず、たゞ涙に咽んで居たりけるが、いかゞ思ひけむ、鎧を肩に投げ懸け、馬に鞍置いて、たゞ一人打ち出でむとす。聖怪しみ思うて、鎧の袖を引き留め、「こはそも如何なる事にて候ふぞ。御親父もこの合戦に先がけして、たゞ名を天下の人に知られむとばかりおぼしめさば、父子ともうち連れてこそ向はせ給ふべけれども、命をば相摸殿に奉り、恩賞をば子孫の榮花に残さむとおぼしめしける故にこそ、人より先に討死をばし給ふらめ。然るに思ひ籠め給へる所もなく、また敵陣にかけ入つて、父子ともに討死し給ひなば、誰かその跡を繼ぎ、誰かその恩賞を蒙るべき。子孫無窮に榮ゆる



を以て、父祖の孝行をあらはす道とは申すなり。御悲歎のあまりに、是非なく死を共にせむと思しめすは理なれども、暫くとゞまらせ給へ」と堅く制しければ、資忠涙を抑へて力なく、著たる鎧を脱ぎ置きたり。聖、さては制止にかゝはりぬと、うれしく思ひて、本間が首を小袖に裹み、葬禮の爲に、あたりなる野べへ越えけるその間に、資忠、今はとむべき人なれば、則ちうち出でて、まづ上宮太子の御前に参り、「今生の榮耀は、今日をかぎりの命なれば、祈る所にあらず。たゞ大悲の弘誓の誠あらば、父にて候ふ者の討死仕り候ひし戦場の、同じ苦の下に埋もれて、九品安養の同じ臺に生るゝ身となさせ給へ」と、泣く泣く祈念をこらしめて、涙と共に立ち出でけり。

石の鳥居を過ぐると見れば、わが父と共に討死しける、人見四郎入道が書きつたる歌あり。これぞまことに後の世までの物語に、留むべき事よと思ひければ、右の小指を食ひ切つて、その血を以て一首を側に書き添へ、赤坂の城へぞ向ひける。城近くなりぬる所にて、馬より下り、弓を脇に挟みて、城戸を叩き、「城中の人々

大悲の弘誓一切衆生を悲愍してこれが苦惱を除かむとし給ふ佛菩薩の弘大なる誓願。九品安養一極樂世界。石の鳥居一天王寺の西門の前に在り。

に申すべき事あり」と呼ばはりけり。やゝ暫くあつて、兵二人、櫓の小間より顔をさし出して、「誰人にて御渡り候ふや」と問ひければ、「これは今朝この城に向つて、討死して候ひつる本間九郎資貞が嫡子、源内兵衛資忠と申す者にて候ふなり。人の親の子を思ふあはれみ、心の闇に迷ふ習にて候ふ間、共に討死せむことを悲みて、われに知らせずして、たゞ一人討死しけるにて候ふ。相伴なふ者なくて、中有の途に迷ふらむ。さこそと思ひやられ候へば、同じく討死仕りて、なき跡まで父に孝道を盡し候はばやと存じて、たゞ一騎相向ひて候ふなり。城の大將にこの由を申され候うて、木戸を開かれ候へ。父が討死の所にて、同じく命を止めて、その望を達し候はむ」と、慇懃に事を請ひ、涙に咽んで立ちたりける。一の木戸を堅めたる兵五十餘人、その志孝行にして、相向ふ所、優しくあはれなるを感じて、則ち木戸を開き、逆茂木を引きのけしかば、資忠馬に打ち乗り、城中へかけ入りて、五十餘人の敵と火を散らしてぞ切り合ひける。遂に父が討たれし跡にて、太刀を口にくはへて、うつぶしに倒れて、貫かれてこそ失せにけれ。惜しいかな、父の資貞は無雙の



弓矢取にて、國の爲に要須<sup>もちし</sup>たり、また子息資忠はためしなき忠孝の勇士にて、家の爲に榮名あり。人見は年老い齡傾きぬれども、義を知つて命を思ふこと、時と共に消息す。この三人、同時に討死しぬと聞えければ、知るも知らぬもおしなべて、歎かぬ人はなかりけり。

既に先懸の兵ども、ぬけくへに赤坂の城へ向ひ、討死する由披露ありければ、大將即ち天王寺を打ち立ちて馳せ向ひけるが、上宮太子の御前にて馬より下り、石の鳥居を見給へば、左の柱に、

花さかぬ老木のさくら朽ちぬともその名は苔の下にかくれじ

と、一首の歌を書いて、その次に、「武藏の國の住人人見四郎恩阿、生年七十三、正慶二年二月二日、赤坂の城へ向つて、武恩を報せむ爲に、討死仕り畢んぬ」とぞ書きたりける。また右の柱を見れば、

まてしばし子を思ふ闇に迷ふらむ六つのちまたの道しるべせむ

と書いて、「相摸の國の住人本間九郎資貞が嫡子、源内兵衛資忠、生年十八歳、正慶

二年仲春二日、父が死骸を枕にして、同じ戰場に命を止め畢んぬ」とぞ書いたりける。父子の恩義、君臣の忠貞、この二首の歌に顯れて、骨は化<sup>け</sup>して黄壤一堆の下に朽ちぬれど、名は留つて青雲九天の上に高し。されば今に至るまで、石碑の上に消え残れる、三十一<sup>みそひとち</sup>字を見る人、感涙を流さぬはなかりけり。

さる程に阿曾の彈正少弼、八萬餘騎の勢を率して赤坂へ押し寄せ、城の四方二十餘町、雲霞の如くに取り巻いて、まづ関の聲をぞ揚げたりける。その聲山に動かし地を震ふに、蒼涯も忽に裂けつべし。この城、三方は岸高うして、屏風を立てたるが如し。南の方ばかりこそ平地に續いて、堀を廣く、深く掘り切つて、岸の額に塀を塗り、その上に櫓をかき雙べたれば、いかなる大力早業なりとも、たやすく攻むべきやうぞなき。されども寄手大勢なれば、思ひ悔つて、楯にはづれ、矢面に進んで、堀の中へ走り下つて、切岸を上<sup>あが</sup>らむとしける所を、堀の内より究竟の射手ども、鏃を支へて、思ふやうに射ける間、軍の度ごとに、手負死人、五百人六百人、射出されざる時はなかりけり。これをも痛まず、新手を入れかへ入れかへ、十三日までぞ攻



めたりける。されども城中、少しも弱らず見えけり。

こゝに播磨の國の住人、吉河八郎といふ者、大將の前に來つて申しけるは、「この城の體たらく、力攻にし候はば、左右なく落つべからず候ふ。楠この一兩年が間、和泉、河内を管領して、若干の兵糧を取り入れて候ふなれば、兵糧も左右なく盡き候ふまじ。つらく思案を廻らし候ふに、この城、三方は谷深うして地に續かず、一方は平地にてしかも山遠く隔れり。さればいづくに水あるべしとも見えぬに、火矢を射れば、水彈にてうち消し候ふ。この頃は雨の降る事も候はぬに、これ程まで水の卓散に候ふは、いかさま南の山の奥より地の底に樋を伏せ、城中へ水を懸け入るゝかと覺え候ふ。あはれ人夫を集めて、山の腰を掘り切らせて御覽候へかし」と申しければ、大將げにもとて、人夫を集め、城へ續きたる山の尾を、一文字に掘り切つて見れば、案の如く、土の底二丈餘の下に樋を伏せて、側に石を疊み、上に眞木の瓦を覆せて、水を十町餘の外よりぞ懸けたりける。この揚水を止められて後、城中に水乏しうして、軍勢口中の渴忍びがたければ、四五日が程は、草葉に置ける朝

眞木の瓦―眞木は  
樋をいふ。瓦と  
いふは、伴信友  
の説に、上をお  
ほふ料を、すべ

て瓦といふが本  
語なるべきかと  
いへり。これも  
樋の蓋を瓦とい  
ひしなるべしと  
いふ。

の露を嘗め、夜氣に潤へる地に身を當て、雨を待ちけれども、雨降らず。寄手これに利を得、透間なく火矢を射ける間、大手の櫓二つをば焼き落しぬ。城中の兵、水を飲まで十二日になりければ、今は精力盡きはて、防ぐべき方便もなかりけり。「死にたる者は再び歸る事なし。いざや、とても死なむずる命を、各、力の未だ墜ちぬさきに打ち出でて、敵と刺し違へ、思ふさま討死せむ」と、城の木戸を開いて、同時に打ち出でむとしけるを、城の本人平野將監入道、高櫓より走り下り、袖をひかへていひけるは、「暫く楚忽の事なし給ひそ。今はこれ程に力盡き、喉乾いて疲れぬれば、思ふ敵に相逢はむ事ありがたし。名もなき人の中間、下部どもに生捕られて、恥を曝さむ事、心うかるべし。つらく事の様を案ずるに、吉野、金剛山の城、未だ相支へて勝負を決せず、西國の亂未だ静まらざるに、今降人になつて出でたらむ者をば、人に見こらせじとて、討つ事あるべからずと存するなり。とてもかなはぬ我等なれば、暫く事を謀つて降人になり、命を全うして、時到來む事を待つべし」といへば、諸卒みなこの議に同じて、その日の討死をばやめてけり。



さる程に次の日、軍の最中に、平野入道高櫓に登つて、「大將の御方へ申すべき仔細候ふ。暫く合戦をやめて、きこしめし候へ」といひければ、大將、澁谷の十郎を以て事の様を尋ぬるに、平野、木戸口に出で合つて、「楠、和泉、河内の兩國を平げて威を振ひ候ひし刻に、一旦の難を遁れむ爲に、心ならず御敵に屬して候ひき。この仔細、京都に參じ候ひて、申し入れ候はむと仕り候ふ處に、既に大勢を以ておし懸けられ申し候ふ間、弓矢取る身の習にて候へば、一矢仕りたるにて候ふ。その罪科をだに御免あるべきにて候はば、頸を伸べて降人に參るべく候ふ。もし叶ふまじきとの御諚にて候はば、力なく、一矢仕つて、尸を陣中に曝すべきにて候ふ。この様を具に申され候へ」といひければ、大將大きに喜びて、本領安堵の御教書をなし、殊に功あらむ者には、則ち恩賞を申し沙汰すべき由返答して、合戦をぞやめける。城中に籠る所の兵二百八十二人、明日死なむずる命をも知らず、水に渴せる堪へ難さにみな降人になつてぞ出でたりける。長崎九郎左衛門の尉これを請取つて、まづ降人の法なればとて、物具、太刀、刀を奪ひ取り、高手、小手にいましめて、六波羅へぞ

渡しける。降人のともがら、かくの如くならば、たゞ討死すべかりけるものと、後悔すれどもかひなし。日を経て京都に著きしかば、六波羅に縛め置いて、合戦の事始なれば、軍神に祭りて、人に見懲りさせよとて、六條河原に引き出し、一人も残らず、首を刎ねて懸けられけり。是を聞いてぞ、吉野、金剛山に籠りたる兵どもも、いよく獅子の齒がみをして、降人に出でむと思ふ者はなかりけり。罪を緩らするは、將の謀なりといふ事を知らざりける六波羅の成敗を、みな人ごとにおしなべて、悪しかりけりと申し、が、幾程もなうして、悉く亡びけるこそ不思議なれ。情は人の爲ならず。あまりに奢を極めつゝ、我意に任せてふるまへば、武運も早く盡きにけり。因果の道理を知るならば、心あるべき事どもなり。(卷六)

## 吉野の城軍の事

元弘三年正月十六日、二階堂出羽の入道道蘊、六萬餘騎の勢にて、大塔の宮の籠ちせ給へる吉野の城へ押し寄する。菜摘河の川淀より、城の方を見上げたれば、嶺



には白旗、赤旗、錦の旗、深山みやまおろしに吹きなびかされて、雲か花かと怪しまる。麓には數千の官軍、兜の星を輝かし、鎧の袖を連ねて、錦繡しける地の如し。峯高うして道細く、山嶮しうして苦なめらかなり。されば幾十萬騎の勢にて攻むるとも、たやすく落すべしとは見えざりけり。同じき十八日の卯の尅より、兩陣互に矢合せして、入れかへ入れかへ攻め戦ふ。官軍はもの馴れたる案内者どもなれば、このつまり、かしこの難所に走り散つて、攻め合せ開き合せさんぐくに射る。寄手は死生ふち不知の坂東武士なれば、親子討たるれども顧みず、主従亡ぶれどもものともせず、乗り越え乗り越え攻め近づく。夜晝七日が間、息をもつがず相戦ふに、城中の勢三百餘人討たれければ、寄手も八百餘人討たれにけり。況や矢に當り石に打たれ、生死の間を知らざる者は、幾千萬といふ數を知らず。血は草芥を染め、尸は路徑に横たはれり。されども城の體、少しも弱らねば、寄手の兵、多くは退屈してぞ見えたりける。

こゝにこの山の案内者として、一方へ向けられたりける吉野の執行岩菊丸、己が手

金澤右馬の助一前には阿曾の彈正少羽とありて、一致せず。

の者を呼び寄せて申しけるは、「東條の大將金澤右馬の助殿は、既に赤坂の城を攻め落して、金剛山へ向はれたりと聞ゆ。當山の事、われら案内者たるに依つて、一方を承つて向ひたるかひもなく、攻め落さで數日を送る事こそ遺恨なれ。つらつら事の様を案ずるに、この城を大手より攻めば、人のみ討たれて、落す事ありがたし。推量するに、城の後の山、金峯山には、けはしきをたのんで、敵さまで勢を置きたることあらじと覺ゆるぞ。もの馴れたらむずる足輕の兵百五十人すぐつて、かちだちになし、夜にまぎれて金峯山より忍び入り、愛染寶塔の上にて、夜のほととと明けはてむ時、関の聲をあげよ。城の兵、関の聲に驚いて、度を失はむ時、大手、搦手、三方より攻め上つて、城を追ひ落し、宮を生捕り奉るべし」とぞ下知しける。さらばとて、案内知りたる兵百五十人をすぐつて、その日の暮程より、金峯山へ廻して、岩を傳ひ谷を上るに、案の如く、山のけはしきをたのみけるにや、たゞこゝかしてこの梢に、旗ばかりを結びつけ置きて、防ぐべき兵一人もなし。百餘人の兵ども、思ひのまゝに忍び入つて、木の下、岩の陰に弓矢を伏せ、兜を枕にして、夜の明



くるをぞ待ちたりける。

相圖の頃にもなりにければ、大手五萬餘騎、三方より押し寄せて攻め上る。吉野の大衆五百餘人、攻口に下り合つて防ぎ戦ふ。寄手も城の内も、互に命を惜まず、追ひ上せ追ひ下し、火を散らしてぞ戦ひたる。かゝる所に、金峯山より廻りたる搦手の兵百五十人、愛染寶塔より下つて、在々所々に火をかけて、関の聲をぞ揚げたりける。吉野の大衆、前後の敵を防ぎかねて、或はみづから腹をかき切つて、猛火の中へ走り入つて死ぬるもあり、或は向ふ敵に引つ組んで、刺し違へて共に死ぬるもあり。思ひ〜に討死をしける程に、大手の堀一重は、死人に埋りて平地になる。

さる程に搦手の兵、思ひも寄らぬ勝手の明神の前より押し寄せて、宮の御座ありける藏王堂へ、打つて懸りける間、大塔の宮、今は遁れぬ所なりとおぼしめし切つて、赤地の錦の鎧直垂に、緋緘の鎧のまだ巳の刻なるを、透間もなく召され、龍頭の兜の緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇に挟み、劣らぬ兵二十餘人、前後左右に立

巳の刻—今の午前  
十時。それより  
推して、物の猶

新しきないふ。

ち、敵の群つて控へたる中へ走りかゝり、東西を拂ひ、南北へ追ひ廻し、黒煙を立てて切つて廻らせ給ふに、寄手大勢なりといへども、僅の小勢に切り立てられ、木の葉の風に散るが如く、四方の谷へさつと引く。敵引けば、宮は藏王堂の大庭に並み居させ給ひて、大幕うち揚げて、最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つ所の矢七筋、御頬さき、二の御腕、二個所つかれさせ給ひて、血の流るゝ事瀧の如し。然れども立ちたる矢をも抜き給はず、流るゝ血をものごひ給はず、敷皮の上に立ちながら、大盃を三度傾けさせ給へば、木寺相摸、四尺三寸の太刀の鋒に、敵の首をさし貫いて、宮の御前に畏まり、「戈鋌劔戟を降らすこと電光の如くなり、磐石岩を飛ばすと春の雨に相同じ。然りとはいへども、天帝の身には近づかば、修羅かれが爲に破らる」と、囃しを揚げて舞ひたるありさまは、漢楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが、劔を抜いて舞ひしに、樊噲庭に立ちながら、帷幕をかゝげて項王を睨みし勢も、かくやと覺ゆるばかりなり。

大手の合戦急なりと覺えて、敵、身方の関の聲、相交りて聞えけるが、げにもその



戦に自ら相當る事、多かりけりと見えて、村上彦四郎義光、鎧に立つ所の矢十六筋、枯野に残る冬草の、風に伏したる如くに折りかけて、宮の御前に參つて申しけるは、「大手の一の木戸、いふがひなく攻め破られつる間、二の木戸に支へて、數刻相戦ひ候ひつる處に、御所中の御酒宴の聲、すさまじく聞え候ひつるに就いて參つて候ふ。敵既にかさに取り上げて、御方の氣の疲れ候ひぬれば、この城にて功を立てむ事、今は叶はじと覺え候ふ。未だ敵の勢を餘所へ廻し候はぬさきに、一方より打ち破つて、ひとまづ落ちて御覽あるべしと存じ候ふ。但し後に残り留つて戦ふ兵なくば、御所の落ちさせ給ふものなりと心得て、敵いづくまでも續きて追つかけ參らせむと覺え候へば、恐ある事にて候へども、召されて候ふ錦の御鎧直垂と、御物具とを下し賜ひて、御諱の字を冒して敵を欺き、御命に代り參らせ候はむ」と申しければ、宮、「いかでかさる事あるべき。死なば一所にてこそ、ともかくもならめ」と仰せられけるを、義光ことばを荒らかにして、「かゝるあさましき御事や候ふ。漢の高祖滎陽に圍まれし時、紀信、高祖の眞似をして、敵を欺かむと乞ひしをば、高祖

これを許し給ひ候はずや。これ程にいふがひなき御所存にて、天下の大事を思しめし立ちける事こそうたてけれ。はやその御物具を脱がせ給ひ候へ」と申して、御鎧の上帶を解き奉れば、宮げにもとや思しめしけむ、御物具、鎧直垂まで脱ぎかへさせ給ひて、「われもし生きたらば、汝が後世を弔ふべし。共に敵の手にかゝらば、冥途までも同じ巷に伴なふべし」と仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を南へ向つて落ちさせ給へば、義光は二の木戸の高櫓に上り、遙に見送り奉り、宮の御後影のかすかに隔らせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓のさまの板を切り落し、身をあらはにして、大音聲を揚げて名乗りけるは、「天照大神の御子孫、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇第二の皇子、一品兵部卿親王尊仁、逆臣の爲に亡され、恨を泉下に報ぜむ爲に、たゞ今自害するありさま見置きて、汝等が武運忽に盡きて、腹を切らむずる時の手本にせよ」といふまゝに、鎧を脱ぎて櫓より下へ投げ落し、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫の二つ小袖をおし膚脱いで、白く清げなる膚に刀をつき立て、左の脇より右のそば腹まで、一文字にか



き切つて、腸つかんで、櫓の板に投げつけ、太刀を口にくはへて、うつぶしになつてぞ伏したりける。

天河—吉野の奥の地名。

大手、搦手の寄手これを見て、すはや大塔の宮の御自害あるは、われさきに御首を賜はらむとて、四方の圍みを解いて一所に集る。その間に宮は引き違へて、天河へぞ落ちさせ給ひける。南より廻りける吉野の執行が勢五百餘騎、多年の案内者なれば、道を横ぎり、かさに廻りて、討ち留め奉らむと、取り籠むる。村上彦四郎義光が子息、兵衛藏人義隆は、父が自害しつる時、共に腹を切らむと、二の木戸の櫓の下まで馳せ来りたりけるを、父大きに諫めて、「父子の義はさる事なれども、しばらく生きて、宮の御先途を見はて參らせよ」と、庭訓を残しければ、力なく、しばらくの命を延べて、宮の御供にぞ候ひける。落ち行く道の軍、事既に急にして、討死せずば、宮落ち得させ給はじと覺えければ、義隆たゞ一人踏み留りて、追つてかゝる敵の、馬の諸膝薙いでは切りすゑ、平頸切つては勿ね落させ、九折なる細道に、五百餘騎の敵を相受けて、半時ばかりぞ支へたる。義隆、節石の如くなかといへども、

その身金鐵ならざれば、敵の取り巻いて射ける矢に、義隆既に十餘個所の創を被りてけり。死ぬるまでも、なほ敵の手にかゝらじとや思ひけむ、小竹の一叢ありける中へ走り入つて、腹かき切つて死ににけり。村上父子が敵を防ぎ、討死しけるその間に、宮は虎口に死を御遁れあつて、高野山へぞ落ちさせ給ひける。

出羽の入道道蘊は、村上が宮の御眞似をして、腹を切つたりつるを、まことと心得て、その首を取つて京都へ上せ、六波羅の實檢にさらすに、ありもあらぬ者の首なりと申しける間、獄門に懸くるまでもなくて、九原の苔にうづもれにけり。道蘊は吉野の城を攻め落したるは、専一の忠戦なれども、大塔の宮を討ち漏らし奉りぬれば、猶安からず思ひて、やがて高野山へ押し寄せ、大塔に陣を取つて、宮の御在所を尋ね求めけれども、一山の衆徒みな心を合せて、宮を隠し奉りければ、數日の粉骨かひもなくて、千劔破の城へぞ向ひける。(卷七)

九原—禮記檀弓に「從先大夫於九原」の註に「晉卿大夫之墓、在千九原」とありて、もと地名なれども後に墓の意に轉用せらる。

### 千劔破の城軍の事



千劔破の城—金剛山の西南。

千劔破の城の寄手は、前の勢八十万騎に、また赤坂の勢、吉野の勢、馳せ加つて、百萬騎に餘りければ、城の四方二三里が間は、見物、相撲の場の如くうち圍んで、尺寸の地をも餘さず充ち満ちたり。旌旗の風に翻つて靡く氣色は、秋の野の尾花が末よりも繁く、劔戟の日に映じて輝けるありさまは、曉の霜の枯草に布けるが如くなり。大軍の近づく所には、山勢これが爲に動き、関の聲の震ふ中には、坤軸須臾に摧けたり。この勢にも恐れずして、僅に千人に足らぬ小勢にて、誰をたのみ、何をか待つともなきに、城中にこらへて防ぎ戦ひける、楠の心の程こそ不敵なれ。

この城、東西は谷深く切れて、人の登るべきやうもなし。南北は金剛山につゞきて、しかも峯峙ちたり。されども高さ二町ばかりにて、廻り一里に足らぬ小城なれば、何程の事かあるべきと、寄手これを見侮つて、はじめ一兩日の程は、向ひ陣をも取らず、攻め支度をも用意せず、われさきにと、城の木戸口の邊まで、かづきつれてぞ登りたりける。城中の者ども少しも騒がず、静まりかへつて、高櫓の上より、大石を投げかけ投げかけ、楯の板を微塵に打ち碎いて、漂ふ所をさしつめさしつめ射

ける間、四方の坂よりころび落ち、落ち重なつて手を負ひ、死を致す者、一日が中に五六千人に及べり。長崎四郎左衛門の尉、軍奉行にてありければ、手負、死人の實檢をしけるに、執筆十二人、夜晝三日が間、筆をも置かず記せり。さてこそ今より後は、大將の御許しなくして合戦したらむずるともがらをば、却つて罪科に行はるべしと觸れられければ、軍勢暫く軍をやめて、まづ己が陣々をぞ構へける。

こゝに赤坂の大將金澤右馬の助、大佛奥州に向つて宣ひけるは、「先日赤坂を攻め落しつること、全く士卒の高名にあらず。城中の構を推し出して、水を留めて候ひしに依つて、敵程なく降参仕り候ひき。これを以てこの城を見候ふに、これ程僅なる山の巔に、用水あるべしとも覺え候はず。又あげ水などを、よその山より懸くべき便りも候はぬに、城中に水卓散にありげに見ゆるは、いかさま東の山の麓に流れたる溪水を、夜々に汲むかと覺えて候ふ。あはれ宗徒の人々一兩人に仰せつけられて、この水を汲ませぬやうに御計らひ候へかし」と申されければ、兩大將、「この儀然るべく覺え候ふ」として、名越越前の守を大將として、その勢三千餘騎をさ



し分けて、水の邊に陣を取らせ、城より人下り下りぬべき道々に、逆茂木を引ききてぞ待ちかけける。楠は元來、勇氣智謀相兼ねたる者なりければ、この城を拵へけるはじめ、用水の便りを見るに、五所の祕水とて、峯通る山伏の祕して汲む水、この峯にあつて、滴る事一夜に五斛ばかりなり。この水、いかなる早にもひる事なければ、形の如く人の口中を潤さむ事、相違あるまじけれども、合戦の最中は、或は火矢を消さむため、又喉の乾く事繁ければ、この水ばかりにては不足なるべしとて、大きな木を以て、水槽を二三百打たせて、水を湛へ置きたり。また數百個所作り並べたる役所の軒に繼樋を懸けて、雨降ればあまだれを少しも餘さず、槽にうけ入れ、槽の底に赤土を沈めて、水の性を損ぜぬやうにぞ拵へける。この水を以て、たとひ五六十日雨降らずともこらへつべし。そのうちに又などは雨降ることなからむと了簡しける、智慮の程こそ淺からね。されば城よりは、あながちにこの谷水を汲まむともせざりけるを、水ふせぎける兵ども、夜毎に機をつめて、今や〜と待ちかけけるが、始の程こそあれ、後には次第々々に心怠り機緩まつて、この水をば

汲まざりけるぞとて、用心の體少し無沙汰にぞなりにける。楠これを見すまして、究竟の射手をそろへて二三百人、夜にまぎれて城よりおろし、まだしのゝめの明けはてぬ、霞隠れより押し寄せ、水邊に詰めて居たる者ども、二十餘人斬り伏せて、すきまもなく切つてかゝりける間、名越越前の守こらへかねて、本の陣へぞ引かれける。寄手數萬の軍勢これを見て、渡り合せむとひしめけども、谷を隔て、尾を隔てたる道なれば、たやすく馳せ合する兵もなし。とかくしけるその間に、捨て置きたる旗、大幕など取り持たせて、楠が勢靜に城中へぞ引き入りける。

その翌日、城の大手に三本傘の紋書いたる旗と、同じき紋の幕とを引いて、「これこそ皆、名越殿より賜はつて候ひつる御旗にて候へば、御紋ついて候ふ間、他人の爲には無用に候ふ。御内の人々、これへ御入り候ひて、召され候へかし」といひて、同音にどつと笑ひければ、天下の武士どもこれを見て、「あはれ名越殿の不覺や」と、口々にいはぬ者こそなかりけれ。名越一家の人々、この事を聞きて、安からぬ事に思はれければ、當手の軍勢ども、一人も残らず、城の木戸を枕にして、討死をせよ



とぞ下知せられける。これに依つてかの手の兵五千餘人、思ひ切つて、討てども、射れども用のず、乗り越え乗り越え、城の逆茂木一重引き破つて、切岸の下までを攻めたりける。されども岸高うして切り立つたれば、やたけに思へども登り得ず。たゞ徒に城を睨み、怒を抑へて息つき居たり。この時城の中より、切岸の上に横たへて置きたる大木、十ばかり切つて落しかけたりける間、將棋倒しをする如く、寄手四五百人、壓おしに討たれて死ににけり。これにちがはむと、しどろになつて騒ぐ所を、十方の櫓よりさし落し、思ふやうに射ける間、五千餘人の兵ども、残りずくなに討たれて、その日の軍は果てにけり。まことに志の程は猛けれども、唯し出したる事もなくて、そこばく討たれにければ、「あはれ恥の上の損かな」と、諸人口ずさみはなほやまず。世の常ならぬ合戦の體を見て、寄手も悔りにくく、や思ひけむ、今は始のやうに、勇み進んで攻めむとする者もなかりけり。

長崎四郎左衛門の尉このありさまを見て、この城を力攻にすることは、人の討たるばかりにて、その功成り難し。たゞ取り巻いて、食攻じきざめにせよと下知して、軍を

花の下の連歌師―  
連歌師の雅稱。

やめられければ、徒然にみな堪へかねて、花の下の連歌師どもを呼び下し、一萬句の連歌をぞ始めたりける。その初日の發句をば、長崎九郎左衛門の尉師宗、

さきがけてかつ色見せよ山櫻

としたりけるを、脇の句、工藤二郎右衛門の尉、

嵐や花のかたきなるらむ

とぞ附けたりける。まことに兩句ともに、ことばの縁巧にして、句の體は優なれども、身方をば花になし、敵を嵐に喩へければ、禁忌なりける表爾へんじかなと、後にぞ思ひ知られける。大將の下知に隨ひて、軍勢みな軍をやめければ、慰む方やなかりけむ、或は碁雙六を打ちて日を過し、或は百服茶、褒貶の歌合などを翫びて夜を明かす。これにこそ、城中の兵は、なか／＼惱まされたる心ちして、心をやる方もなかりけれ。

少し程経て後、正成、いでさらば、また寄手をたばかりて、居眠覺させむとて、茶を以て人長ひとだけに、人形を二三十作つて、甲冑を著せ、兵仗を持たせて、夜中に城の籠に

百服茶―種々の茶  
を點じて百服に  
至るをいふ。



立て置き、前に壘楯てふだてをつき雙べ、その後にはすぐりたる兵五百人を交へて、夜のほのぼのと明けける霧の下より、同時に関をどつと作る。四方の寄手、関の聲を聞いて、「すはや城の中より打ち出でたるは。これこそ敵の運の盡くる所の死狂しにぐるみよ」とて、われ先にとぞ攻め合せける。城の兵、かねて巧みたる事なれば、矢軍やいくさちとするやうにして、大勢相近づけて、人形ばかりを木がくれに残し置いて、兵はみな、次第次第に城の上へ引きのぼる。寄手、人形をまことの兵ぞと心得て、これを打たむと相集る。正成所存の如く、敵をたばかり寄せて、大石を四五十、一度にばつとはなす。一所に集りたる敵三百餘人、矢庭に打ち殺され、半死半生の者五百餘人に及びり。軍はてゝこれを見れば、あはれ大剛の者かなと覺えて、一足も引かざりつる兵、みな人にはあらで、藁にて作れる人形なり。これを討たむと相集つて、石に打たれ矢に當つて死せるも高名ならず、またこれを危みて進み得ざりつるも、臆病のほど顯れていふかひなし。たゞとにもかくにも、萬人のもの笑ひとぞなりにける。これより後は、いよく合戦をやめける間、諸國の軍勢、たゞ徒に城を守り上

げて居たるばかりにて、するわざ一つもなかりけり。こゝに如何なる者か詠みたりけむ、一首の古歌を翻案して、大將の陣の前にぞ立てたりける。

よそにのみ見てや止みなむ葛城のたかまの山の峯の楠の木

今集に藤原定家の歌、よそにのみ見てややみなむ葛城の高間の山の峯の白雲、江口神崎一共に神崎川に臨み、往昔船着場として繁盛なりし處。

軍もなく、そゞろに向ひ居たるつれづれに、諸大將の陣々に、江口、神崎の傾城どもを呼び寄せて、様々の遊をさせられける。名越遠江の入道と、同じき兵庫の助とは、伯父、甥にておはしけるが、ともに一方の大將にて、攻口近く陣を取り、役所を雙べてぞおはしける。ある時、遊君の前にて雙六を打たれけるが、賽の目を論じて、聊かことばの違ひけるにや、伯父、甥、二人突き違へてぞ死なれける。兩人の郎従ども、何の意趣もなきに、刺し違へ刺し違へ、片時が間に死ぬる者、二百餘人に及びり。城の中よりこれを見て、「十善の君に敵あかをなし奉る天罰に依つて、自滅する人々のありさま見よ」とぞ笑ひける。まことにこれたゞごとにあらず、天魔波旬の所行かと覺えて、あさましかりし珍事なり。

同じき三月四日、關東より飛脚到來して、軍をやめて徒に日を送る事然るべから

天魔波旬一天魔は欲界の主。波旬は悪意を懐き悪法をなすもの。



魯般が雲の梯―淮南子の脩務訓に「楚欲攻宋、墨子聞而悼之、見楚王曰、臣見大王之必傷義而不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>宋、王曰、公輸天下巧士、作<sub>二</sub>雲梯之械<sub>一</sub>、設以攻<sub>レ</sub>宋、曷爲弗<sub>レ</sub>取、墨子曰、令<sub>二</sub>公輸設攻<sub>一</sub>、臣請守<sub>レ</sub>之、於是公輸般設<sub>二</sub>攻<sub>レ</sub>宋之械<sub>一</sub>、墨子設<sub>二</sub>守<sub>レ</sub>宋之備<sub>一</sub>、九攻而墨子九却

ずと下知せられければ、むねとの大將たち評定あつて、身方の向陣と、敵の城との間に、高く切り立てたる堀に橋を渡して、城へ打ち入らむとぞ巧まれける。これが爲に、京都より番匠を五百餘人召し下し、五六、八九寸の材木を集めて、廣さ一丈五尺、長さ二十丈あまりに梯かけはしをぞ作らせける。梯既に作り出しければ、大綱を二三千筋つけて、車を以て巻き立て、城の切岸の上へぞ倒し懸けたりける。魯般が雲の梯も、かくやと覺えて巧なり。やがてはやりをの兵ども五六千人、橋の上を渡り、われさきにと進みたり。あはやこの城、たゞ今打ち落されぬと見えたる所に、桶かねて用意やしたりけむ、投げ松明のさきに火をつけて、橋の上に、薪を積めるが如くに投げ集めて、水みづを以て、油を瀧の流るゝ様にかけたる間、火、橋桁に燃えついで、谷風、炎を吹き布いたり。なまじひに渡りかゝりたる兵ども、前へ進まむとすれば、猛火みやうくわ盛に燃えて身を焦す。歸らむとすれば、後陣の大勢前の難儀をいはず支へたり。側へ飛び下りむとすれば、谷深く巖聳えて、肝を冷やし、いかゞせむと身を揉うでおしあふ程に、橋桁中より燃え折れて、谷底へどうと落ちければ、數千の

レ之、弗<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>入、於<sub>レ</sub>是乃<sub>レ</sub>偃<sub>レ</sub>兵、輟<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>攻<sub>レ</sub>宋。公輸は魯般の字。八大地獄―等活、黒繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、無間の八つの地獄。八熱地獄といふ。宇多内―大和の宇陀、宇智の二郡。

兵、同時に猛火の中へ落ち重なつて、一人も残らず焼け死にけり。そのありさま、ひとへに八大地獄の罪人の、刀山劍樹に貫かれ、猛火鐵湯に身を焦すらむも、かくやと思ひ知られたり。

さる程に吉野、十津河、宇多、内の郡の野伏ども、大塔の宮の命を含んで、相集ること七千餘人、この峯、かしの谷に立ち隠れて、千劍破の寄手どもの往來の路をさし塞ぐ。これに依つて諸國の兵の兵糧忽に盡きて、人馬ともに疲れければ、轉漕にこらへかねて、百騎、二百騎、引いて歸る所を、案内者の野伏ども、所々のつまづまりに待ち受けて、討ちとめける間、日々夜々に討たる者、數を知らず。希有にして命ばかりを助かる者は、馬、物具を棄て、衣裳を剥ぎ取られて、はだかなれば、或は破れたる蓑を身に纏ひて、膚ばかりを隠し、或は草の葉を腰に巻いて、恥をあらはせる落人おちうとども、毎日に引きも切らず、十方へ逃げ散る。前代未聞の恥辱なり。されば日本國の武士どもの、重代したる物具、太刀、刀は、みなこの時に至つて失せにけり。名越遠江の入道、同じき兵庫の助二人、詮なき口論して、ともに死に



給ひぬ。その外の軍勢ども、親は討たるれば、子は髻もどりを剪つてうせ、主疵きずを被れば、郎従助けて引きかへす間、始は八十萬騎と聞えしかども、今は纔に十萬餘騎になりにけり。(卷七)

## 新田義貞に繪旨を賜ふ事

上野の國の住人新田の小太郎義貞と申すは、八幡太郎義家十七代の後胤、源家嫡流の名家なり。然れども平氏世を執りて、四海皆威に服する折節なれば、力なく關東の催促に隨ひて、金剛山の搦手にぞ向はれける。こゝに如何なる所存か出で來にけむ、或時執時船田入道義昌を近づけて宣ひけるは、「古より源平兩家朝家に仕へて、平氏世を亂る時は源家これを鎮め、源氏上を侵す日は平家これを治む。義貞不肖なりといへども、當家の門楣として、譜代弓箭の名を汚せり。然るに今相摸入道の行跡を見るに、滅亡遠きにあらず。われ本國に歸りて義兵を擧げ、宸襟を休め奉らむと存ずるが、勅令を蒙らでは叶ふまじ。如何にして、大塔の宮の令旨を賜は

つて、この素懷を達すべき」と問ひ給ひければ、船田入道畏まりて、「大塔の宮はこの邊の山中に忍びて御座候ふなれば、義昌方便てだてを運ゆらして、急いで令旨を申し出し候ふべし」と、事安げに領掌申して、おのが役所へぞ歸りける。

その翌日、船田己が若黨を三十餘人、野伏の姿に出で立たせて、夜中に葛城の峯へのぼせ、わが身は落ち行く勢の眞似をして、朝まだきの霧隠れに、追ひつ返しつ半時ばかり、同士軍をぞしたりける。宇多、内の郡の野伏どもこれを見て、身方の野伏ぞと心得、力を合せむために、餘所の峯より下り合ひて、近づきたりける處を、船田が勢のうちに取り籠めて、十一人まで生捕りてけり。船田この生捕どもを解き赦して、潛かに申しけるは、「今汝等をたばかり搦め取りたる事、全く誅せむためにあらず。新田殿本國へ歸りて、御旗を擧げむとし給ふが、令旨なくては叶ふまじければ、汝等到大塔の宮の御座所を尋ね問はむために召し捕りつるなり。命惜しくば案内者して、此方の使をつれて、宮の御座あんなる所へ參れ」と申しければ、野伏ども大きに悦びて、「その御意にて候はゞ、いとやすかるべき事にて候ふ。この



中に一人しばしの暇をたまはり候へ、令旨を申し出して、進らせ候はむ」と申して、残り十人をば留め置き、一人宮の御方へとてぞ参りける。今や〜と相待つ處に、一日ありて令旨を捧げて來れり。開きてこれを見るに、令旨にはあらで、綸旨の文章に書かれたり。その詞にいはいはく、

被<sub>レ</sub>綸言<sub>ニ</sub>稱<sub>レ</sub>敷<sub>レ</sub>化理<sub>ニ</sub>萬國<sub>ニ</sub>者明君德也。撥<sub>レ</sub>亂鎮<sub>ニ</sub>四海<sub>ニ</sub>者武臣節也。頃年之際、高時法師一類、蔑<sub>ニ</sub>如朝憲<sub>ニ</sub>、恣振<sub>ニ</sub>逆威<sub>ニ</sub>。積惡之至、天誅已顯焉。爰爲<sub>レ</sub>休<sub>ニ</sub>累年之宸襟<sub>ニ</sub>、將<sub>レ</sub>起<sub>ニ</sub>一舉之義兵<sub>ニ</sub>。叡感尤深、抽賞何淺。早運<sub>ニ</sub>關東征罰之策<sub>ニ</sub>、可<sub>レ</sub>致<sub>ニ</sub>天下靜謐之功<sub>ニ</sub>者、綸旨如<sub>レ</sub>此。仍執達如<sub>レ</sub>件。

元弘三年二月十一日

左 少 將

新田 小太郎 殿

綸旨の文章、家の眉目に備へつべき綸言なれば、義貞斜ならず悦びて、その翌日より虚病して、急ぎ本國へぞ下られける。宗徒の軍をもしつべき勢どもは、とにかくに事を寄せて國々へかへりぬ。

者してへれば。と言へればの約。されば。然れば。

船上へ臨幸の事

畿内の軍未だ静かならざるに、また四國、西國、日を追つて亂れければ、人の心皆薄氷を履んで、國の危き事、深淵に臨むが如し。『そも〜今かくの如く天下の亂るる事は、ひとへに宸襟より事起れり。もし逆徒さしちがうて、奪ひ取り奉らむとする事もこそあれ。相構へてよく〜警固仕るべし』と、隱岐の判官が方へ下知せられければ、判官、近國の地頭、御家人を催して、日番夜廻り隙もなく、宮門を閉ぢて警固し奉る。

二月一元弘三年。

閏二月下旬は佐々木富士名の判官が番にて、中門の警固にて候ひけるが、いかゞ思ひけむ、あはれこの君を取り奉つて、謀叛を起さばやと思ふ心ぞつきにける。されども申し入るべき便りもなく、案じ煩ひける所に、ある夜御前より、官女を以て御盃を下されたり。判官これを賜はりて、よき便りなりと思ひければ、潛かにかの官女を以て申し入れけるは、『上様には未だ知しめされ候はずや。楠兵衛正成、

薄氷を履んで詩經の小雅小晏篇に、戦々兢兢、如臨深淵、如履薄氷。



金剛山に城を構へて、立て籠り候ひし所に、東國勢百萬餘騎にて上洛し、去んぬる二月の初より攻め戦ひ候ふといへども、城は強うして、寄手既に引き色になりて候ふ。また備前には伊東大和の二郎、三石と申す所に城を構へて、山陽道をさし塞ぎ候ふ。播磨には赤松入道圓心、宮の令旨を賜はつて、攝津の國まで攻め上り、兵庫の北、摩耶と申す所に陣を取りて候ふ。その勢既に三千餘騎、京を締め地を略して、勢近國に振ひ候ふなり。四國には河野の一族に、土居の二郎、得能の彌三郎、御方に參つて旗を擧げ候ふ所に、長門の探題上野の介時直、かれに打ち負けて、行くへを知らず落ち行き候ひし後、四國の勢、悉く土居、得能に屬し候ふ間、既に大船を揃へて、これへ御迎に參るべしとも聞え候ふ。又まづ京都を攻むべしとも披露す。御聖運開かるべき時、既に到りぬとこそ覺えて候へ。義綱が當番の間に、忍びやかに御出で候うて、千波ちよの湊より御船に召され、出雲、伯耆の間、いづれの浦へも、風にまかせて御船を寄せられ、さりぬべからむずる武士を御憑み候ひて、暫く御待ち候へ。義綱恐れながら攻め參らせむ爲にまかり向ふ體にて、やがて御方に參り候ふ

べし」とぞ奏し申しける。主上「さらば汝まづ出雲の國へ越えて、同心すべき一族を語らひて、御迎に參れ」と仰せ下されける程に、義綱則ち出雲へ渡りて、鹽冶判官を語らふに、鹽冶いかと思ひけむ、義綱を追ひ籠め置いて、隱岐の國へかへさず。主上しばらくは義綱を御待ちありけるが、餘りに事滞りければ、たゞ運にまかせて御出であらむとおぼしめして、ある夜の宵のまぎれに、主上御輿にめされ、六條の少將忠顯朝臣ばかりを召し具して、ひそかに御所をぞ御出でありける。この體にては人のあやしめ申すべき上、駕輿丁もなかりければ、御輿をばやめられて、忝くも十善の天子、みづから玉趾ぎんぎを草鞋わらじの塵に汚して、みづから泥土の地を踏ませ給ひけるこそあさましけれ。

頃は三月二十三日の事なれば、月待つほどの暗き夜に、そことも知らぬ遠き野の、道をたどりて歩ませ給へば、今は遙に來ぬらむとおぼしめされたれば、後あとなる山は、未だ瀧の響のほのかに聞ゆる程なり。もし追つかけ參らする事もやあるらむと、恐ろしくおぼしめしければ、一足も前へと御心ばかりは進めども、いつ習は



せ給ふべき道ならねば、夢路をたどる心ちして、たゞ一所にのみやすらはせ給へば、こはいかゞせむと思ひ煩ひて、忠顯朝臣、御手を引き御腰を推して、今宵いかにもして、湊の邊までと心をやり給へども、心身ともに疲れはて、野徑の露に徘徊す。夜いたく更けにければ、里遠からぬ鐘の聲の、月に和して聞えけるを、道しるべに尋ね寄りて、忠顯朝臣、ある家の門を叩き、「千波の湊へはいづ方へ行くぞ」と問ひければ、内よりあやしげなる男一人出で向ひて、主上の御ありさまを見參らせけるが、心なき田夫野人なれども、何となくいたはしくや思ひ參らせけむ、「千波の湊へは、これより僅五千町ばかり候へども、道南北へ分れて、いかさま御迷ひ候ひぬと存じ候へば、御道しるべ仕り候はむ」と申して、主上をかるくと負ひ參らせ、程なく千波の湊へぞ著きにける。こゝにて時打つ鼓の聲を聞けば、夜は未だ五更の初なり。この道の案内者仕りたる男、かひなくしく湊の中を走り廻つて、伯耆の國へ漕ぎもどる、商人船のありけるを、とかく語らひて、主上を屋形の内に乗せ參らせ、その後暇申してぞ止まりける。この男まことにたゞ人にあらざりけるにや、

君御一統の御時に、最も抽賞あるべしとて、國中を尋ねられけるに、われこそそれにて候へと申す者、遂になかりけり。

夜も既に明けければ、船人纜を解いて、順風に帆を揚げ、湊の外に漕ぎ出す。船頭、主上の御ありさまを見奉りて、たゞ人にては渡らせ給はじとや思ひけむ、屋形の前に畏まつて申しけるは、「かやうの時、御船を仕つて候ふこそ、我等が生涯の面目にて候へ。いづくの浦へ寄せよとも、御錠に従ひて、御船の梶をば仕り候ふべし」と申して、まことに他事もなげなる氣色なり。忠顯朝臣これを聞き給ひて、隠してはなか／＼あしかりぬと思はれければ、この船頭を近く呼び寄せて、「これほどに推し當てられぬる上は、何をか隠すべき。屋形の中に御座あるこそ、日本國の主、あるじ忝くも十善の君にていらせ給へ。汝等も定めて聞き及びぬらむ、去年より隱岐の判官が館におし籠められて御座ありつるを、忠顯盗み出し參らせたるなり。出雲、伯耆の間に、いづくにてもさりぬべからむずる泊へ、いそぎ御船を著けて、おろし參らせよ。御運開けなば、必ず汝を侍に申しなして、所領一所の主になすべし」と



仰せられければ、船頭まことにうれしげなる氣色にて、取梶、面梶、取り合せて、片帆にかけてぞ馳せたりける。今は海上二三十里も過ぎらむと思ふ所に、同じ追風に帆を掛けたる船十艘ばかり、出雲、伯耆を指して馳せ來れり。筑紫船か、商人船かと思れば、さもあらで、隱岐の判官清高、主上を追ひ奉る船にてぞありける。船頭これを見て、「かくてはかなひ候ふまじ、これに御隠れ候へ」と申して、主上と忠顯朝臣とを、船底にやどし參らせて、その上にあひものとして、乾したる魚の入りたる俵を取り積んで、水手、梶取、その上に立ち並んで、櫓をぞ押したりける。

さる程に追手の船一艘、御座船に追つついて、屋形の中に乗り移り、こゝかして捜しけれども、見出し奉らず、「さてはこの船には召さざりけり。もしあやしき船や通りつる」と問ひければ、船頭、「今夜の子の刻ばかりに、千波の湊を出で候ひつる船にこそ、京上藤かとおぼしくて、冠とやらむ著たる人と、立烏帽子著たる人と、二人乗らせ給ひて候ひつる。その船今は五六里もさき立ち候ひぬらむ」と申しければ、「さては疑もなき事なり。はや船をおせ」とて、帆を引き梶を直せば、この船

はやがて隔りぬ。今はかうと、心やすく覺えて、跡の浪路を顧みれば、また一里ばかりさがり、追手の船百餘艘、御座船を目にかけて、鳥の飛ぶが如くに追つかけたり。船頭これを見て、帆の下に櫓を立て、萬里を一時に渡らむと、聲を帆に擧げて推しけれども、折ふし風たゆみ、潮に向うて、御船更に進まず。水手、梶取、いかげせむと、あわて騒ぎける間、主上、船底より御出あつて、膚の御守より、佛舍利を一粒取りいださせ給ひて、御疊紙に載せて、波の上にてぞ浮けられける。龍神これに納受やしたりけむ、海上俄に風變りて、御座船をば東へ吹き送り、追手の船をば西へ吹きもどす。さてこそ主上は虎口の難を御遁れあつて、御船は時の間に、伯耆の國名和の湊に著きにけり。

六條の少將忠顯朝臣、一人まづ船よりあり給ひて、「この邊には如何なる者か、弓矢取りて人に知られたる」と問はれければ、道行く人、立ちやすらひて、「この邊には名和の又太郎長年と申す者こそ、その身さして名ある武士にては候はねども、家富み、一族廣うして、心がさある者にて候へ」とぞ語りける。忠顯朝臣、よくよくそ



の仔細を尋ね聞き、やがて勅使を立て、仰せられけるは、「主上、隠岐の判官が館を御逃げあつて、今この港に御座あり。長年が武勇、かねて上聞に達せし間、御たのみあるべき由を仰せ出さるゝなり。たのまれ参らせ候ふべしや否や。速に勅答申すべし」とぞ仰せられたりける。名和の又太郎は、折ふし一族ども呼び集めて、酒飲うで居たりけるが、この由を聞き、案じ煩ひたる氣色にて、ともかくも申し得ざりけるを、舍弟小太郎左衛門の尉長重、進み出でて申しけるは、「われら忝くも十善の君にたのまれ参らせて、尸を軍門に曝すとも、名を後代に残さむ事、生前の思ひ出、死後の名譽たるべし。たゞ一筋に思ひ定めさせ給ふより、外の儀あるべしとも存じ候はず」と申しければ、又太郎を始として、當座に候ひける一族ども二十餘人、みなこの儀に同じてけり。「さらばやがて合戦の用意候ふべし。定めて追手も跡よりかゝり候ふらむ。長重は主上の御迎に参つて、すぐに船上山へ入れ参らせむ。かたゞはやがて打ち立つて、船上へ御参り候ふべし」といひ捨て、鎧一縮して走り出でければ、一族五人腹巻取つて投げかけ投げかけ、みな高紐しめて、

共に御迎にぞ参じける。

俄の事にて、御輿などもなかりければ、長重、著たる鎧の上に荒薦を巻いて、主上を負ひ参らせ、鳥の飛ぶが如くして、船上へ入れ奉る。長年、近邊の在家に人を廻し、「思ひ立つ事ありて、船上に兵糧を上ぐる事あり。わが倉の内にある所の米穀を、一荷持ちて運びたらむ者には、錢を五百づつ取らすべし」と觸れたりける間、十方より人夫五六千人出で來りて、われ劣らじと持ち送る。一日が中に兵糧五千餘石運びけり。その後家中の財寶、悉く人民百姓に與へて、おのれが館に火をかけ、その勢百五十騎にて船上に馳せ参り、皇居を警固仕る。長年が一族名和の七郎といひける者、武勇の謀ありければ、白布五百端ありけるを旗にこしらへ、松の葉を焼いて煙にふすべ、近國の武士どもの家々の紋を書いて、こゝの木のもと、かしの峯にぞ立て置きける。この旗ども峯の嵐に吹かれて、陣々に翻りけるさま、山中に大勢充滿したりと見えておびたし。(卷七)



六波羅攻の事

足利殿―高氏。  
赤松―則村。  
千種殿―忠顯。

さる程に六波羅には、六萬餘騎を三手に分けて、一手をば神祇官の前にひかへさせて、足利殿を防がせらる。一手をば東寺へ差し向けて、赤松を防がせらる。一手をば伏見の上へ向けて、千種殿の寄せらるゝ、竹田伏見を支へらる。巳の尅の初より、大手搦手同時に軍はじまりて、馬煙南北に靡き、関の聲天地を響かす。内野へは陶山と河野とに、宗徒の勇士二萬餘騎を副へて向けられたれば、官軍も左右なくかけ入らず、敵もたやすくかけ出でず、兩陣たがひに支へて、たゞ矢軍に時をぞ移しける。

こゝに官軍の中より、楯匂の鎧に、薄紫の母衣懸けたる武者たゞ一騎、敵の前に馬を駆け居ゑて、高聲に名のりけるは、「その身人數ならねば、名を知る人よもあらじ。これは足利殿の御内に、設樂五郎左衛門の尉と申す者なり。六波羅殿の御内に、我と思はむ人あらば、かけ合ひて手柄の程をも御覽ぜよ」といふまゝに、三尺五

寸の太刀を抜き、兜の眞向に差しかざし、まことに矢坪すくなく馬をたて、控へたり。その勢ひ一騎當千と見えなれば、敵身方互に軍を止めて見物す。こゝに六波羅の勢の中より、年の程五十ばかりなる老武者の、黒絲の鎧に、五枚兜の緒をしめて、白栗毛の馬に、青總懸けて乗つたるが、馬をしづくと歩ませて、高聲に名のりけるは、「その身愚蒙なりといへども、多年奉行の數に加はつて、末席を汚す家なれば、人は定めて筆とりなんと侮つて、あはぬ敵とぞ思ひ給ふらむ。然りといへども、我等が先祖をいへば、利仁將軍の氏族として、武略累葉の家業なり。今某十七代の末孫に、齋藤伊豫の房玄基といふ者なり。今日の合戦敵身方の安否なれば、命を何のために惜むべき。死に残る人あらば、わが忠戦を語つて、子孫に留むべし」といひ捨て、互に馬をかけ合せ、鎧の袖と袖とを引き違へて、むす組んでどうと落つ。設樂は力まさりなれば、上になつて齋藤が首を搔く。齋藤は心早き者なりければ、擧げざまに設樂を三刀刺す。いづれも剛の者なりければ、死して後までも、互に引組みたる手を放たず、共に刀を突き立て、同じ枕にこそ臥したりけれ。

利仁將軍―延喜年間、鎮守府將軍に任ぜられて下野國高座山の賊を平けたり。



又源氏の陣より、紺の唐綾威の鎧に、鍬形打つたる兜の緒を締め、五尺餘の太刀を抜いて肩に懸け、敵の前半町ばかりに馬を驅け寄せて、高聲に名のりけるは、「八幡殿よりこのかた、源氏代々の侍として、流石に名は隠れなけれども、時に取つて名を知られねば、然るべき敵に逢ひ難し。これは足利殿の御内に、大高二郎重成といふ者なり。先日度々の合戦に高名したりと聞ゆる、陶山備中の守、河野對馬の守はあはせぬか。出で合ひ給へ。打物して人に見物せさせむ」といふまゝに、手綱かいくり、馬に白沫かませて控へたり。陶山は東寺の軍強しとて、俄に八條へ向ひたりければ、この陣にはなし。河野對馬の守ばかり一陣に進んでありけるが、大高に詞をかけられて、元來たまらぬ駆武者なれば、なじかは少しもためらふべき、「通治これにあり」といふまゝに、大高に組みむと相近づく。これを見て、河野對馬の守が猶子に、七郎通遠とて、今年十六になりけり若武者、父を討たせじとや思ひけむ、眞先に馳せ塞がつて、大高に押し雙べてむずと組む。大高、河野七郎が總角を掴んで中に提げ、「己ほどの小者と組んで、勝負はすまじきぞ」とて、差しのけて鎧の笠

内野—京都市上京の西なる地。  
河原—賀茂川の河原。

符を見るに、その紋、傍折敷に三文字を書いて著けたりけり。さてはこれも河野が子か甥かにてぞあらむと打ち見て、片手打の下切に、諸膝かけず斬つて落し、弓だけ三杖ばかり投げたりける。對馬の守最愛の猶子を目の前に討たせて、なじかは命を惜むべき、大高に組みむと諸鎧を合せて馳せかゝる處に、河野が郎等どもこれを見て、主を討たせじと、三百餘騎にてをめてかゝる。源氏また大高を討たせじと、一千餘騎にてをめてかゝる。源平互に入り亂れて、黒煙を立て、攻め戦ふ。官軍多く討たれて内野へはつと引く。源氏新手を入れ替へて戦ふに、六波羅勢そくばく討たれて、河原へさつと引けば、平氏新手を入れ替へて、こゝを先途と戦ふ。一條二條を東西へ、追つ返しつ七八度が程を揉み合ひたる。源平兩陣もろとも、互に命を惜まねば、剛臆いづれとは見えざりけれども、源氏は大勢なれば、平氏遂にうち負けて、六波羅を指して引き退く。

東寺—教王護國寺。下京區に在り。

東寺へは赤松入道圓心、三千餘騎にて寄せかけたり。樓門近くなりければ、信濃の守範資、鎧踏ん張り左右を顧みて、「誰かある、あの木戸、逆茂木、引き破つて捨て



琵琶の甲―琵琶の  
甲即ち腹部に用  
ゐる材料かとい  
ふ。

安の郡―近江の野  
洲郡より産出す  
る材木かとい  
ふ。

貫―類貫、足には  
く一種の皮製の  
武器。

よ」と下知しければ、宇野、柏原、佐用、眞島のはやりをの若者ども三百餘騎、馬を乗り捨て、走り寄り、城の構を見渡せば、西は羅城門の礎より、東は八條河原邊まで、五六八九寸の琵琶の甲、安の郡などを鑄りぬいて、したゝかに塀を塗り、前には亂杭逆茂木を引きかけて、廣さ三丈餘に堀をほり、流水をせき入れたり。飛び漬らむとすれば、水の深さの程を知らず、渡らむとすれば橋を引きたり。いかゞせむと案じ煩ひたる處に、播磨の國の住人妻鹿の孫三郎長宗、馬より飛んで下り、弓を差しおろして、水の深さを探るに、末弭僅に残りたり。さてはわが長は立たむずるものと思ひければ、五尺三寸の太刀を抜いて肩に掛け、貫脱いで抛げすて、かつばと飛び漬りたれば、水は胸板の上へも揚らず。跡に續いたる武部の七郎これを見て、「堀は淺かりけるぞ」とて、長五尺ばかりなる小男が、是非なく飛び入りたれば、水は兜をぞ越えたりける。長宗きつと見返して、「わが總角に取りついて、あがれ」といひければ、武部の七郎、妻鹿が鎧の上帯を踏んで、肩に乗り揚り、一跳ね跳ねて向ひの岸にぞ著きにける。妻鹿から〜と笑つて、「御邊はわれを橋にして渡した

るや、いでその塀引き破つて捨てむ」といふまゝに、岸より上へつと跳ね揚り、塀柱の四五寸にあまりて見えたるに手を懸け、えいやえいやと引くに、一二丈ほり上げて、山の如くなる揚土、壁と共に崩れて、堀は平地になりにけり。これを見て築垣の上に、三百餘個所掻き雙べたる櫓より、差しつめ引き詰め射ける矢、雨の降るよりも猶しげし。長宗が鎧の菱縫、兜の吹返に立つところの矢少々折りかけて、高櫓の下へつと走り入り、兩金剛の前に太刀をさかさまにつき、齒咀して立ちたるは、いづれを二王、いづれを孫三郎とも分ちかねたり。東寺、西八條、針、唐橋にひかへたる六波羅の兵一萬餘騎、木戸口の合戦強しと騒ぎて、皆一手になり、東寺の東門の脇より、濕雲の雨を帯びて、暮山を出でたるが如く、ましぐらに打ち出でたり。妻鹿も武部も、すはや討たれぬと見えければ、佐用兵庫の助、得平源太、別所六郎左衛門、同じき五郎左衛門、相懸りに懸りて、面も振らず戦うたり。「あれ討たすな、殿原」とて、赤松入道圓心、嫡子信濃の守範資、次男筑前の守貞範、三男律師則祐、眞島、上月、菅家、衣笠の兵三千餘騎、抜きつれてぞかゝりける。六波羅の勢一萬



餘騎、七縱八横に破られて、七條河原へ追ひ出さる。一陣敗れて殘黨全からざれば、六波羅の勢竹田の合戦にも討ち負け、木幡、伏見の軍にも負けて、落ち行く勢ちりぢりに、六波羅の城へ逃げ籠る。勝つに乗つて逃ぐるを追ふ四方の寄手五萬餘騎、皆一所に寄せて、五條の橋爪より七條河原まで、六波羅を圍みぬること幾千萬といふ數を知らず。されども東一方をばわざと明けられたり。これは敵の心を一になさで、たやすく攻め落さむための謀なり。

千種の頭の中將忠顯朝臣、士卒に向つて下知せられけるは、「この城世の常の思をなしてのびくくに攻めば、千劍破の寄手かれを捨て、この後攻をしつと覺ゆるぞ。諸卒心を一にして、一時が間に攻め落すべし」と下知せられければ、出雲伯耆の兵ども、雜車二三百輛取り集めて、轅と轅とを結び合せ、その上に家を壞ちて山の如くに積み上げて、櫓の下へさし寄せ、一方の木戸を焼き破りけり。こゝに梶井の宮の御門徒、上林房、勝行房の同宿ども、混胃ひたかまにて三百餘人、地藏堂の北の門より、五條の橋爪へ打つて出でたりける間、坊門の少將、殿の法印の兵ども三千餘

騎、僅の勢にまくり立てられて、河原三町を追ひ越さる。されども山徒さすがに小勢なれば、長追しては悪しかりなむとて、また城の中へ引き籠る。六波羅にたて籠る所の軍勢少なしといへども、その數五萬騎に餘れり。この時若し志を一にして、同時にかけ出でたらしましかば、引き立つたる寄手ども、足をためじと見えしかども、武家亡ぶべき運の極きはみにやありけむ、日頃名を顯せし剛の者といへども勇まざる無雙の強弓精兵つよみせいのひやうといはるゝ者も弓引かずして、只あざれたるばかりにて、こゝかしこにむら立ちて、落支度の外は擬勢もなし。名を惜み家を重んずる武士どもだにもかくの如し。如何に況や月卿雲客、兒ちご、女童、女房達、軍といふことは未だ目にも見ぬことなれば、関の聲矢叫の音に懼ちをのゝきて、こは如何すべきと消え入るばかりの氣色なれば、げにも理なりと痛はしきさまを見るにつけても、兩六波羅いよいよ氣を失ひて、惘然の體なり。今まで忒心なき者と見えつる兵なれども、かやうに城中の色めきたる様を見て、叶はじと思ひけむ、夜に入りければ、木戸を開き逆茂木を越えて、我先にと落ち行きけり。義を知り命を輕んじて残り留る兵、僅に



千騎にも足らず見えにけり。(巻九)

稻村が崎干潟となる事

極樂寺―鎌倉の西端。稻村が崎の背後にあり。  
大館―新田義貞の部將。  
二十一日―元弘三年五月。

さる程に、極樂寺の切通へ向はれたる大館の次郎宗氏、本間に討たれて、兵ども片瀬、腰越まで引き退きぬと聞えければ、新田義貞、逞兵二萬餘騎を率して、二十一日の夜半ばかりに、片瀬、腰越をうち廻り、極樂寺坂へうち臨み給ふ。明けゆく月に敵の陣を見給へば、北は切通まで、山高く路けはしきに、木戸を構へ、垣楯をかい、數萬の兵、陣を雙べてなみ居たり。南は稻村が崎にて、沙頭路狭きに、浪打ちぎはまで、逆茂木を繁く引きかけて、沖四五町が程に、大船どもを並べて、櫓をかき、横矢に射させむと構へたり。げにもこの陣の寄手、かなはで引きぬらむも理なりと見給ひければ、義貞、馬より下り給ひて、兜を脱いで海上をはるくと伏し拜み、龍神に向つて祈誓し給ひけるは、「傳へ承る、日本開闢の主、伊勢の天照太神は、本地を大日の尊像に隠し、垂跡を滄海の龍神に顯し給へりと。わが君その苗裔

龍神八部―天龍八部ともいふ。天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅迦、これ八部にして、天龍は就中優秀のものなるが故に特出したるなり。

貳師將軍―李廣の事なり。集覽に、「李廣爲貳師將軍。」また古文選の註に、「貳師將軍拔二佩刀一刺山、飛泉涌出。」

として、逆臣の爲に西海の浪に漂ひ給ふ。義貞今臣たる道を盡さむ爲に、斧鉞を把つて敵陣に臨む。その志ひとへに王化を資け奉つて、蒼生を安からしめむとなり。仰ぎ願はくは、内海、外海の龍神八部、臣が忠義を鑑みて、潮を萬里の外に退け、道を三軍の陣に開かしめ給へ」と、至信に祈念し、みづから佩き給へる金作の太刀を抜いて、海中へ投げ給ひけり。まことに龍神納受やし給ひけむ、その夜の月の入り方に、前々更に干ることもなかりける稻村が崎、俄に二十餘町干上つて、平沙渺々たり。横矢射むと構へぬる數千の兵船も、落ち行く潮に誘はれて、遙の沖に漂へり。不思議といふもたぐひなし。

義貞これを見給ひて、「傳へ聞く、後漢の貳師將軍は、城中に水盡き渴に攻められける時、刀を抜いて岩石を刺し、かば、飛泉俄に涌き出でき。わが朝の神功皇后は、新羅を攻め給ひし時、みづから干珠を取り、海上に擲げ給ひしかば、潮水遠く退いて、遂に戦に勝つ事を得しめ給ふと。これみな和漢の佳例にして、古今の奇瑞に相似たり。進めや兵ども」と下知せられければ、江田、大館、里見、鳥山、田中、羽河、

稻村が崎干潟となる事



山名、桃井の人々を始として、越後、上野、武藏、相摸の軍勢ども、六萬餘騎を一手になして、稻村が崎の遠干潟を、眞一文字に駆け通りて、鎌倉中へ亂れ入る。あまたの兵これを見て、うしろなる敵にかゝらむとすれば、前なる寄手、跡について攻め入らむとす。前なる敵を防がむと欲すれば、うしろの大勢、道を塞いで討たむと欲す。進退度を失ひ、東西に心迷うて、はかばかしく敵に向つて、軍を致す事はなかりけり。

こゝに島津四郎と申し、は、大力の聞えありて、まことに器量、骨柄、人にすぐれたりければ、御大事に逢ひぬべき者なりとて、執事長崎入道、烏帽子子にして、一人當千とたのまれたりければ、先途せんどの合戦に向はむとて、未だ口々の防ぎ場へは向けられず、わざと相摸入道の屋形の邊にぞ置かれける。かゝる所に濱の手敗れて、源氏既に若宮小路まで攻め入りたりと騒ぎければ、相摸入道、島津を呼び寄せて、みづから酌を取つて酒をすゝめ、三度傾けける時、三間の厩に立てられたりける、關東無雙の名馬、白浪といひけるに、白鞍置いてぞ引かれける。見る人、これを羨ま

三つ物四つ物―具  
足、刀、太刀、弓、  
矢、母衣、兜を、  
七つ道具、また  
七つ物ともいへ  
ば、その中の物  
なるべけれど、  
明ならず。具足、  
兜、母衣を三つ  
物といひ、刀、  
太刀、弓、矢を四  
つ物といふかと  
の説あり。

ずといふ事なし。島津、門前よりこの馬にひたと打ち乗つて、由井の濱の浦風に、濃き紅の大笠符を吹きそらさせ、三つ物四つ物取りつけて、あたりを拂うて馳せ向ひければ、あまたの軍勢これを見て、まことに一騎當千の兵なり、この間執事の重恩を興へて、傍若無人のふるまひせられたるもことわりかなと、思はぬ人はなかりけり。義貞の兵これを見て、あはれ敵やとのしりければ、栗生、篠塚、畑、矢部、堀口、由良、長濱を始として、大力の覺え取つたる荒者ども、われ先にかの武者と組んで、勝負を決せむと、馬を進めて相近づく。「兩方名譽の大力どもが、人ませもせず軍する。あれ見よ」とのゝめきて、敵、身方もろともに、かたづを呑うで汗を流し、これを見物してぞ控へたる。かゝる所に、島津、馬より飛んで下り、兜を脱いで、しづしと身繕ひをする程に、何とするぞと見居たれば、おめくくと降参して、義貞の勢にぞ加りける。貴賤上下これを見て、譽めつる言葉を翻して、悪まぬ者はなかりけり。これを降人の始として、或は年來としころ重恩の郎従、或は累代奉公の家人ども、主を棄て、降人になり、親を棄て、敵につき、目もあてられざる有様なり。お



よそ源平威を振り、互に天下を争はむ事も、今日を限りとぞ見えたりける。(巻十)

## 筑紫合戦の事

英時―越後の守久  
時の子。時政七  
世の孫なり。

京都、鎌倉は、既に高氏、義貞の武功に依つて静謐しぬ。今は筑紫へ討手を下されて、九國の探題英時を攻めらるべしとて、二條の大納言師基卿を太宰の帥になされて、既に下し奉らむとせられける處に、六月七日、菊池、少貳、大友がもとより、早馬同時に京著して、九州の朝敵、残る所なく退治候ひぬと奏聞す。

その合戦の次第を、後に委しく尋ねれば、主上未だ船上に御座ありし時、少貳入道妙慧、大友入道具簡、菊池入道寂阿、三人同心して、御方に參るべき由を、申し入れける間、則ち繪旨に錦の御旗を添へてぞ下されける。その企、かれら三人が心中に秘して、未だ色に出さずといへども、さすがに隠れなかりければ、この事やがて探題英時が方へ聞えければ、英時、かれらが野心の實否を、よく伺ひ見む爲に、まづ菊池入道寂阿を、博多へぞ呼びける。菊池、この使に肝ついて、これはいかさ

ま、かの陰謀露顯して、われらを討たむ爲にぞ呼び給ふらむ、さらむに於いては、人に先をせられては叶ふまじ、こなたより遮つて、博多へ寄せて、靦面に勝負を決せむと思ひければ、かねての約諾にまかせて、少貳、大友が方へ觸れ遣しける處に、大友、天下の落居未だ如何なるべしとも見定めざりければ、分明の返事に及ばず。少貳はまた、その頃京都の合戦に、六波羅、毎度勝つに乗る由聞えければ、おのれが咎を補はむと思ひけむ、日頃の約を變じて、菊池が使八幡彌四郎宗安を討つて、その首を探題の方へぞ出したりける。

菊池入道大きに怒つて、「日本一の不當人どもをたのんで、この一大事を思ひ立ちけるこそ越度なれ。よし／＼その人々の興せぬ軍はせられぬか」とて、元弘三年三月十三日の卯の刻に、僅に百五十騎にて、探題の館へぞ押し寄せける。菊池入道榊田の宮の前をうち過ぎける時、軍の凶をや示されけむ、また乗り打ちにしたりけるをや御咎めありけむ、菊池が乗つたる馬、俄にすくみで、一足も前へ進み得ず。入道大きに腹を立て、「如何なる神にてもおはせよ、寂阿が戦場へ向はむずる道



にて、乗り打ちを咎め給ふべきやうやある。その儀ならば、矢一つ進らせむ、受けて御覽せよ」とて、上差の鏑を抜き出し、神殿の扉を二矢までぞ射たりける。矢を放つとひとしく、馬のすくみ直りにければ、さぞとよとあざ笑うて、則ち打ち通りける。その後社壇を見ければ、二丈ばかりなる大蛇、菊池が鏑に中つて死したりけるこそ不思議なれ。

探題はかねてより用意したる事なれば、大勢を城の木戸より外へ出して、戦はしむるに、菊池小勢なりといへども、みな命を塵芥に比し、義を金石に類して、攻め戦ひければ、防ぐ兵そくばく討たれて、つめの城へ引き籠る。菊池勝つに乗つて、塀を越え、木戸を切り破つて、透間もなく攻め入りける間、英時こらへかねて、既に自害をせむとしける處に、少貳、大友、六千餘騎にて、後攻をぞしたりける。菊池入道これを見て、嫡子肥後の守武重を呼びていひけるは、「われ今、少貳、大友に出し抜かれて、戦場の死に赴くといへども、義の當る所を思ふ故に、命を墮さむことを悔いず。然れば寂阿に於いては、英時が城を枕にして討死すべし。汝は急ぎわが館

へ歸つて、城を堅うし兵を起して、わが生前の恨を死後に報ぜよ」といひ含め、若黨五十餘騎を引き分けて、武重に相添へ、肥後の國へぞ返しける。故郷に留め置きし妻子どもは、出でしを遂の別れとも知らず、歸るを今やとこそ待つらめと、あはれに覺えければ、一首の歌を袖の笠符に書いて、故郷へぞ送りける。

故郷に今夜ばかりの命とも知らずや人のわれを待つらむ

肥後の守武重は、四十有餘の一人の親の、たゞ今討死せむとて、大敵に向ふ戦なれば、「一所にてこそともかくもなり候はめ」と、再三申しけれども、「汝をば天下の爲に留むるぞ」と、父が庭訓堅ければ、武重力なく、これを最後の別れと見捨て、泣く／＼肥後へ歸りける、心の中こそあはれなれ。

その後菊池入道は、二男肥後の三郎と相共に、百餘騎を前後に立て、後攻の勢には目をかけずして、探題の屋形へ攻め入り、遂に一足も引かず、敵に刺し違へ刺し違へ、一人も残らず討死す。專諸、荆卿が心は恩の爲に使はれ、侯生、豫子が命は義に依つて軽しとも、これらをや申すべき。

四十有餘の菊池家譜に、寂阿死する時、年四十二とあり。

專諸荆卿が、和漢朗詠集に、專諸荆卿之感、侯生豫子之投身、心爲恩使、命依



レ義經。』專諸は  
吳の人。荆卿は  
荆軻のこと、衛  
の人。侯生は侯  
壇のこと、魏の  
隠士。豫子は豫  
譲のこと、趙の  
人。何れも春秋  
戦國時代の刺客  
隠士なり。史記  
列傳に委し。

新少貳―頼尙。

蟬本―旗竿の上部  
一尺許の間。

「さても少貳、大友が今度のふるまひ、人にあらずと、天下の人に譏られながら、そ  
ら知らずして、世間の様を聞き居たりける所に、五月七日、兩六波羅既に攻め落さ  
れ、千劔破の寄手も、悉く南都へ引き退きぬと聞えければ、少貳入道、こはいかどす  
べきと仰天す。さらばわれ探題を討ち奉り、身の咎を遁ればやと思ひければ、まづ  
菊池肥後の守と大友入道とがもとへ、内々使者を遣して相語らふに、菊池はさきに  
懲りて、耳にも聞き入れず。大友はわれも咎ある身なれば、かくてや助かると、堅  
く領掌してけり。今日や明日やと吉日を選びける所に、英時、少貳が陰謀の企を聞  
きて、事の實否を伺ひ見よとて、長岡の六郎を少貳がもとへ遣しける。長岡則ち  
行き向つて、少貳に見參すべき由をいひければ、折節相勞はる事ありとて、對面に  
及ばず。長岡力なく、少貳入道が子息、筑後の新少貳がもとに行き向ひ、いひ入れ  
て、さりげなきさまにて、かなたこなたを見るに、たゞ今うち立たむするありさま  
にて、楯をはがせ、鏃を礪ぐ最中なり。また遠侍を見るに、蟬本せみもと白くしたる青竹の  
旗竿あり。さればこそ、船上より錦の御旗を賜はりたりと聞えしが、まことなりけ

りと思ひて、對面せば、やがて刺し違へむするものと思ひける所に、新少貳、何心  
もなげにて出で合ひたり。長岡、座席に著くとひとしく、「まさなき人々の謀反の  
企かな」といふまゝに、腰の刀を抜いて、新少貳に飛んでかゝりける。新少貳、飽く  
まで心はやき者なりければ、側なる將棊の盤をおつ取つて、突く刀を受け留め、長  
岡にむすと引つ組んで、上を下へぞ返しける。やがて少貳が郎従ども、あまた走り  
寄つて、上なる敵を三刀刺して、下なる主を助けければ、長岡六郎、本意を達せずし  
て、忽に命を失ひてけり。

少貳筑後の入道、「さてはわが謀反の企、はや探題に知られてけり。今は已むこ  
とを得ぬ所なり」とて、大友入道相共に、七千餘騎の軍兵を率して、同じき五月二十  
五日の午の刻に、探題英時の館へ押し寄せける。世の末の風俗、義を重んずる者は  
少なく、利に趨る人は多ければ、たゞ今まで付き従ひつる、筑紫九個國の兵どもも、  
恩を忘れて落ち失せ、名をも惜まで翻りける間、一朝の間の戦に、英時遂にうち負  
けて、忽に自害しければ、一族郎従三百四十人、續いて腹をぞ切つたりける。あは



行路難—白氏文集に、「行路難不<sub>レ</sub>在山兮不<sub>レ</sub>在水、唯在<sub>二</sub>人情反覆之間<sub>一</sub>。」

れなるかな、昨日は少貳、大友、英時に従ひて菊池を討ち、今日また少貳、大友、官軍に屬して英時を討つ。行路難、山にしも在らず、水にしも在らず、たゞ人情反覆の間にありと、白居易が書きたりし筆の跡、今こそ思ひ知られたれ。(卷十一)

官軍箱根を引き退く事

足利左馬の頭—直義。

大手箱根路の合戦は、官軍戦ふごとに利を得しかば、僅に控へて支へたる、足利左馬の頭を追ひ落して、鎌倉へ入らむずる事、掌の内にとありと、寄手みな勇み勇んで、明くるを遅しと待ちける所に、搦手より軍敗れて、寄手みな追ひ散らされぬと聞えければ、諸國の催し勢、路次の軍に降人に出でたりつる坂東勢、幕を棄て旗をそばめて、われさきにと落ち行きける間、さしも廣き箱根山に、透間もなく充滿したりつる陣に、人ありとも見えずなりにけり。

將軍—足利尊氏の僧稱。

執事船田入道は、一の攻口に敵を攻めて居たりけるが、敵陣に、「竹下の合戦は、將軍うち勝たせ給ひて、敵をみな追ひ散らして候ふなり」と、早馬の參つての、し

例の十六騎の黨—

卷十四、箱根竹下合戦の事の條に見え、義貞の兵の中にて、黨を結びたる十六人の特にすぐれたる射手。

野七里—伊豆の田方郡本山中の邊。箱根山を登るに、麓より四

十二町許を野七里とし、その上四十二町許を山七里といふ。伊豆の府—今の三

る聲を聞いて、まことやらむ、おぼつかなく思ひければ、たゞ一騎御方の陣々を打ちまはつて見るに、幕ばかり残つて、人のある陣はなかりけり。さては竹下の合戦に、御方はや打ち負けてけり、かくては叶ふまじと思ひて、いそぎ大將の陣へ參つて、事の仔細を申しければ、義貞暫く思案し給ひけるが、「何さま陣を少し引き退いて、落ち行く勢を留めてこそ合戦をもせめ」とて、船田入道をうちつれて、箱根山を引きて下り給ふ。その勢僅に百騎には過ぎざりけり。暫く馬を控へて後を見給へば、例の十六騎の黨、馳せ參じたり。また北なる山に沿うて、三つ葉柏の旗の見えたるは、敵か御方かと問ひ給へば、熱田の大宮司、百騎ばかりにて待ち奉る。その勢を併せて、野七里にうち出で給ひたれば、鷹の羽の旗一旒さし揚げて、菊池肥後の守武重、三百餘騎にて馳せ參る。

こゝに散所法師一人、西の方より來りけるが、船田が馬の前に畏まつて、「これはいづくへとて御通り候ふやらむ。昨日の暮ほどに、脇屋殿、竹下の合戦に打ち負けて落ちさせ給ひ候ひし後、將軍の御勢八十萬騎、伊豆の府に居あまつて、木の下、岩

官軍箱根を退く事



鳥町の地。

栗生と篠塚一十六騎黨の人々。

の陰、人ならずといふ處候はず。今この御勢ばかりにて御通り候はむ事、ゆめく叶ふまじき事にて候ふ」とぞ申しける。これを聞きて栗生と篠塚と、うち雙べて候ひけるが、笠踏ん張り、つとのびあがり、御方の勢をうち見て、「あはれ兵どもや、一騎當千の武者とは、この人々をぞ申すべき。敵八十萬騎に御方五百餘騎、好きほどの相手なり。いでくかけ破つて、道開いて參らせむ。續けや人々」と勇めて、數萬騎うち集つたる敵の中へかけて入る。府中にて一條の次郎三千餘騎にて戦ひけるが、新田左兵衛の督を見て、よき敵と思ひけるにや、馳せ雙んで組まむとしけるを、篠塚中に隔つて、打ちける太刀を弓手の袖に受けとめ、大の武者をかい掴んで、弓杖二丈ばかりぞ投げたりける。一條も大力のはやわざなりければ、投げられたれども倒れず、漂ふ足を踏み直して、なほ義貞に走りかゝらむとしけるを、篠塚馬より飛んで下り、兩膝合せて、さかさまに蹴倒す。倒るゝとひとしく、一條を起しも立てず、抑へて首かき切つてぞさし揚げける。一條が郎等ども、目の前に主を討たせて、心うき事に思ひければ、篠塚を討たむと、馬より飛び下り飛び下り、打つて

かゝれば、篠塚かい違うては蹴倒し、蹴倒しては首を取り、足をもためず一所にて、九人までこそ討つたりけれ。

これを見て、敵數十萬騎ありといへども、敢てかけ合せむともせざりければ、義貞しづくくと伊豆の府を打つて通りたまふに、宵より落ちてその邊にまぎれ居たる官軍ども、こゝかしこより馳せ附きける程に、義貞の勢二千騎ばかりになりける。この勢にては、たとひ、百重千重に取り籠めたりとも、なか駈け破つて通らざるべきと、悦びて行く所に、木瀬川に旗一旒うち立つて、勢の程二千騎ばかり見えたり。ちかづくとうち寄つて、旗の紋を見れば、二つ巴を旗にも笠符にも書きたり。さては小山判官にてぞあるらむ、一騎もあまさず討ち取れとて、山名、里見の人々、馬の鼻を並べて、をめてかゝりける程に、小山が勢四角八方にかけ散らされて、百騎ばかりは討たれにけり。

かくて浮島が原をうち過ぐれば、松原の陰に旗三旒さして、勢の程五百騎ばかり控へたり。「これは敵か御方か」と、在家の者に問ひ給へば、「これは昨日竹下より、



一の宮—尊良親王。

一の宮を追ひまゐらせて、所々にて合戦し候ひし、甲斐の源氏にて候ふ」とぞ答へ申しける。さては好き敵ぞ、取り籠めて討てとて、二千餘騎の勢を二手に分けて、北南より押し寄せれば、かなはじとや思ひけむ、一矢をも射ずして、降人になつてぞ出でたりける。この勢をさきに打たせて遙に行けば、中黒の旗を見つけて、落ちかくれ居たる官軍ども、こゝかしこより馳せつきて、七千餘騎になりけり。今はかうと勇みて、今井見附を過ぐる所に、また旗五旒さし揚げて、小山の上に敵二千騎ばかり控へたり。降人に出でたりつる甲斐の源氏に、「この敵は誰ぞ」と問ひ給へば、「これは武田、小笠原の者どもにて候ふなり」と答ふ。さては攻めよとて、四方より攻め上りけるを、高山薩摩の守義遠、「この敵をあまさず討たむとせば、御方もそこばく亡ぶべし。大敵をば開いて攻むるにこそ、利は候へ」と申しければ、由良、船田げにもとて、東一方をば明けて、三方より攻め上りければ、この敵ども、遠矢少々射捨て、東をさしてぞ落ち行きける。これより後は、敢て遮る敵もなかりければ、手負を相助け、さがる勢を待ちつれて、十二月十四日の暮候

今井見附—駿河の富士郡。

十二月—建武二年。

どに、天龍河の東の宿に著き給ひにけり。

折節河上に雨降りて、河の水、岸を浸せり。長途に疲れたる人馬なれば、渡す事叶ふまじとて、俄に在家をこぼちて、浮橋をぞ渡されける。この時もし將軍の大勢、後より追つ懸けてばし寄せたらましかば、京勢は一人もなく亡ぶべかりしを、吉良、上杉の人々、長僉議に三四日逗留ありければ、川の浮橋、程なく渡すまじて、數萬騎の軍勢、残る所なく一日がうちに渡してけり。諸卒をみな渡しはて、後、船田入道と大將義貞朝臣と二人、橋を渡り給ひけるに、いかなる野心の者かしたりけむ、浮橋を一間、張綱を切つてぞ捨てたりける。舍人、馬を引いて渡りけるが、馬と共にさかしまに落ち入つて、浮きつ沈みつ流れけるを、船田入道、「誰かある、あの御馬引き上げよ」と申しければ、後に渡りける栗生左衛門、鎧著ながら川中へ飛びつかり、二町ばかり遊ぎつきて、馬と舍人とを左右の手にさし揚げて、肩を越しける水の底を、靜に歩いて向うの岸へぞ著きたりける。この馬の落ち入りける時、橋二間ばかり落ちて、渡るべき様もなかりけるを、船田入道と大將と二人手



に手を取り組んで、ゆらりと飛び渡り給ふ。その跡に候ひける兵二十餘人、飛びかねて、しばし徘徊しけるを、伊賀の國の住人に名張八郎とて、名譽の大力のありけるが、いで渡して取らせむ」とて、鎧武者の總角おひまきを取つて中に提げ、二十人までこそ投げ越しけれ。今二人残つてありけるを、左右の脇にかかるくと挟んで、一丈あまり落ちたる橋をゆらりと飛びて、向うの橋桁を踏みけるに、踏所少しも動かず、誠に輕げに見えければ、諸軍勢遙にこれを見て、「あないかめし、いづれも凡夫の技にあらず。大將といひ、手の者どもといひ、いづれを棄つべしとも覺えねども、時の運に引かれて、この軍にうち負け給ひぬるうたてさよ」と、いはぬ人こそなかりけれ。

その後、浮橋を切つて、つき流されたれば、敵たとひ寄せ來るとも、さうなく渡すべき様もなかりけるに、引き立ちたる勢の習なれば、大將と同じ心になつて、今一軍せむと思ふ者なかりけるにや、矢矧に一日逗留し給ひければ、昨日まで二萬餘騎ありつる勢、十方へ落ち失せて、十分が一もなかりけり。早旦に宇都宮治部の大

あじか、洲侯―共  
に美濃の國の地  
名。

輔、大將の前に來つて申されけるは、「今夜官軍ども、夜もすがら落ち候ひけると承るが、げにも陣々まばらになつて、いづくにも人ありとも見え候はず。こゝにて若し數日を送らば、うしろに敵出で來て、路を塞ぐ事ありぬと覺え候ふ。あはれ今少し引き退いて、あじか、洲侯を前に當て、京近き國々に御陣を召され候へかし」と申されければ、諸大將、「げにも皇居の事、おぼつかなく候へば、さのみ都遠き所の長居は、然るべしとも、存じ候はず」とぞ同じける。義貞、「さらばともかくも、面々の御意見にこそ従ひ候はめ」とて、その日天龍河を立ちてこそ、尾張の國までは引かれけれ。(卷十四)

### 長年歸洛の事附内裏炎上の事

名和伯耆の守長年は、勢多を堅めて居たりけるが、山崎の陣破れて、主上はや東坂本へ落ちさせ給ひぬと聞えければ、これよりすぐに坂本へ馳せ參らむずる事は易けれども、今一度内裏へ馳せ參らで、すぐに落ち行かむずる事は、後難あるべし



十日—延元元(建武三)年正月。

とて、その勢三百餘騎にて、十日の暮ほどに、また京都へぞ歸りける。

今日は悪日とて、將軍未だ都へ入り給はざりけれども、四國、西國の兵ども、數萬騎打ち入つて、京白河に充ち滿ちたれば、帆掛船の笠符を見て、こゝに横ぎり、かしこに遮つて、討ち留めむとしけれども、長年かけ散じては通り、打ち破つては圍みを出で、十七度まで戦ひけるに、三百餘騎の勢、次第々々に討たれて、百騎ばかりになりにつり。されども長年遂に討たれざれば、内裏の据ゑ石の邊にて、馬より下り兜を脱ぎ、南庭に跪く。主上東坂本へ臨幸なつて、數尅の事なれば、四門悉く閉ぢて、宮殿まさに寂寞たり。長年つくづく、これを見て、さしも勇める夷あひすこる心にも、あはれの色やまさりけむ、涙を兩眼にあまして、鎧の袖をぞぬらしける。やゝしばらくやすらひて居たりけるが、敵の関の聲、ま近く聞えければ、陽明門の前より馬にうち乗つて、北白河を東へ、今路越えに懸つて、東坂本へぞ參りける。

その後、四國、西國の兵ども、洛中に亂れ入つて、行幸供奉の人々の家、屋形々々に火を懸けたれば、折ふし辻風はげしく吹きしいて、龍樓、竹苑、准后の御所、式部卿の親王常盤井殿、聖主御遊の馬場の御所、煙けぶり同時に立ち登りて、炎ほのほ四方に充ち滿ちたれば、猛火内裏にかゝつて、前殿、後宮、諸司八省、三十六殿、十二門、大廈の構へ徒に、一時の灰爐となりにつり。越王吳を亡して、姑蘇城一片の煙となり、項羽秦を傾けて、咸陽宮三月の火を熾さかにせし、吳越、秦楚のいにしへも、これにはよも過ぎじと、あさましかりし世の中なり。(卷十四)

### 主上山門より還幸の事

去月晦日逆徒都を落ちしかば、二月二日主上山門より還幸なつて、花山院を皇居になされにつり。同じき八日義貞朝臣、豊島、打出の合戦に打ち勝つて、則ち朝敵を萬里の波に漂はせ、同じく降人の五刑の難を宥めて京都へ歸り給ふ。事の體ゆゑしくぞ見えたりける。その時の降人一萬餘騎、皆もとの笠符の紋を書き直して著けたりけるが、墨の濃き薄き程見えて、あらはにしるかりけるにや、その次の日五條の辻に高札を立て、一首の歌をぞ書きたりける。

主上山門より還幸の事

去月—延元元年正月。  
逆徒—足利尊氏。



二筋の中のしろみを塗りかくし新田にた々々しげな笠じるしかな

都鄙數個度の合戦の體、君殊に叡感淺からず、則ち臨時の除目を行はれて、義貞を左近衛の中將に任ぜられ、義助を右衛門の佐に任ぜられけり。天下の吉凶必ずしもこれにはよらぬことなれども、今の建武の年號は公家のため不吉なりけりとて、二月二十五日に改元ありて、延元に移さる。近日朝廷已に逆臣のために傾けられむとせしかども、程なく靜謐に屬して、一天下また泰平に歸せしかば、この君の聖德天地に叶へり。如何なる世の末までも、誰かは傾け申すべきと、群臣いつしか危きを忘れて、慎む方のなかりける、人の心ぞおろかなる。(卷十五)

### 正成兵庫に下向の事

尊氏卿、直義朝臣、大勢を率して上洛の間、要害の地に於いて防ぎ戦はむ爲に、兵庫に引き退きぬる由、義貞朝臣、早馬を參らせて、内裏に奏聞ありければ、主上楠判官正成を召されて、「急ぎ兵庫へ罷り下り、義貞に力を合せて合戦を致すべし」と仰

せられければ、正成長まつて奏しけるは、「尊氏卿、既に筑紫九國の勢を率して上洛候ふなれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候ふらむ。御方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乗つたる大勢にかけ合つて、世の常の如くに合戦を致し候はむ、御方決定うち負け候ひぬと覺え候ふなれば、新田殿をもたゞ京都へ召し候うて、さきの如く山門へ臨幸なり候ふべし。正成も河内へ罷り下り候うて、畿内の勢を以て河尻をさし塞ぎ、兩方より京都を攻めて、兵糧をつからかし候ふ程ならば、敵は次第に疲れて落ち下り、御方は日々に随つて馳せ集り候ふべし。その時に當つて、新田殿は山門よりちし寄せられ、正成は搦手にて攻め上り候はむ、朝敵を一戦に滅す事ありぬと覺え候ふ。新田殿も定めてこの料簡候ふとも、路次にて一軍もせざらむは、むげにいふかひなく、人の思はむずる所を恥ぢて、兵庫に支へられたりと覺え候ふ。合戦はともかくても、始終の勝こそ肝要にて候へ。よくく遠慮を運らされて、公議を定めらるべきにて候ふ」と申しければ、まことに軍旅のことは兵に讓られよと、諸卿僉議ありけるに、重ねて坊門の宰相清忠申されけるは、「正成が申す所も、



五月十六日—延元元年。

そのいはれありといへども、征伐の爲にさし下されたる節度使、未だ戦をなさざるさきに、帝都を棄て、一年の内に二度まで、山門へ臨幸ならむ事、かつうは帝位の輕きに似、又は官軍の道を失ふ所なり。たとひ尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東八個國を従へて上りし時の勢には、よも過ぎじ。およそ戦の始より、敵軍敗北の時に至るまで、御方小勢なりといへども、毎度大敵を攻め靡けずといふ事なし。これ全く武略の勝れたる所にはあらず、たゞ聖運の天にかなへる故なり。然れば、たゞ戦を帝都の外に決して、敵を鉄鉞の下に滅さむ事、何の仔細かあるべきなれば、たゞ時をかへず、楠罷り下るべし」とぞ仰せ出されける。正成「この上は、さのみ異議を申すに及ばず」とて、五月十六日に都を立つて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。

正成これを最後の合戦と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふやうありとて、櫻井の宿より河内へ返し遣すとて、庭訓を残しけるは、「獅子子を産んで三日を経る時、數千丈の石壁よりこれを擲ぐ。その子、獅子の機分あ

養由が矢先—淮南子に、養由基、楚將善射、去三楊葉二百步射之、百發百中。百里奚は—史記の秦本紀に、遂被兵、使百里奚子孟明視、蹇叔子西乞術、及白乙丙將兵行日、百里奚蹇叔二人哭之、穆公聞怒

れば、教へざるに中より跳ね返りて、死することを得ずといへり。況や汝既に十歳にあまりぬ。一言耳にとゞまらば、わが教誡に違ふことなかれ。今度の合戦、天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見むこと、これを限りと思ふなり。正成既に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代になりぬと心得べし。然りといへども、一旦の身命を助からむために、多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人も死に残つてあらむ程は、金剛山のほとりに引き籠つて、敵寄せ來らば、命を養由が矢先に懸けて、義を紀信が忠に比すべし。これぞ汝が第一の孝行ならむずると、泣く／＼申し含めて、各東西へ別れにけり。昔の百里奚は、穆公晉の國を伐らし時、戦の利なからむ事を鑒みて、その將孟明視に向つて、今をかぎりの別れを悲み、今の楠判官は、敵軍都の西に近づくと聞きしより、國必ず滅びむことを愁へて、その子正行を留めて、なき跡までの義を勸む。彼は異國の良弼、これは我が朝の忠臣、時千載を隔つといへども、前聖後聖一揆にして、有りがたかりし賢佐なり。

正成兵庫に下向の事



曰、孤發兵而子  
 沮、哭吾軍一何  
 也、一老曰、臣  
 非三放沮君軍、  
 軍行臣子與往、  
 臣老遲還、恐  
 不三相見、故哭  
 耳、一老退謂其  
 子、曰、汝軍即  
 敗、必於三殺阨  
 矣。」

正成兵庫に著きければ、新田左中將やがて對面し給ひて、叡慮の趣をぞ尋ね問は  
 れける。正成長まつて、所存の通りと勅諭の様とを、委しく語り申しければ、「まこ  
 とに敗軍の小勢を以て、機を得たる大敵に戦はむ事、かなふべきにてはなけれど  
 も、去年關東の合戦にうち負けて上洛せし時、路にてなほ支へざりし事、人口の嘲  
 り遁るゝ所を得ず。それこそあらめ、今度西國へ下されて、數個所の城郭一つも落  
 し得ずして、結句敵の大勢なるを聞きて、<sup>ひたひた</sup>一支もせず、京都まで遠引きしたらむ  
 は、餘りにいふかひなく存ずる間、戦の勝負をば見ずして、たゞ一戦に義を勧めば  
 やと、存ずるばかりなり」と宣ひければ、正成重ねて申しけるは、「衆愚の諤々は、一  
 賢の唯々には如かずと申し候へば、道を知らざる人の譏をば、必ずしも御心に懸け  
 らるまじきにて候ふ。たゞ戦ふべき所を見て進み、かなふまじき時を知りて退く  
 をこそ、良將とは申し候ふなれ。さてこそ暴虎憑河、死すとも悔なからむ者には與  
 せじと、孔子も子路を誡められし事の候へ。その上元弘の初には、平太守の威猛を  
 一時にくだかれ、今年の春は、尊氏の逆徒を九州へ退けられ候ひし事、聖運とは申

暴虎憑河—論語の  
 述而篇に、「暴虎  
 憑河、死而無悔  
 者、吾不與。」  
 平太守—北條高  
 時。

しながら、ひとへに御計略の武徳に依りし事にて候へば、合戦の道に於いては、誰  
 かさみし申し候ふべき。殊更今度西國より御上洛の事、御沙汰の次第、一々に道に  
 當つてこそ存じ候へ」と申しければ、義貞朝臣まことに顔色解けて、夜もすがらの  
 物語に、數盃の興をぞ添へられける。後に思ひ合すれば、これを正成が最後なり  
 けりと、あはれなりしことどもなり。(卷十六)

### 正成兄弟討死の事

楠判官正成、舍弟帶刀正季に向つて申しけるは、「敵前後を遮つて、御方の陣を隔  
 てたり。今は遁れぬ所と覺ゆるぞ。いざやまづ、前なる敵を一散らし追ひまくつ  
 て、後なる敵に戦はむ」と申しければ、正季、「然るべく覺え候ふ」と同じて、七百餘  
 騎を前後に立て、大勢の中へ駆け入りける。左馬の頭の兵ども、菊水の旗を見  
 て、よき敵なりと思ひければ、取り籠めてこれを討たむとしけれども、正成、正季、  
 東より西へ破つて通り、北より南へ追ひ靡け、よき敵と見るをば馳せ雙べて、組ん



で落ちては首を取り、合はぬ敵と思ふをば、一太刀打つてかけ散らす。正成と正季と、七度合ひて七度分る。その心、ひとへに左馬の頭に近づき、組んで討たむと思ふにあり。遂に左馬の頭の五十萬騎、楠が七百餘騎にかけ靡けられて、また須磨の上野の方へぞ引き返しける。直義朝臣の乗られたりける馬、鏃を蹄に踏み立て、右の足を引きける間、楠が勢に追つめられて、既に討たれ給ひぬと見えける所に、薬師寺十郎次郎たゞ一騎、蓮池の堤にて返し合せて、馬より飛んで下り、二尺五寸の小長刀の石づきを取り延べて、懸る敵の馬の平頸、むながいの引き廻し、切つては刎ね倒し刎ね倒し、七八騎がほど切つて落しけるその間に、直義は馬を乗りかへて、はる／＼落ち延びたまひけり。左馬の頭、楠に追つ立てられて引き退くを、將軍見たまひて、「新手を入れかへて、直義討たすな」と下知せられければ、吉良、石堂、高、上杉の人々六千餘騎にて、湊河の東へかけ出でて、跡を切らむとぞ取り巻きける。

正成、正季、また取つて返して、この勢にかゝり、かけては打ち違へて殺し、かけ

入つては組んで落ち、三時が間に十六度まで闘ひけるに、その勢次第々に滅びて、後は僅に七十三騎にぞなりにける。この勢にても打ち破つて、落ちば落つべかりけるを、楠、京を出でしより、世の中の事、今はこれまでと思ふ所存ありければ、一足も引かず戦つて、機既に疲れければ、湊河の北に當つて、在家の一村ありける中へ走り入つて、腹を切らむ爲に、鎧を脱いでわが身を見るに、斬創十一個所までぞ負ひたりける。この外七十二人の者どもも、みな五個所三個所の創を被らぬ者はなかりけり。楠が一族十三人、手の者六十餘人、六間の客殿むまに二行になみ居て、念佛十返ばかり同音に唱へて、一度に腹をぞ切つたりける。正成座上に居つ、舍弟の正季に向つて、「そも／＼最期の一念に依つて、善惡の生を引くといへり。九界の間に、いづくか御邊の願なる」と問ひければ、正季、から／＼とうち笑ひて、「七生までたゞ同じ人間に生れて、朝敵を滅さばやとこそ存じ候へ」と申しければ、正成よにうれしげなる氣色にて、「罪業深き惡念なれども、われもかやうに思ふなり。さねらば同じく生をかへて、この本懐を達せむ」と契つて、兄弟ともにさし違へ



て、同じ枕に伏しにけり。橋本八郎正員、宇佐美河内の守正安、神宮寺の太郎兵衛正師、和田五郎正隆を始として、むねとの一族十六人、相隨ふ兵五十餘人、思ひくゝに並み居て、一度に腹をぞ切つたりける。菊池七郎武朝は、兄の肥前の守が使にて、須磨口の合戦の體を見に來たりけるが、正成が腹を切る所へ行き合ひて、をめをめしく見棄て、は、いかゞ歸るべきと思ひけるにや、同じく自害をして、炎の中に伏しにけり。

そもくゝ元弘よりこの方、忝くもこの君にたのまれ參らせて、忠を致し功にほこる者、幾千萬ぞや。然れどもこの亂また出で來て後、仁を知らぬ者は、朝恩を捨て、敵に屬し、勇なき者は、苟くも死を免れむとて、刑戮にあひ、智なき者は、時の變を辨ぜずして、道に違ふ事のみありしに、智仁勇の三徳を兼ねて、死を善道に守るは、古より今に至るまで、正成ほどの者は未だなかりつるに、兄弟ともに自害しけるこそ、逆臣横しまに威を振ふべき、その前表のしるしなれ。(卷十六)

### 正成が首故郷へ送る事

湊川にて討たれし楠判官が首をば、六條河原に懸けられたり。去んぬる春もあらぬ首を懸けたりしかば、これもまたさこそあらめといふ者多かりけり。

疑は人によりてぞ残りけるまさしげなるは楠が首と、狂歌を札に書いてぞ立てたりける。

その後尊氏卿、楠が首を召されて、「朝家私日、久しく相馴れし舊好の程も不便なり。跡の妻子ども、今一度空しき形をも、さこそ見たく思ふらめ」とて、遺跡へ送られけり。楠が後室、子息正行これを見て、判官今度兵庫へ立ちし時、さまく申し置きし事ども多かる上、今度の合戦に必ず討死すべしとて、正行を留め置きしかば、出でしを限りの別れなりとは、かねてより思ひ設けたる事なれども、形を見ればそれながら、目塞がり色變じて、かはりはてたる首を見るに、悲みの心胸に満ちて、歎きの涙せきあへず。今年十一歳になりける帶刀、父が首の生きたりし時にも

まさしげ―正しき  
有様の意と正成  
の名と兼ね用ひ  
たり。



似ぬありさま、母が歎きのせむ方もなげなるさまを見て、流るゝ涙を袖におさへて、持佛堂の方へ行きけるを、母あやしく思ひて、則ち妻戸の方より行き見て見れば、父が兵庫へ向ふ時、形見に留めし菊水の刀を、右の手に抜き持ちて、袴の腰をおし下げて、自害をせむとぞし居たりける。母いそぎ走り寄つて、正行が小腕に取りついで、涙を流して申しけるは、「梅檀は二葉より芳しといへり。汝幼くとも父が子ならば、これ程の理に迷ふべしや。小心にもよく、事のやうを思ひて見よかし。故判官が兵庫へ向ひし時、汝を櫻井の宿より返し留めしことは、全く跡を弔はれむ爲にあらず。腹を切れとて残し置きしにもあらず。われたとひ運命盡きて、戰場に命を失ふとも、君いづくにも御座ありと承らば、死に残りたらむ一族若黨どもをも扶持し置き、今一度軍を起し、御敵を滅して、君を御代にも立て參らせよといひ置きし所なり。その遺言つぶさに聞きて、われにも語りし者が、いつの程に忘れけるぞや。かくては父が名を失ひはて、君の御用にあひ參らせむ事あるべしとも覺えず」と、泣く／＼諫め留めて、抜きたる刀を奪ひ取れば、正行腹を切り得

禮盤—佛前におきたる禮拜の臺座。

ず、禮盤の上より泣き倒れ、母と共にぞ歎きける。

その後よりは正行、父の遺言、母の教訓、心に染み、肝に銘じつゝ、ある時は童べどもをうち倒し、首を取るまねをして、「これは朝敵の首を取るなり」といひ、ある時は竹馬に鞭を當て、「これは將軍を追つ懸け奉る」などいひて、はかなき手ずさみに至るまでも、たゞこの事をのみわざとせる、心の中こそ恐ろしけれ。(卷十六)

### 義貞北國落の事

十月十日—延元元年。 春宮—恒良親王。  
明くれば十月十日の巳の尅に、主上は腰輿に召されて今路を西へ還幸なれば、春宮は龍蹄に召されて戸津を北へ行啓なる。還幸の供奉にて京都へ出でける人々には、吉田内大臣定房、萬里の小路大納言宣房、御子左の中納言爲定、侍從中納言公明、坊門の宰相清忠、勸修寺の中納言經顯、民部卿光經、左中將藤長、頭の辨範國、武家の人々には、大館左馬の頭氏明、江田兵部の少輔行義、宇都宮治部の大輔公綱、菊池肥後の守武俊、仁科信濃の守重貞、春日部左近藏人家繩、南部甲斐の守爲重、伊達



龍駕一天皇の車駕  
をいふ。こゝに  
ては皇太子の御  
乗物の意に用ひ  
たり。  
妙法院の宮一尊澄  
法親王。  
阿曾の宮一懷良親  
王。

藏人家貞、江戸民部の丞景氏、本間孫四郎重氏、山徒の道場坊助註記祐覺、都合その勢七百餘騎、腰輿の前後に相從ふ。行啓の御供にて、北國へ落ちける人々には、一の宮中務の卿親王、洞院左衛門の督實世、同じき少將定世、三條の侍從泰季、御子左の少將爲次、頭の大行房、子息少將行尹、武士には新田左中將義貞、子息越後の守義顯、脇屋右衛門の佐義助、子息式部の大夫義治、堀口美濃の守貞満、一井兵部大輔義時、額田左馬の助爲綱、里見大膳の亮義益、大江田式部の大夫義政、鳥山修理の亮義俊、桃井駿河の守義繁、山名兵庫の助忠家、千葉の介貞胤、宇都宮信濃の將監泰藤、同じき狩野の將監泰氏、河野備後の守通治、同じき備中の守通繩、土岐出羽の守頼直、一條の駿河の守爲治、その外山徒少々相雜はつて、都合その勢七千餘騎、案内者を前に打たせて、龍駕の前後に打ち圍む。この外妙法院の宮は、御船に召されて遠江の國へ落ちさせ給ふ。阿曾の宮は山伏の姿になつて、吉野の奥へ忍ばせ給ふ。四條の中納言隆資卿は紀伊の國へ下り、中の院の少將定平は河内の國へ隠れ給ふ。昨日までも、聖運遂に開けば、錦を著て故郷へ歸り、知らぬ里、見ぬ浦山の旅宿を

南に翔り云々一本  
朝文粹及び和漢  
朗詠集に見ゆ。

霜に響く遠寺一張  
繼の楓橋夜泊の  
詩、江落烏啼霜  
滿、江楓漁火  
對愁眠。姑蘇城  
外寒山寺、夜半  
鐘聲到客船。  
梁園一梁の孝王が  
苑園の遊を好み  
し故事。

も、語り出さばなかくに、うかりし節も悲しさも、忘形見となりぬべしと、心々の有様に身を慰めてありつるに、君臣父子萬里に隔り、兄弟夫婦十方に別れ行けば、或は再會の期なきことを悲み、或は一身の置き處なきことを思へり。今も逆旅の中に、重ねて逆旅の中に行く。行くも敵の陣、歸るも敵の陣なれば、誰か先に討たれて哀と聞かれむずらむ、誰か後に死してなき數を添へむずらむと、詞に出してはいはねども、心に思はぬ人はなし。「南に翔り北に嚮ふ、寒温を秋の鷹に附け難し。東に出で西に流る、唯瞻望を曉の月に寄す」と、江相公の書きたりし、別れに送る筆の跡、今の涙となりけり。(卷十七)

### 吉野へ潜幸の事

主上は山門より還幸なりしかども、花山院の故宮こきやうにおし籠められさせ給ひ、宸襟を蕭颯たる寂寞の中に惱まざる。霜に響く遠寺の鐘に御枕を敲て、楓橋の夜の泊りに御あはれを添へられ、梢にあまる北山の雪に御簾を撥げては、梁園の昔の御遊



に御涙を催さる。紫宸に星を列ねし百司の老臣も、満天の雲に掩はれ、参り仕ふる人一人もなければ、天下の事いかになりぬらむと、尋ねきこしめさるべきたよりもなし。「そもく、朕が不徳、何事なれば、かほどに佛神にも放たれ奉りて、逆臣の爲に犯さるらむ」と、舊業の程もあさましく、この世の中もたのみ少なくおぼしめされければ、寛平の遠き跡をも尋ね、花山の近き例をも追はばやとおぼしめし立たせ給ひける所に、刑部の大輔景繁、武家の許しを得て、たゞ一人伺候したりけるが、勾當の内侍を以て、ひそかに奏聞申しけるは、「越前の金崎の合戦に、寄手毎度うち負け候ふなる間、加賀の國、劔、白山の衆徒等御方に参り、富樫の介が籠つて候ふ那多の城を攻め落して、金崎の後攻を仕らむと企て候ふなる。これを聞きて、還幸の時供奉仕つて京都へまかり上り候ひし、菊池掃部の助武俊、日吉加賀の法眼以下、皆おのが國々へ逃げ下つて義兵を擧げ、國中を討ち從へて候ふなる間、天下の反覆遠からじと、謳歌の説、耳に滿ち候ふ。いそぎ近日の間に、夜にまぎれて大和の方へ臨幸なり候うて、吉野、十津川の邊に皇居を定められ、諸國へ綸旨をなし下され、義

貞が忠心をも助けられ、皇統の聖化を耀かされ候へかし」と、委細にぞ申し入れたりける。

主上、事の様をつぶさにきこしめされ、さては天下の武士、なほ帝徳を慕ふ者多かりけり。これ天照太神の、景繁が心に入りかはらせ給ひて、示さるゝものなりと思しめされければ、「明夜必ず寮の御馬を用意して、東の小門のほとりに相待つべし」とぞ仰せ出されける。相圖の刻限にもなりければ、三種の神器をば、新勾當の内侍に持たせられて、童部わらんべの踏みあけたる築地つちぢの崩れより、女房の姿にて忍び出でさせ給ふ。景繁かねてより用意したる事なれば、主上をば寮の御馬にかき乗せ参らせ、三種の神器をみづから荷擔して、未だ夜のうちに大和路にかゝりて、梨間の宿まで落し参らせける。白晝に南都をかくの如くにて通らせ給はゞ、人のあやしめ申すこともこそあれとて、主上をばあやしげなる張輿に召しかへさせ参らせて、供奉の上北面どもを輿昇になし、三種の神器をば足つきたる行器ほかひに入れて、もの詣でする人の破籠など入れて持たせたるさまに見せて、景繁夫おになつてこれを持

梨間―山城の綴喜  
郡青谷村奈島。

行器―食物を容れ  
て持ち運ぶ器。  
夫―夫役の人夫。



八月一延元元年。

賀名生一吉野郡。

つ。いづれもみな習はぬわざなれば、急ぐとすれども行きやらで、その日の暮ほどに、内山までぞ著かせ給ひける。こゝまでも、若し敵の追つかけ参らす事もやあらむずらむと、安き心もなかりければ、今夜いかにもして吉野の邊までなし参らせむとて、こゝより寮の御馬を参らせたれども、八月二十八日の夜の事なれば、道いと暗うして、行くべきやうもなかりける所に、俄に春日山の上より金峯山の嶺まで、光物飛び渡る勢に見えて、松明の如くなる光、夜もすがら天を耀かし、地を照しける間、行路分明に見えて、程なく夜の曙に、大和の國賀名生といふ所へぞ落ち著かせ給ひける。

この處のありさま、里遠くして人煙かすかに、山深うして鳥の聲も稀なり。柴といふものをかこひて家とし、芋、野老を掘つて世を渡るばかりなれば、皇居になすべき所もなく、供御に備ふべきその設けも尋ね難し。かくてはいかゞあるべきなれば、吉野の大衆を語らひて、君を入れ参らせむと思ひて、景繁則ち吉野へ行き向ひ、當寺の宿老吉水の法印にこの由を申しければ、満山の衆徒を語らひ、藏王堂に

清見原の天皇一天  
武天皇。

集會して僉議しけるは、「古清見原の天皇、この所に御幸なりしも、程なく天下太平を致さる。その先蹤について、今仙躡を促さるゝ事、衆徒何ぞ異議に及ぶべけむや。就中昨夜の光物、臨幸の道を照す、これしかしながら、當山の鎮守藏王權現、小守勝手の大明神、三種の神器を擁護し、萬乗の聖主を鎮衛し給ふ瑞光なり。暫くも猶豫あるべからず」とて、若大衆三百餘人、みな甲冑を帯して、御迎にぞ参りける。この外、楠帶刀正行、和田次郎、真木の定観、三輪の西阿、紀伊の國には恩地、牲河、貴志、湯淺、五百騎、三百騎、引きも切らず、面々馳せまゐりける間、雲霞の勢を腰輿の前後に圍ませて、ほどなく吉野へ臨幸なる。春雷一たび動く時、蟄蟲萌蘇する心ちして、聖運忽に開けて、功臣既に顯れぬと、人みな歡喜のおもひをなす。(卷十八)

### 金崎の城落つる事

金崎の城には、瓜生が後攻をこそ命にかけて待たれしに、判官うち負けて、軍勢そくばく討たれぬと聞えければ、たのむ方なくなりはて、心細うぞ覺えける。日々

金崎の城落つる事

瓜生一判官保。敦賀の賊徒を攻めて戦死。



に随つて兵糧乏しくなりければ、或は江の魚を釣りて飢を資け、或は磯菜を取つて日を過す。しばしが程こそ、かやうのものに命を繼いで軍をもしけれ、あまりに事迫りければ、寮の御馬を始として、諸大將の立てられたる祕藏の名馬どもを、毎日二匹づつさし殺して、各々これをぞ朝夕の食には當てたりける。

これにつけても、後攻する者なくては、この城今十日とも堪へ難し、總大將御兄弟、ひそかに城を御出で候うて、柚山へ入らせ給ひ、與力の軍勢を催されて、寄手を追ひ拂はれ候へかすと、面々に勸め申されければ、げにもとて、新田左中將義貞、脇屋右衛門の佐義助、洞院左衛門の督實世、河島左近藏人維頼を案内者にて、上下七人、三月五日の夜半ばかりに城を忍び抜け出でて、柚山へぞ落ち著かせ給ひける。

瓜生、宇都宮な、めならず悦びて、今一度金崎へ向つて、先度の恥を雪め、城中の思を蘇せしめむと、さまざま思案を運らしけれども、東風漸く静になつて、山路の雪もむら消えければ、國々の勢も寄手に加はりて、兵十萬騎に餘れり。義貞の勢は僅に五百餘人、心ばかりは猛けれども、馬、物具もはかしくしからねば、とやせまし、

三月―延元二年。

瓜生―戦死したる保の弟。

かくやせましと身を揉うで、二十日あまりを過しける程に、金崎にははや、馬どもをもみな食ひ盡して、食事を斷つ事十日ばかりになりければ、軍勢どもも、今は手足もはたらかずなりにけり。

こゝに大手の攻口にありける兵ども、高の越後の守が前に來つて、「この城はいかさま兵糧につまりて、馬をばし食ひ候ふやらむ。初の頃は、城中に馬の四五十匹もあるらむと覺えて、常に湯洗ひをし、水を蹴させなんどし候ひしが、この頃は一匹も引き出す事も候はず。あはれひと攻め攻めて見候はばや」と申しければ、諸大將、然るべしと同じて、三月六日の卯の尅に、大手搦手十萬餘騎、同時に切岸の下、堀際にぞつたりける。城中の兵ども、これを防がむ爲に、木戸の邊までよるめき出でたれども、太刀を使ふべき力もなく、弓を挽くべきやうもなければ、たゞ徒に櫓の上に登り、堀の陰に集つて、息つき居たるばかりなり。寄手どもこのありさまを見て、「さればこそ城は弱りてけれ。日の中に攻め落さむ」とて、亂杭、逆茂木を引き退け、堀を打ち破つて、三重にこしらへたる二の木戸までぞ攻め入りける。

兵糧につまりて―孫子、行軍篇に「殺し馬肉食者、軍無し糧也。」